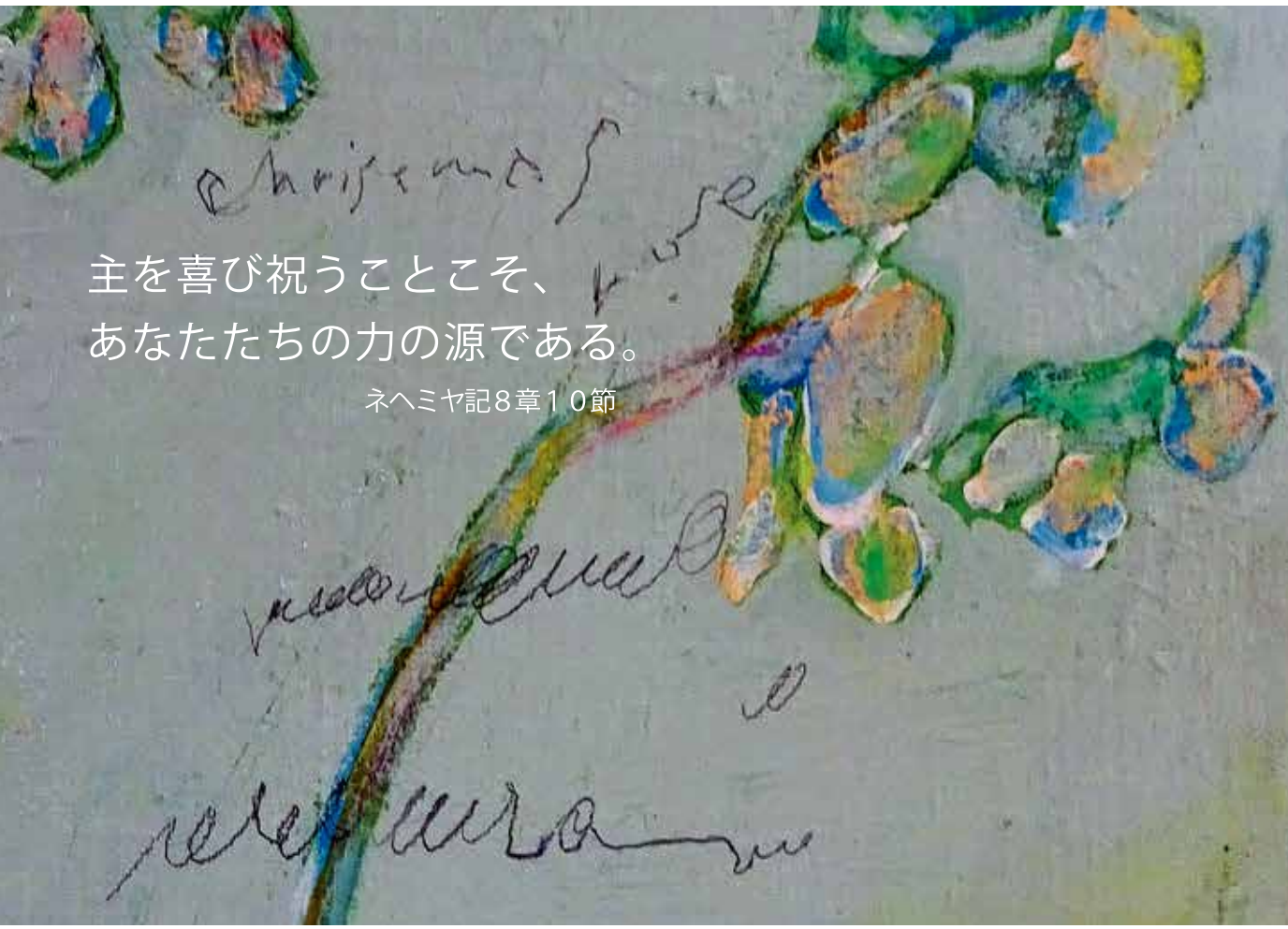
日本キリスト改革派教会　大会教育委員会

教会学校教案誌

church school curriculum



vol.81
2021年4~6月
「救済史」
に基づく二年サイクル　第１年

障がいある子どもたちに注がれる主の愛 …… 小澤路華
執事職について …… 吉田　実
これからの教会学校 …… 西堀　元
【献身のすすめ】私はなぜ牧師になったのか …… 袴田康裕
信仰告白のあかし …… 井上佑斗

2021年４～６月カリキュラム（第81号）

―『子どもと親のカテキズム』に基づく２年サイクル　第２年―

月　日 教会暦・行事		子どもと親のカテキズム	参照教理問答
	主　　題	聖書箇所	暗唱聖句
	単元の目標		
４月４日 復活祭	復活のキリスト	―	ウ小28
		ヨハネ20:24－29	ヨハネ20:29
	復活の勝利によって救いが成就。生けるキリストを語る。		
４月11日	死後の祝福	問40	ウ小37、ウ告白32:1
		ルカ23:39－43	テサロニケ一5:23
	私たちは死で終わらず、死の時、魂は神と共に、体は墓の中で復活を待ちます。		
４月18日	体の復活	問41	ウ大87, 90、ウ小38、ハイデル57, 58
		黙示録21:1－4	ローマ6:5
	「完成された御国」で、体の復活の祝福を得て、讃美と喜びにあふれる日を信じて生きよう		
４月25日	教会と共に歩む道・ キリストの体	問42	ウ告白25，26章
		コリント一12:12－27	コリント一12:27
	教会共同体を完成させ、世の空気に流されない個人を鍛える無二の価値を持つキリスト教信仰を説こう		
５月２日	母なる教会による 命の養い	問43	ウ小29－31
		詩編131編1－3	詩編131:2
	教会の礼拝において神は臨在を明らかにし、母なる教会で私たちを養ってくださる		
５月９日	教会の使命	問44	ハイデ32
		マタイ28:18－20	マタイ28:19－20
	教会は、神の使命を果たすために地上に建てられた。三つの使命を果たす時教会は祝福の基となる		
５月16日	主の日の祝福	問45	子ども69、ウ大116、ハイデル103
		ヨハネ20:19－23	ヨハネ20:19
	主イエスは、復活日の出会いの体験を、主日ごとに、繰り返して下さる。イエスさまに会える喜びの礼拝を		
５月23日 聖霊降臨祭	聖霊降臨	―	子ども34, 35、ウ小29, 30
		使徒2:1－13	使徒1:8
	聖霊により教会が始まった。教会を建てて民を養われる神への感謝に招く		
５月30日	礼拝式の祝福	問46	ウ告白21、ウ小88
		使徒20:7－12	ネヘミヤ8:10
	神はご自身の喜びを満たすため私たちを礼拝に招かれる。真心を込めて、その喜びに与ろう		
６月６日	恵みの方法	問47，48	ウ小85, 88、ウ大153, 154
		使徒2:43－47	使徒2:42
	神様は恵みを与える手段を私たちに備えてくださった。大切にこの手段を用いよう		
６月13日	みことばの恵み	問49	ウ小89、90、ウ大155－160
		使徒20:17－38	ヤコブ1:21
	御言葉をイエスさまを指し示すものとして読み、語りかけて下さる主に聞きしたがって歩もう		
６月20日	礼典の恵み	問50	ウ小91－93、ウ大161－164、ウ告白27
		マタイ28:18－20	コリント一11:24
	見えない神は、信仰の弱い私たちのために見える物を通して、信仰を養って下さる。礼典に招こう		
６月27日	洗礼の恵み	問51	ウ小94、ハイデ問70
		ガラテヤ3:26－29	ガラテヤ3:27
	洗礼によって私たちはキリストの死と復活に結ばれ神の子とされる。一方的な神の恵みに感謝しよう		

教会学校教案誌・第81号（2021年４・５・６月号）

も　く　じ

2021年４・５・６月カリキュラム
まえがき
「教案誌が示してきた改革派教会の説教」　辻　幸宏…… 4
巻頭説教
「墓場からの道〜イースターの喜び〜」　新井　主一…… 5
障がいある子どもたちに注がれる主の愛（2）　小澤　路華…… 8
執事職について（1）　吉田　実……11
これからの教会学校　ブック・ピープル　西堀　元……14
献身のすすめ　私はなぜ牧師になったのか　袴田　康裕……16
信仰告白のあかし　全国の若き信徒への手紙　井上　佑斗……19

聖書黙想・説教展開例・分級展開例……21
４月 ４日 ……22
４月 11日 ……30
４月 18日 ……37
４月 25日 ……44
５月 ２日 ……50
５月 ９日 ……56
５月 16日 ……63
５月 23日 ……69
５月 30日 ……75
６月 ６日 ……82
６月 13日 ……88
６月 20日 ……95
６月 27日 …… 102

聖句カード…… 109
次号カリキュラム（2021年7・8・9月）…… 111
教案誌自由募金案内…… 112
大会教育委員会出版物案内…… 113
あとがき…… 114

まえがき

教案誌が示してきた改革派教会の説教

辻　　幸宏

教会学校教案誌が、第84号をもって廃刊されることとなりました。継続することには意義がありますが、廃刊するにあたっては委員会の決断があったことかと思います。正直なところ、私自身が編集委員として携わっていた頃も、作業に追われ、いつまで続けるのだろうかと度々思いましたので、委員会の決断を尊重したいと思います。

教案誌を顧みる時、その中心に、改革派教会の教会学校における説教を提示することにあったのではないかと思います。「救済史に基づく説教」と「カテキズムに基づく説教」がほぼ2年サイクルで提示されてきました。

私自身、現在の教会に遣わされて以来、説教を作成するにあたって、これらのことを基本に据えて行っています。教会における説教は、連続講解説教で行っています。それは旧約聖書、福音書、手紙と異なりますが、聖書全体・救済史における位置付けを確認して行うこととなります。そのために聖書全体を理解するために、教会では別途、聖書概論の学びを行いました。そして、教会員一人ひとりが、聖書を読むにあたって、聖書全体の位置付け、そして福音の向かう方向を確認しつつ読み進むことができるようにしました。

また同時に、毎回の礼拝においては、説教箇所にふさわしいカテキズム（ウェストミンスター信仰規準：信仰告白・大教理問答・小教理問答）の中から1箇所を選び、信仰告白を行っています。

つまり、説教で取り上げる聖書テキストの位置付けを、聖書全体の時間的な位置付けと方向性（創造→旧約→イエス・キリスト→新約→現在→終末→神の国の完成）を救済史的において確認し、併せてカテキズムにおける教理的な位置付け（神について、私たち自身と罪について、教会について、信仰生活について）を確認することにより、説教の目標がはっきりと見え、提示できるようになったのではないかと思っています。

聖書を読み、解き明かす時、一つの御言葉を深く理解することも大切です。しかし、時間的・教理的な全体像を確認せずに、一つの御言葉を理解しようとすれば、改革派教会が目指す神中心から離れ、恣意的・自己中心的になる危険性があります。

だからこそ教案誌が20年間に築き上げてきた救済史とカテキズムに基づく説教を行うことにより、改革派教会を建てていくことは、一つの財産として継続されていくことが必要ではないかと思っています。

わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。

（マタイによる福音書7章24節）

（大宮教会牧師）

巻頭説教

墓場からの道　～イースターの喜び～

マルコによる福音書16章１～８節

新　井　主　一

今年は、この教案誌が始まります４月の第一週の主の日がイースター礼拝です。

イースターは、イエスキリストが復活したことを証する礼拝です。

しかし、私たちの国でイースターは、イエスキリストの復活というよりは、むしろ春の訪れによって命の息吹と躍動を感じる、そういう自然の恵みを謳歌した春のお祭りとして認知されてきているようです。イースターの本当の意味が無視されて、春のお祭りに変えられてしまっているわけです。鳥がさえずり、所々で花が咲き誇る、のどかな春のお祭りです。

しかし､聖書が示す本当のイースターは、そんなのんきなお祭りどころではありません。主イエスの復活を描いた御言葉は､「恐ろしかったからである（８節)」で終わっています。

主イエスの復活の現場を最初に目撃した婦人たちは、恐ろしさに震え上がって墓から逃げ去った、実にこれが最初のイースターであったのです。

主イエスが復活された日の朝、最初に行動を起こしたのは、婦人たちでした。それは、イエスの墓に行ってその体に香油を塗りに行く、というものでした。つまり彼女たちは、日曜日の朝早く、真っ先に死体のところに向かったのです。

しかし、この女性たちは、無計画といいますか、香油を塗りに行くのは良いのですが、大きな障害があることも知っていました。彼女たちは､「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか（３節)」と相談しながら墓に向かったのでした。

ところが、彼女たちの心配は、すべて無駄になりました。「非常に大きな石は、既にわきへ転がしてあった（４節)」のです。婦人たちは、自力でイエスの許に行くことが出来なかった、しかし、その場所にたどり着いた時、道は開かれていたのです。彼女たちの前にあった絶対突破できない障害は道になっていたのです。さらに、その道は、死体への道ではなく復活者への道でした。墓は、空であったからです。

この復活についての記述は､「あの方は復活なさって､ここにはおられない(６節)」これだけです。どうやって復活したか、そのような情報を聖書は一切開示いたしませんし、興味さえ示しません。

ですから、昔から現代にいたるまで、そしてこれからもおそらく世界が終わるまで、イエスキリストの復活が真実か否か、という議論は続くでしょう。

イエスキリストの復活を裏付けるには、十分すぎる情報や証拠があります。

聖書のほかの箇所で非常に多くの人が復活のイエスキリストを目撃しています（Ⅰコリ15：5、6他)。また、この復活の場面では、弟子たちは一切現れません。隠れていたからです。ですから、多少なりとも勇気のある女性たちとは違って怖くて隠れていた臆病な弟子たちが、このすぐ後、殉教もいとわず急にイエスキリストの復活を宣教した、という事実は説明できません。

このように、イエスの復活を証明してい

くことは難しくはないのですが、それはあくまでも論証にすぎません。聖書は、復活を論証しているのではありません。復活の宣言をするのみです。聖書は、ただイエスの復活を宣言するだけなのです。ですから、復活というのは説得されて信じるような出来事ではないのです。

むしろ聖書は、ただ簡潔に復活を宣言して、すぐに行動を起こさせます。

「さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。（7節）」

墓の中で驚いている女性たちは、行け、と命じられます。

冷静にこの場面を思い浮かべていただきたいのですが、今、女性たちは、墓の中にいるのです。その墓の中から外にも道が開かれていたのです。それは、イエスが復活して開かれた道、死の壁が最初に打ち破られた道でした。つまり、主イエスがまず墓から復活されて切り開かれた新しい道を、今女性たちはその目で確認しているのです。そして、その道を行け、と命じられているのです。

復活の最初の証人である女性たちは、丹念にその現場検証をさせられたわけではありません。むしろ、墓から出よ、と命じられたのです。そして、「あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる」、このガリラヤ、というのは、この女性たちや、隠れている弟子たちの故郷であり、主イエスが福音の宣教を始めた場所です。そこからもう一度新しい生活を始めなさい、と女性たちは言われているのです。そして、その新しい生活の第一歩に復活の主に「お目にかかれる」、これが約束として与えられました。新しい生活は、復活の主イエスキリストと共に始められ、主イエスキリストがともにおられる、ということです。

さて、これを目撃した女性たちの反応が、「墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。（8節）」と記録されています。

彼女たちは、おそらく最初に墓の石がどけてあったのを見てほっとして、そして喜んで墓へと入ったでしょう。その婦人たちが、墓の中から外へ出ていく道では、入って行った時と真逆の状態であったわけです。ほっとして墓に入った婦人たちは、震え上がって一目散に墓から逃げ出したのです。彼女たちは、本来ならば喜んで墓から出ていかなくてはならなかったのではないでしょうか。イエスキリストが復活したのですから。しかし、これが事実なのです。神の御業である復活という事実に最初に遭遇した時、人はそれに耐えられなかったのです。とりあえず、その墓から脱出して逃げるしかなかった。しかし、彼女たちがイエスに続いて墓から出ていったのは事実です。そして、逃げ出しても一歩ずつガリラヤに、新しい生活に近づいているのは事実です。計らずして、この婦人たちは復活の主に続いて墓を脱出して、新しい歩みを始めていたのです。「そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである」、とこの場面は終わりますが、やがて、彼女たちがこの出来事を証したので、この記事が書かれたわけです。

私たちキリスト者は、イエスキリストの復活を論証しようとは思いません。しかし、一つだけ約束できますのは、聖書の言葉は真実である、ということです。

三浦綾子というキリスト者の小説家がおられました。彼女は、戦前に小学校の教師として、日本は神の国である、という思想に立って熱心に教育されていました。

しかし、敗戦の後、自らが信じてきた教科書の黒塗りを生徒にさせている現場に立ったのです。今まで愚直に信じてきた言

葉が墨で消されていくのです。激しい喪失感の中でとうとう三浦綾子は、オホーツクの海岸で自殺未遂を起こしました。彼女は、戦前の教科書によって教育され、戦争に送り出された子どもたちのことを思うと胸が張り裂ける思いでありました。その後、彼女は、当時死の病であった結核を患い、その苦しみの中信仰が与えられました。それは同じ病を患うキリスト者に導かれ、黒塗りする必要のない書物に出会ったからです。

それが聖書です。

もし、イエスキリストの復活が偽りであるのなら、本日の箇所の４節から後は黒塗りしなければならないでしょう。いいえ、新約聖書のほとんどの頁に墨が塗られ、聖書は読めない書物になるでしょう。その場合この世でキリスト者ほど惨めな人種はいませんし、牧師ほど如何わしい仕事はありません。しかし、聖書の言葉には嘘偽りはない、一行も一文字も、いいえ、一点一画さえ黒塗りする必要は無い、これが、私たちの確信であり、復活が真実であることの証です。

私たちは、復活を論証するのではない、気の利いた説得などもっとできない。しかし、聖書の言葉は真理である、これだけは命をかけても言えるのです。「あの方は復活なさって、ここにはおられない」、この言葉が真実であることを。

私たちが遣わされている町であります高島平では、イースターの時期が終わる頃、桜が散り、ハナミズキという花が咲き始めます。ハナミズキが、天に向かって咲いている姿が、あまりにもきれいでありましたので、昨年の春に調べてみました。図鑑で調べてみますと、ハナミズキの花言葉は、「永続性」であるようです。

「永続性」すなわち「永遠」という言葉を人は知っているのです。

だから花言葉になるのでしょう。

しかし、それはあくまでも概念であって現実ではない、自分とは無関係である、これが永遠についての多くの人の理解でしょう。そして、その場合、墓場が命の終着点になります。そこからのことは、よくわからない。これが本音でありましょう。

しかし、今日の聖書の御言葉によりますと、墓場が命の出発点なのです。

永遠は概念でなく、現実なのです。

墓から道が開かれていて、そこから歩みだす現実なのです。

墓は空だった、その時婦人たちは、墓を空にしてガリラヤに、新しい生活に向かったのです。墓場にはもう用はないからです。そして、あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる、私たちより先に復活の主が私たちの新しい命の出発点に立って待っていてくださるのです。

今、一人でも多くの方が悔い改めて、墓場を終点にするのではなく、そこを通過点にしていただきたい。今いる場所から、墓を通り抜けて、そこから永遠の命が続いている、この希望に、新しい命に生きていただきたい。

それでもなお、越えられないと思う障害は、大きな石は、必ず道となります。

死んで墓ですべてが終わるのでしたら、墓は悲しみと恐れの象徴です。

その恐れが希望に変わるのがキリスト教信仰です。

そして、この信仰と希望にあって永遠の命に歩み始めるのが、イースターの本当の喜びです。今、この喜びにあふれて世に遣わされましょう。

（高島平キリスト教会牧師）

連載

障がいある子どもたちに注がれる主の愛(2)

小 澤 路 華

1．障がい児と家族

障がいを持つ子どもがいる場合、その家族にも心を向けてみる事は大切なことの一つです。その暮らしの中で、何かしらの傷つきや、困難、そして多かれ少なかれ社会への申し訳ない思い（うちの子が障がいゆえにお世話かけます、ご迷惑おかけしています、という気持ち）を持っている保護者も少なくありません。公共の場で大きな声を出す、とっぴな行動をする、じっとしていられない、普通の子より手がかかる、空気を読めない等のことで、身を小さくする場面に幾度も遭遇してきているからです。

2．ある教会での例

私たち家族が集っていたある教会で、重度の自閉症の男の子のお母さんと弟に出会いました。弟は、お兄さんと普通に会話をした経験がなく、四六時中目を離すことのできないお兄さんとの生活に、とても傷ついていました。またお母さんは、その子が生まれてから長いことまともに礼拝出席が出来ていないという事でした。というのも、その子は言葉でのコミュニケーションはほとんど取れず、外ではお母さんがずっとその子の手を引いていないとならない状況で、また何か音を口から発し続け、手を打ち鳴らしたりじっとしていることが出来ないために、一緒に礼拝参加ができない事で教会にも通えなくなっているとのことでした。私たちは「構わないのでお兄ちゃんも一緒に連れて来て下さい。音を出しても気にしないでください」とお伝えし、そのお母さんはある日お兄ちゃんを抱え込むように礼拝にいらして、「礼拝出席ができたことは本当に久しぶりだ」ととても喜んでおられました。また、他のある教会では、お父さんが長い事静かにしていられない息子を連れて毎主日礼拝にいらしてましたが、いつも一番後ろの方の席に座り、礼拝が終わるとさっと帰る、という過ごし方をしておられました。自分の子が迷惑をかけて礼拝を妨げてはいけない、という思いからの行動でした。

3．高知教会で

私たちの教会にも、じっと座っている事が難しく、歩き回ったり礼拝中に泣いてしまう子が時々やってきます。その子を連れてくる婦人は、一緒の時は 2 階でその子の側を離れられずに、常に注意を払いながらの礼拝で、なかなか集中できない、とおっしゃっていました（その子は年齢が上がるにつれて、少しずつ一人でも 2 階で過ごせるようになりました）。

このように、日常の生活でも普通の子以上に手をかけてあげる毎日でありながら、主日も礼拝に集中して参加できないご家族のことを思う時、一体どのようにそのような子どもと家族を受け入れ、教会や教会学校で豊かな主日をすごしてもらえるかは大きな課題です。

４．保護者とよく話し合ってみよう

そんな時、まずは一緒に来ている保護者の方にその子の様子を可能な範囲で詳しくお聞きする事はとても大切です。

どんな毎日の過ごし方をしているのか、学校（幼稚園）でのサポートや生活はどうか、どんなことが難しく、こちらの配慮や手助け、また注意が必要か、保護者からのアドヴァイスをいただくことはこちらもとても助けになります。それはその子と家族を受け入れるうえでは大切な情報ですから、しっかりと最初のうちにお聞きできたら良いかもしれません。そして、その子の状況を見守りつつ明るく分かち合いながら、家族ごと教会学校で包んであげることが出来れば、子どもも家族も安心して来ることができるようになるでしょう。もちろん、個人的なことは様々なことが絡んできますので、必要な配慮はそれぞれにあることも踏まえなくてはならないでしょう。でも、受け入れるために、その子（家族）を理解するために知りたいです、という姿勢を現すことは励ましにもつながります。また、もし教会学校の礼拝中に保護者が離れた場所にいる場合には、礼拝中のお子さんの様子を時々お伝えしてあげる事も大切です。その子の素晴らしさを小さなところでも発見し、まっすぐにお伝えすること、その繰り返しを通して信頼関係も生まれてきます。何か無理して誉め言葉を探したり、表面的な励ましは、（聞き慣れている場合もあるので）かえって信頼関係を損ねてしまう場合もあります。そんな時には逆に「○○君（ちゃん）はどんなことが好きですか？」「どんなことが得意ですか？」「お母さん（お父さん）からみて、どんなところが自慢ですか？」とお聞きする事も良いかもしれません。どんなに日頃申し訳ない、と思っていてもやはりその子の良さを口にできることは、親としてはとても幸せで嬉しい事です。

５．私たちに必要なのは「承認」

私たちは、誰であれ人からの承認を求めています。子どもは親から、夫婦は伴侶から、大人は社会から、職場では上司や同僚から、学校ではクラスメートから、教会学校では教師から。人は誰かに認めてもらえないと、孤独になり、傷つきます。障がい児やその家族は、他の人のように生活できない、物事を同じようにできない、上手に話せない、など、そのような理由で承認どころか区別、あるいは排除された経験もあるかもしれません。

物理的に排除されなくても、存在を十分に受け入れてもらえない態度によって、「承認されていない」という感覚を人よりも多く経験している障がい児や家族も少なくないでしょう。

６．教会の暖かい器

前回の号で書いたことですが、高知教会には障がいやなにかしらの難しさを抱えている人が少なくありません。それがどういう理由であるのかはっきりとは分かりませんが、教会の皆さんは、普通に当たり前のように障がい児や障がい者を受け入れ、特に意識したり区別することなく一緒に互いを尊重しあいながら教会生活をしています。そのような教会の皆さんの姿には、本当に暖かさ、懐の大きさを日々感じています。そして、みなさんそのような子どもたちの成長をまるで自分の孫や子どものことのように喜び、その純粋な信仰の姿に目を

細めて微笑んでくださいます。何も区別なく、普通に共にいるだけです。まるで天国の前味を味わっているかのようです。

そのような当たり前の承認の器が教会にあるからこそ、きっと障がいのある人も、自分の居場所として自分の家として毎週喜んで教会に集い続けることができ、そして神さまに繋がることが出来ているのではないかと思います。それでも、教会に来ることが出来ずにいる人も中にはいます。そのような人たちもまた、この器の中で受け入れられ、愛され、礼拝に繋がることができるようにと日々願い、祈り続けています。

「わたしは言おう、わたしの兄弟、友のために。『あなたのうちに平安があるように。』わたしは願おう　わたしたちの神、主の家のために。『あなたがたに幸いがあるように』」詩編122編８，９節

（高知教会・教会学校教師／牧師夫人）

連載

執事職について(1)

吉田　実

①教会の本質をなす執事的働き

この連載では「執事職」についていくつかのことを書かせていただきたいと願っていますが、初めに、キリスト教会にとって「執事的働き」は、教会が教会であるために無くてはならない本質的な働きである、ということを確認しておきたいと思います。

新約聖書において「執事」と訳されている言葉はギリシャ語の「ディアコノス」と言う言葉ですが、動詞形が「ディアコネオー」、名詞形が「ディアコニア」です。東日本大震災以来、このディアコニアという言葉は教会内でかなり定着してきたのではないでしょうか。このディアコニアについて、70周年記念宣言の「福音に生きる教会」の中の「世に仕える教会」の項目の中で**「愛をもって仕える業(ディアコニア)は、福音に生きる教会の本質をなすからである」**と告白されています。「本質をなす」わけですから、ただ「教会形成のためには大切なことが色々ありますが、ディアコニアの大切さも忘れてはいけません」というレベルのことではないことが分かります。愛を持って仕える業（ディアコニア）の実践が適切に行われていなければ、福音に生きる教会とは言えない。すなわち「ディアコニアは福音に生きる教会のしるしである」と言ってもよい、それほどの確信が込められた文章であると私は思います。改革派教会は伝統的に、まことの教会が地上に存在することのしるしとして「福音の真実な説教」と「礼典の合法的な実施」と「戒規の忠実な行使」ということを挙げてまいりましたし、教会形成においてこれらが本質的に重要であることは言うまでもありません。その上でさらに、愛をもって仕える業「ディアコニア」も、福音に生きる真実なキリストの教会を建て上げて行くために不可欠な、教会のしるしに加えるべき本質的な要素であるということです。では、その根拠・理由はどこにあるのでしょうか。なぜ「ディアコニア」は福音に生きる教会のしるしと言える程､重要なのでしょうか。

②執事的働きの重要性の根拠

「改革派教義学６　教会論」の教会職制の項目の中の「執事職」の部分で、市川康則先生は「宣教と教会形成の本質的部分としての執事的働きーその根拠」と題して、有意義な指摘をしてくださっています。まず市川先生は、キリスト教信仰における身体的次元の事柄の本質的重要性を確認してくださっています。**「聖書によれば、人間は霊肉統一体として、全体的存在として創造された（創世記2：7)。人間が霊的存在であることは当然のこととして強調されてきたが､しかし､この『霊性』は決して『身体（肉体）性』と対立する概念ではない。人間の身体性を捨象するような霊性理解、人間の本質理解は聖書的ではない。(中略)人間は創造の初めから身体的、全体的存在であり、それゆえに、神の恵みもまた人間存在の全体性において享受されるべきもの**

なのである」（前掲書285頁）。すなわち、人間は創造の初めから「心と体」の両方で「人間」なのであり、神の恵みも「人間存在の全体」において､即ち「霊的」にも「身体的」にも与えられ受け取るべきものなのです。そうであるなら、霊の糧である御言葉を届ける奉仕が霊的で貴くて、困窮している人々に肉の糧を届けるような奉仕は次元の低い物質的な奉仕である、などとは言えないでしょう。

また市川先生は、神の律法は神への愛と人への愛という二重の方向性を持ち、信じることと従うことは一体であることを明らかにしてくださっています。**「キリスト教信仰と生活の根本は神を愛することだが、このことはその必然的結果として、同じように神のかたちに造られている『隣人』を愛することを含んでいる。（中略）キリストにあって神を信じること、そのように生きることは、隣人を愛すること、隣人の必要に自己を供すること、神の賜物を相互享受することを含むのである（マタイ22：37～40，ヤコブ2：10～11，Ⅰヨハネ3：16～18)。（中略） さらに神への愛と人への愛が相関的であるばかりか、そもそも神への信仰自体が『信じる』ことと『行う』こととを不可分にしている。信仰とは単に聖書的教説への知的同意や承認の問題ではない。（中略） 神の律法は民に、神が何を求められるか､何を喜ばれるかを啓示するが、それは啓示のための啓示ではない。民がそれを実際に行い、神の御心に適って生きるための啓示である。我々が聖書や教理を学ぶのは、知識の拡大や純正化それ自体のためではなく、知り得た恵み深い御心を行うため、それに生かされるため、神との契約に与っていることの実際的な結実のためである。これは聖書文書自体の構造―先行する神の恩恵的行為の認識と、それに対する感謝と服従の応答の義務―からも伺える（申命記４章までと５章以下、ローマの信徒への手紙11章までと12章以下)」**（前掲書285，286頁）。すなわち、キリスト教信仰と生活の根本は「神を愛すること」にありますが、この事は必然的に「神のかたち」に造られた「隣人」を愛することを含んでいます。キリストにあって神を信じ、そういう者として生きるということは、神を心から礼拝しつつ、隣人を愛し、隣人の必要のために仕え、神に与えられた賜物を互いに分かち合うという生き方を生むのです。そもそも神を信じることと神に従うことは「表裏一体」なのであって、それは神の恵みが常に先行し、その恵みに感謝して従うことを求める聖書全体の構造、方向性とも合致します。

また市川先生は、宣教における言葉と行いの不可分性ということを神ご自身の行為に起源と模範を見ながら明らかにしてくださっています。**「キリスト教会は最初期から、信仰生活と宣教の本質的部分として、兄弟姉妹への愛の善行を励行してきたが（使徒6：1以下，ヘブライ10：24～25)、これは既に、旧約イスラエルにおける神の民としての生き方そのものであった。神の恵み深い契約の現実に、具体的に生きることが出来るように懇ろに与えられた律法は―それは福音！― 隣人同胞（特に社会的弱者）に対する憐みを求めた（レビ19：18)。この消息は究極的には、神ご自身の行為にその起源と模範を見ることが出来る。神は民に言葉によってご自身の御旨を啓示されるが、同時に、出来事によってもそれを知らせられる。神にあっては言葉と出来事（事柄、物事）は同じであると言っても過言ではない。（中略）言葉と出来事、言葉と行**

為は不可分なのである。福音宣教とは、文書形態の啓示である聖書が証言するキリストを宣べ伝えることだが、それはいわば、神の啓示行為の適用・延長ともいうべき事柄である。それゆえ、福音宣教もまた、言葉により、同時に行為ないし事柄によってなされるべき性質のものなのである」（前掲書286，287頁）。すなわち、神はご自身の民に御言葉をもって御自身の御旨を啓示されますが、同時に出来事によってもそれを知らせられます。神が「光あれ」と言われれば光があったように、神にあっては言葉と行為は不可分のものなのです。従いまして、福音宣教もまた言葉によってなされ、同時に行為によってもなされるべき性質のものなのです。人の救いのために福音を宣べ伝えることと、人の命が守られるように様々な配慮をし、特に弱い立場の人々に主の愛をもって仕えるということは、表裏一体のことと言えるでしょう。それは何よりも、主イエスご自身の歩みにも証しされていることです。

③キリストの模範に倣う

政治規準第十章第五十六条（執事の職務）にはこう書かれています。「執事の職務は、聖書によれば、主イエス・キリストの模範に倣って、愛と奉仕の業を行い、聖徒の交わりを特に相互の助け合いにおいて具現するものである」。また70周年宣言にもこのように記されています。**「十字架の福音に生きる教会は、自ら十字架のしるしを帯びつつ歩む。わたしたちは善を持って悪に打ち勝ち、主がしもべとなって世に仕えられたように、苦しむ人々と共に歩み、共にうめき、彼らのために執り成し祈る」**。このように、他でもない主イエス・キリスト御自身がそういうお方でいらっしゃいますので、私たちもキリストの模範に倣うのです。主イエス御自身が「**人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」**（マルコ10:45）とおっしゃって、貧しく、小さな、弱い人々、病や障がいや悪霊に悩む人々に仕えて癒しを与えて下さって、何よりも十字架の道を歩み通して御自身の命を捧げて下さり、罪と死の力に打ち勝ってくださることを通して私たちの救いのために仕えてくださいました。ですから、そのような「キリストの弟子」であり「キリストの体」である教会は、キリストに倣って、**「主がしもべとなって世に仕えられたように」**神と人に仕えることが求められているのです。それは教会の全ての職務に当てはまることですが、「執事職」はこのことを典型的に示す職務と言えるでしょう

④助け合う共同体を目指して

最後に、政治規準第五十六条に**「聖徒の交わりを特に相互の助け合いにおいて具現するものである」**と書かれていることに注目したいと思います。つまり「執事職」とは教会の内外における愛の奉仕を一手に担う奉仕の代行者ではないということです。主イエスに倣って神と人に仕えるという働きは教会の本質に関わる働きなのであり、それはキリストのからだを構成する全ての信徒に求められることです。執事はその教会員全員が成すべき「愛の奉仕」をリードしつつ、各々にふさわしく提供し、助け励まし、聖徒の交わりを相互の助け合いによって具現するために教会全体を整えまとめる働きと言えるでしょう。

（但馬みくに伝道所宣教教師）

これからの教会学校

ブック・ピープル

西堀　元

偶然、手にすることになった二冊の聖書があります。二十代の頃、一人暮らしをしていました。ある日、紙ゴミを出しに行くと、ビニールひもでくくられて新聞と一緒に捨てられている薄型聖書がありました。黄色のビニール表紙で横組みのものです。もったいないと思って持ち帰りました。今でもコピーするときに使い、助かっています。もう一冊の方。ある日、電話がありました。「あの、聖書の供養ってありますか？」よく聞いてみると聖書をもらって欲しいと言うのです。大学を卒業して関西で就職するが引越し先のアパートが狭いので持って行くものを厳選している。持って行く物リストから聖書と賛美歌が残念ながらもれたのだと。中高ミッションスクールに通い毎日使った聖書。捨てるには忍びないと思ったそうです。ちょっと考えましたが預かりました。今でも本棚にちょこんと収まっています。

この二冊の聖書に対する態度はどこから来ているのでしょうか。せっかく手にした聖書を捨てたり、譲ったりする以外に向き合う方法がなかったのでしょうか。『華氏451』（レイ・ブラッドベリ、1953年）というSF小説があります。映画にもなりました。451度とは書物に炎が引火する温度です。物語では火を消すはずのファイアマンは消防士ではなく焚書係として本に火を付けるのです。この小説は焚書とモノトーンの世界、暗いデストピア物語です。その世界では車をゆっくり走らせること、許可なしの散歩は法律違反。だから皆、自省をする暇もなく飛ぶように生きている。人々は耳に「海の貝」と名付けたラジオをはめて、リビングルームは壁中にテレビを設営し、一日中、音楽に音楽、映像に映像のシャワーをこれでもかと浴びるのです。そんな世界で、ある焚書係が本に興味を持ってしまいます。しかし彼は妻に密告され、家は焼かれ命からがら逃げていきます。何日も歩いた後、彼は森にたどり着きました。そこにはたくさんの人々が都会を抜け出て暮らしています。ある人の名前は『共和国』（哲学者プラトンの書いた本）、ある人の名前は『ガリバー旅行記』、ある人は『アインシュタイン』。皆、本のタイトルが自分の名前なのです。この人たちは本を燃やします。それは本が見つかると困るし、いつも移動しているからです。そして戦争が終わった後の世界のために「本を一語一語、口伝えで子どもたちに伝えていくんだ。そして子どもたちも待ち続けながら、ほかの人間に伝えていく」と著者は登場人物に語らせます。そう、この書物の人、ブック・ピープルとは書物を覚え、そして次の世代に伝えていく人たちです。

私たちの国でも『古事記』は口伝で伝えられたと言われます。私自身、熊本地震を体験してから信仰が身体化された生き方をしなければいけないと思っています（できているかは別として！）。地震・台風など災害時には、注解書を開き説教のゆっくりと準備をすることはできませんでした。内に刻まれた御言葉が危機の時に支えとなりました。イエスさまは公的な活動を始められる前、荒れ野で悪魔から誘惑を受けました。誘惑に御言葉によってイエスさまは立

ち向かわれました。でも荒れ野に聖書を持って行ったのではないでしょうし、悪魔を目の前にして聖書のページを開いたのでもないはずです。心に書かれた聖書を使われたのです。危機には準備運動の時間はありません。信仰者こそブック・ピープルであってもいいはずです。行き場を失った先の二冊の聖書は､元の持ち主がブック･ピープルに出会えなかった結果ではないかと思うのです。

小学校に上がる前、両親と一緒に岐阜加納教会に通っていました。今でも思い出すのは、夕拝の時、大人たちが手を挙げて家で聖書を覚えてきたところを発表する姿でした。とても長い箇所を覚えてくる人もいて感心しました。今、同じことをすればよいとは思いませんが、聖書を覚えることを信仰生活のサイクルの中に取り入れることはとても大切ではないでしょうか。印刷機ができるまでは暗記の文化、印刷機ができてからは読書の文化、そして今ではパソコンが発明され単語を検索するだけになってしまったのではないでしょうか。便利になる生活の反面、失ったものも色々あると思うのです。心に刻まれた御言葉が少なくなることで、この世に対抗している力も弱くなるのではないでしょうか。

小学生の息子がいます。自分の親の姿を見て次第に疑問に思うことも増えているようです。祭司エリに少年サムエルは素直に従ってきました。親に言われたことを習う子どもの姿と重なります。しかしある夜、サムエルは神さまからの直接の呼びかけを聞きます。「サムエル、サムエル」と。そしてサムエルは神さまから自分が仕えるエリの家の罪を知ることになりました。この場面をピーターソンは思春期の信仰者の姿を学ぶモデルとも考えられると言います。(“Like Dew Your Youth” E. H. Peterson) 因果の法則で信仰を捕らえてしまうことがあると思います。親がダメなら子どももダメになってしまうと。しかし神さまがサムエルに語りかけられたように、自分の子どもたちにも神さまが直接に語ってくださる。先の世代の弱さと罪を知り、しかしそれでも信仰に生きる世代を神さまが起こしてくださると信じます。「神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる」(マタイ3：9) からです。

私たちは信仰の継承のためにできる限りの努力をしなければなりません。しかし同時に神さまに信頼することを忘れないようにしたいと思います。最後にルターの言葉を引いて終わりにします。「教会を保持することができるのはわれわれ自身ではない。われわれの先祖もそれができたわけではなく、われわれの子孫もそのことはできないであろう。ただ昔いまし､いまいまし､将来もいますであろう方、世の終わりまであなたがたとともにいるであろうと言われる方だけが教会を保持することができるのである。その方についてはヘブル人への手紙13章で、イエス・キリストはきのうも今日も、いつまでも変わることがないと言われている……わたしも数千年前、この世に存在しなかった。しかも教会はわたしたちなしにも保持されていた……またわれわれがこの世に生きているいまの時代に、われわれは自分の力で教会を保持しているのではない。何故ならば教会はわれわれによって支えられはしないからである……そのようなわけで、またわれわれが死んだ後、教会が保持されるために、われわれとして何もできないであろう。しかし来たりたもうであろう、いつまでもいるであろうと言われている方がそのことをなしたもうであろう。」(W. A. 54, 470および474f)

(熊本伝道所宣教教師・大会教育委員)

献身のすすめ

私はなぜ牧師になったのか

袴 田 康 裕

神学校校報（2020年 8 月）に「求む、献身者！」という文章を掲載し、統計に基づいて改革派教会が深刻な牧師不足に陥る可能性が大きいことをお知らせしました。定住の牧師がいなくなれば、教会は通常の営みを続けられなくなります。しかし、牧師は神に召されなければなることはできませんし、なってはなりません。それゆえ、私たちは献身者が与えられるように祈る必要があります。

今回は、私自身の献身の証しを紹介させていただきます。1992年の秋に記した文章で、入学願書と共に神学校に提出したものです。拙文によって、一人一人が自身の献身について改めて考えていただければ幸いです。

※

私は、1981年に大阪府立大学に入学し、入学と同時に堺大浜キリスト教会（当時は日本基督教団、現在は単立）に導かれ、同年12月に自分の罪を悔い改めキリストを救い主、主と告白して洗礼を受けました。そして、大学時代は KGK の活動に参加し、学内の聖書研究会の活動とともに、地区の活動に参加するなどそこで多くの良き交わりと訓練を与えられました。

1985年に大学を卒業して大阪府庁に入庁しました。労働は神の栄光を現すものであるとの聖書の労働観を心に覚えながら、矛盾に満ちた現実の中で苦しみつつも誠実に働くことに努めました。そして、1989年春の 3 度目の人事異動で秘書課に変わりました。そして与えられた仕事は何と皇室に関するものでした。具体的には花博関連で大阪に来る皇族のプランその他を一切仕切るのが私に課せられた仕事でした。私は、天皇制を支えているような日本の精神風土こそが日本の福音の土着化を阻んでいると考えていただけに、この人事異動は私を苦しめました。そして遂に上司にこの仕事はしたくない、と打ち明けた訳ですが、その結果自分は府庁を辞めるか、それともこの仕事をするかのいずれかを選択しなければならなくなってしまいました。

そこで元来､社会的な問題に関心があり、キリスト者の社会的責任を神学的に学び、そのような分野で働くことを思い描いていたこともあり、この際神学校に入学することを考えるようになりました。そして入船先生に相談に行った訳ですが、神学校は牧師を養成するところであり、あなたが望むような学びをするところではないと断られてしまいました。それと同時に、自分の考えの甘さを先生に指摘されました。

いよいよ行く場がなくなってしまった訳ですが、明確な導きが無い限りはそこに留まるのが御心と思い、府庁に留まることにしました。そして皇室関連の仕事を、冷静に観察しながら、また、微力ながらも少しでもパフォーマンスにならないように努めながらこなしていきました。内側から天皇

制を見つめることができたことは、本当に考えさせられることが多く、日本の宣教にとって天皇制の問題は避けて通れないことを改めて確信させられました。府庁に留まり、あの仕事に携わったのはやはり神さまの御心であったと確信しています。

そのような訳で、一度は辞めるつもりであった府庁に留まるように導かれたことから、ここが自分がいるべき場所なのだと考えるようになりました。そして、府庁には昇任試験があるのですが、良き仕事をして良い証しを立てるためにも積極的にチャレンジしようとそのための勉強も始めました。しかし、1991年７月に思いがけないことから２週間ほどヨーロッパに行く機会が与えられました。そして異国の文化に触れながら、日本の慌ただしい生活の中ではなかなか持つことの出来ないような本当に自由な時間を持つことが出来ました。そしてその中で神さまから「お前は何をもってわたしに仕えるのか」ともう一度問いかけられているように思いました。そして私は、神さまが必要としている働きがあり、その働き人が求められているなら喜んでどんな働きにでも出ていこうと素直にそう思わされました。

こうしてもう一度新たな思いを持って祈り始めました。12月には、日々の忙しさから離れて十分に祈るために、宝塚黙想の家で二日間の断食祈祷もしました。この時は、「何をもって主に仕えたらよいか」、そのことを聴くために行ったのですが、主のお答えは一言で言えば「命をもって仕えよ」ということでした。何かをする以前の問題として、主は献身の姿勢を求められたのでした。

エレミヤ書の１章５節に次のような御言葉があります。

「わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知り、あなたが腹から出る前から、あなたを聖別し、あなたを国々への預言者と定めていた」。

これは、エレミヤが生まれる前から「主のつとめ」として預言者に定められていたということですが、召命とはこのように一人一人に対して生まれる前から定められている「主のつとめ」だと思います。すなわち召命とは、それに応答しないならば、自分にとって死を意味すると言えるもの、それに応答しないような生は、もはや本当に意味で生きているとは言えないと感じられるもの、そういうものだと思います。

そのような意味での主の召命を求めて祈り続けました。その中で、まず明らかにされていったのは、神さまの御言葉を学び、そしてそれを語ることは、確かに自分に与えられた「主のつとめ」だということです。４年ほど前から、信徒説教者として月１回程度礼拝の説教（奨励）をさせていただいていますが、このように神の言葉を語ることは、確かに自分に与えられている主からのつとめだと思わされました。

しかし、自分が今の職を辞めて、フルタイムの働き人となることが主の御心であるのかどうかは、すぐにはわかりませんでした。主の前に心を注ぎだして祈る時も、御言葉を語ることが自分に与えられている召命だと受け留めているとは祈れても、フルタイムの働き人になることが主の御心と受け留めているとは、なかなか祈ることができませんでした。主から与えられているところ、既に明らかにされているところに止

まって、それを受け留めて、ただ、主の前に心を開いて導きを祈るのみでした。ですからこの頃は、他の人に対しても「いわゆる献身をして神学校に行くことを御心と受け留めている」と語ることはできませんでした。

主が様々な形で働いておられるのがわかりつつも、一番肝心なところでまだ少し雲がかかっていて明らかにされていない、そんな状態で祈り続けていた時、書物の中から一つの文章に出会いました。それはナチス・ドイツに迫害され殉教したボンフェッファーという神学者が書いた『神学の学徒は、今日何をなすべきか』という論文の中にある一節です。すなわち、

「彼（神学徒）は、全くきまりきったいわゆる〈召命〉の経験を待ち望まなければならないなどと、考えるべきではない。むしろ神学の事柄が単純に彼をとらえた時、そしてもはや彼を離さないようになった時、そのことを神学への召しと考えるべきなのである。……神学を学ぶことの入り口にあるのは、召命経験というようなものではなく、冷静、真剣かつ責任的な神学研究への即応態勢なのである」。

この文章に出会った時、本当にそのとおりだと思いました。そして、この「神学の事柄に単純にとらえられている」という表現は、まさに私の状態をあまりにも的確に表したものでした。そして、それまで心の中にかかっていた雲が引いて青空が広がっていくように感じたのです。こうして、神学校に入り神学を学ぶことが、主からの召しであることを確信することができたのです。

こうして私は、御言葉を学び、また御言葉に仕える者としての召命を受けました。今は、ただ主に信頼して新しい歩みに踏み出したいと思っています。その後の具体的な働きはまだわかりません。しかしこれは自分が決めることではなく、自分はただ主の召命に忠実でありたいと思っています。

（1992年10月）

※

なぜ献身に導かれたということは、ここに語りつくされていると言えます。生まれる前から「主のつとめ」として定められている務めを知らされたのです。

あれから28年が経過しました。改めて思うことは、牧師の働きは主の召命がなければできないということと、主は召された人には必ず必要な賜物を備えてくださるということです。

イエス・キリストを愛して、イエス・キリストの教会に仕えたいと願っている方は、今一度、自分に牧師の召しがないか考えてください。働き人は不足しており、また教会自体の力も弱まっています。さらに教会内部のことだけでなく、外に向かって伝道する力も回復しなければなりません。

あらゆる意味で、今後、牧師として働く道には厳しいものがあるでしょう。しかし、これ以上にやりがいのある働きはありません。私はそう思っています。

（神戸改革派神学校教授）

信仰告白のあかし

全国の若き信徒への手紙

井 上 佑 斗

主の御名を賛美します。今回こうして「教会学校教案誌」に信仰告白の証を書かせていただけることを感謝いたします。

最初に、私の今までの人生を（19年という、語るにはあまりに短い気がしますが）書きたいと思います。

2001年５月11日、姉・兄に続き３人兄弟の末っ子として私は生まれました。2005年に幼児洗礼を受け、それからほぼ毎週教会に通っています。小学６年生から西部中会のキャンプや修養会に参加するようになり、それが毎年の楽しみになっていきました。その時期から、教会の方に信仰告白をしないかと言われるようになりました。正直、面倒くさいという理由だけで躊躇っていました。しかし、中学３年生の高校受験を控えた冬に「神さまの守りが欲しい」と思って信仰告白をしました（キリスト教はご利益宗教ではありません）。無事、地元の公立高校に受かり、華やかとは言えないものの充実した高校生活を送ることになります。

こうして振り返ると、本当に、生まれてからずっと神さまに祝福された人生を歩んできているなぁと思います。神さまや周りの方々には心から感謝しております。そして、将来牧師になるために、これからも神さまが自分の人生を順調に導いてくれるだろうと思っていました。しかし、国立大学の受験に落ち、浪人することになりました。

家は決して裕福ではないので、予備校には行かずに家で勉強。そこに新型コロナウイルスの脅威。誰とも会えず、LINE で友達とたまに連絡をとるくらいで、あとは家で独りで勉強することになりました。

当時、私は本当に落ち込んで、「どうしてこんな思いをしないといけないんだ」と思うこともありました。しかし、「これも神さまのご計画だろう」と思い、2020年10月19日現在、日々祈りつつ勉強に励んでおります。あの時折れずにここまで頑張ってこられたのは信仰のおかげだと思います。

確かに私は深く考えずに信仰告白をしました。でも、その後ピアノを始め、修養会の賛美や教会学校の奏楽の奉仕をさせていただくようになりました。これらの奉仕を通して自分の信仰について考える機会が増え、その結果自分の信仰が培われるようになりました。今思えば、ピアノを始めたのも神さまのご計画のうちなのかなぁと思います。

この証を読んでくれている中高生へ。この証で皆さんに伝えたいのは、信仰を持ってほしいということです。信仰告白はゴールではなくスタートラインです。きっかけは自分みたいな軽薄な理由かもしれないし、友達がするから一緒にするかもしれないし、周りから言われて仕方なく、かもしれません。でも正直最初はそれでいいんです（牧師先生方、どうか怒らないでください）。以前、教会の方から「子どもの頃から教会に行けることは素晴らしい恵みだ

よ」と言われたことがあります。皆さんみたいに若いうちから神さまを知れることは実は貴重なことなんですよ……！

そして、自分の信仰について深く考えてみてほしいです。「自分は何の為に生きているんだろう」「神さまなんて本当にいるのだろうか」って思うことありませんか？自分は神さまを信じていますが、今でもたまに思い悩んでしまうことがあります（信仰の薄い私を赦してください)。これはきっと多くのクリスチャンが抱えている悩みだと思います。そんな時、自分の先輩クリスチャンが「神さまのことを受動的ではなくもっと能動的に知ってほしい」とおっしゃっていたのを思い出します。信仰についてもっと悩んでほしいし、もっと積極的に祈ったり、聖書を読んだり牧師先生や先輩クリスチャンたちに思いをぶつけたりしてほしいです。それが実り豊かな信仰生活にきっとなるから。

また、信仰の友を是非たくさん増やしてほしいと思います。学校の友達も勿論大切だけど、年齢や性別や住んでいる場所が違ってもあなたのことを祈ってくれる友がいるって考えたら素敵じゃありませんか？

そして、願わくは「私は神さまと共に人生を歩んでいく」という揺るぎない信仰を持ってほしいと思います。

こんな青二才の証を読んでくださっている大人の方々へ（どんなに年齢を重ねていても、生きているうちはみな若者です)。子どもたちへの信仰の継承はとても大変な使命であり、そのことに皆さまが尽力されていること、心より感謝いたします。私の教会は私が小学生の頃は子どもたちがたくさんいましたが、今は小学生が２名、中学生が１名と少なくなってきました。皆様には私の教会含め全国の教会の子どもたちのことを祈っていただきたいです。今日のSNS の発展は凄まじく、ネットで文字通り世界中の人と繋がれるようになってきました。しかし、子どもたちにとって大切なのはやはり神さまの愛と身近な大人たちの愛です。私は親や教会の方々に愛されて育ってきたので、こうしてゆっくりではありますが信仰の成長をしていくことができています。子どもたちの信仰告白の準備が備えられるようにどうか覚えてお祈りいただけると幸いです。

> いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。
>
> （テサロニケの信徒への手紙Ⅰ５：16〜18）

今年は新型コロナウイルスの影響で修養会、大会や中会の多くが中止になり、直接顔を合わせて触れ合える機会が減るという状況になりました。しかし、そんな中でもみんなが神さまの愛によって繋がっていることを私は信じています。来年どうなるかは未だにわかりませんが、１日でも早く新型コロナウイルスが終息してまた直接お会いできることを心よりお祈り申し上げます。すべての兄弟姉妹に、私たちの主イエス・キリストの恵みと祝福が豊かにありますように。（長丘教会信徒）

聖書黙想・説教展開例・分級展開例

４月４日　　ヨハネによる福音書２０章２４～２９節　　【解説と黙想】

復活のキリスト

①文脈とキーワード「信じる」

ヨハネ福音書では、マグダラのマリアが最初に復活の主イエスに出会い、マリアが弟子たちに「主を見ました」と告げる。その後､主イエスは弟子たちの真ん中に立ち、手とわき腹を見せられた。その場にいなかったのが12弟子のトマスである。彼は、弟子たちの言葉だけでは信じることができず、直接的な物理的証拠を求める。

「信じる」という言葉はヨハネ福音書の中で繰り返し記されてきた（新共同訳聖書では101回）最重要キーワードの一つである。あらゆる人々が主イエスを前に､「信じる」か「信じないか」が問われた。主イエスの十字架の死、そして復活の出来事を経て、12弟子のトマスがこの問いの前に立たされる。

②「わたしは決して信じない」

トマスは、自分の目で直接、主イエスの“釘跡”とわき腹の“槍跡”（19章34節）なしに信じるはないと言った。トマスのこの言葉は私たち自身の思いと重なるのではないだろうか。では、物理的な証拠があれば人間は神を信じるのであろうか。出エジプトを経験した人々は､マナ､うずらによって直接神から養われた。けれども彼らは神に不平不満を言い､「金の子牛」を造るのである（パウロはコリントの信徒への手紙一10章で、そのことを述べている）。また、主イエスの奇跡の御業を見た者の内、どれだけの人が主イエスを信じたであろうか。ファリサイ派の人々は主イエスの癒しの業を前にし､「悪霊の力だ」（マタイによる福音書12章24節）と言った。聖書は確かに、奇跡を通して信じる人々が起こされた様子を記している。けれども、物理的な証拠が信仰と不信仰の決定的な差を生み出すわけではない。どれだけの事を目にしても､「信じる」か「信じない」かがなお問われるのである。

③「見ないのに信じる人は、幸いである。」

私たちは、肉眼で主イエスに会う事はできない。信仰は聖書の言葉を聞くことから始まるのである。（ローマの信徒への手紙10章17節）聖書の言葉によって、私たちの前に復活の主イエスが差し出される。子どもたちは教会学校の「御言葉のお話」を通して、それを聞き、聖霊の働きによって主イエスに出会うのである（私たちはその御業に仕えている）。

④「わたしの主、わたしの神よ」

トマスの告白は、私たちが礼拝の度ごとになすべき告白である。自分を自分自身の王座から引きずり下ろして、復活の主イエスにこそ、私の人生の主人、私の神として君臨していただく。その告白に導かれることこそ礼拝の目的である。

復活の主イエスを信じ、この告白をするものに与えられる祝福を、ヨハネ福音書は色んな表現で語ってきた。信じる人は「神の子となる」(1:12)､「一人も滅びない」(3:16)､「裁かれない」(3：18)､「生きた水が流れ出る」(7：38)､「暗闇の中にとどまらない」(12：46)､そしてそれらを総称しているのが｢永遠の命｣という表現である。｢永遠の命｣において生きる新しい天と地は｢死もなく、悲しみも嘆きも労苦もない」のである（ヨハネの黙示録21章）。

復活の主イエスは、私たちを「見ないで信じる幸い」に至る告白へ導いておられる。

（大宮季三）

《参照聖句》　ヨハネによる福音書２０章全体
《教理問答》　子どもと親のカテキズム 問３４～３６、ウェストミンスター小教理問答 問２８

４月４日　　ヨハネによる福音書２０章２４～２９節　　【説教展開例】

復活のキリスト

◇…… **単元のねらい** ……◇

復活のキリストは、「見ないで信じる者は幸いである」とトマスに告げられた。この言葉は私たち自身に向けられている。　聖霊において御言葉を通して私たちに復活の主イエスが差し出されている。ここに人間の「幸い」がある。

「見ないで信じる者へ」

①見えないモノは信じられない！

今日はイースターですね。私たちは教会で、イエスさまのお話を毎週聞いていますが、十字架と復活を特別にお祝いするのが今日のイースターです。イエスさまが十字架にかかり復活された最初のイースターは、どれくらい前のことか知っていますか？　先生が生まれる前？　おじいちゃんおばあちゃんが生まれる前？　江戸時代？もっともっと前です。だいたい2000年くらい前です。

先ほど読んだヨハネによる福音書の20章には、最初のイースターの時、イエスさまが復活されたすぐ後のできごとが記されています。トマスという人が出てきました。イエスさまには、いつもイエスさまのそばにいた12人の特別な弟子がいましたが、トマスはこの12弟子の一人です。

イエスさまは、復活されたその日の夕方に、弟子たちの前に来てくださいました。そこで弟子たちはイエスさまに会い、イエスさまの言葉を直接聞きました。イエスさまの体には十字架にかかった“跡”が二つ残っていました。イエスさまのどこを見て、弟子たちは「十字架にかかったイエスさまが復活されたんだ！」とわかったでしょう？それが手とわき腹の穴です。イエスさまの手とわき腹には穴がありました。十字架にかけられる時、釘で手を打ち付けられたからです。そして、十字架にかかったイエスさまに対して、兵隊がやってきて、下からイエスさまのわき腹を槍で刺しました。その二つの傷の跡を見て、弟子たちは「イエスさまが本当に復活されたんだ！」と信じて喜んだんですね。

でもトマスは、　この時そこにいませんでした。他の弟子たちはトマスにこう言いました。「イエスさまを見たよ！」そうすると、まだ復活されたイエスさまに出会っていないトマスは、そのことを信じることができませんでした。トマスは、「イエスさまの釘の跡とわき腹の跡を、自分の目で見て、自分の手で触らないと信じれない！」と言いました。

そんなトマスの前にも、イエスさまは現れて下さいました。イエスさまはトマスに、「あなたの指をここに当てなさい」と言って、手の傷の跡とわき腹の傷の跡を見せて下さいました。さらにイエスさまはトマスにこうおっしゃいました。「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」。イエスさまは、トマスがイエスさまのことを信じ

て、生きていくことを願っておられました。トマスは「イエスさまこそ私の主人だ、イエスさまこそ私の神さまだ」と告白します。

②自分の目で見たら信じる？

皆さんは、もし先生が「ここには見えないけど大きな大きなたまごがあります！」と言ったら信じますか？信じられない？なんで信じられない？そうですね「見えないから信じられないん」ですね。「触れないから信じられないん」ですね。

僕たちは何かを知る時、自分の目で見たり、自分の手で触ることをとても大事にします。自分が直接見ないと信じることができないトマスの気持ちはよくわかりますね。イエスさまに直接会えたら、イエスさまのお話を直接聞けたら簡単に信じれるのに……」そう思うかもしれません。

じゃあどうしますか？　聖書の舞台イスラエルに飛行機に乗っていきますか？でももしイスラエルに行ったとしてもイエスさまには会えません！だってイエスさまが生きてたのは二千年前だから。どうしましょうか？

ちょっと反対から考え直してみましょう。イエスさまに直接会った人たちは、みんなイエスさまのことを信じることができたんでしょうか？　イエスさまに病気を癒してもらった人はみんなイエスさまを信じることができたんでしょうか？　あるときイエスさまは10人の皮膚病を治されましたが、イエスさまのところに帰ってきてイエスさまに感謝したのはこの10人のうちの一人だったと書いてあります。旧約聖書でもそうです。イスラエルの人々が奴隷とされていたエジプトから脱出した時、神さまは天からマナを降らせてくださいました。イスラエルの人たちは神さまが直接食べ物を与えてくださっているのをいつも見ていましたが、でも、神さまを信頼することができませんでした。

神さまを信じるということにおいては、自分の目で見るかどうかということが、絶対に必要なわけじゃないんです。トマスは自分の目で見てなかったから信じられなかったんですね。そのトマスにイエスさまはこうおっしゃいます。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」。「幸い」っていうのは「幸せ」ということですね。直接見なくても、信じるなら、その人はとっても幸せな人だとイエスさまは教えてくださいました。

③聖書が言う「幸いな人」とは

では、このイエスさまがおっしゃった「幸せな人」というのはどういう人でしょうか？　ヨハネによる福音書の中には「永遠の命」という言葉が何回も出てきます。イエスさまを信じる人は「永遠の命」が与えられます。人間はみんな死にます。でも、イエスさまを信じる人は「永遠に生きる」んです。不思議ですね。でもこれが聖書の約束です。イエスさまが死から復活されたように、私たちも死に負けないんです。死んで終わりではないんです。イエスさまを信じて「永遠の命」をいただく。これが聖書の言う「幸せな人」です。

④私たちは聖霊において聖書を通して信じる

イエスさまは「見ないで信じる人は幸いである」とおっしゃいました。イエスさまがおっしゃったことは、トマスにだけ言っていることだと思いますか？　イエスさま

は、イエスさまに直接はお会いすることはできないすべての人たちにこの言葉を向けておられます。

私たちはイエスさまに直接会って、イエスさまの手とわき腹を見て、触ることはできません。イエスさまに直接お会いして、イエスさまの奇跡をこの目で見たり、イエスさまのお話をこの耳で聞いたりしたひとをすごく羨ましく思うかもしれません。でもそれを残念がったり、羨ましがる必要はあません。私たちもこの目で直接見ることはできないんですが、イエスさまにお会いするんです。いや、今もお会いしているんです。

イエスさまは天に昇られて、聖霊を送ってくださいました。イエスさまは聖霊を通して、私たちに出会ってくださいます。私たちには聖書があります。聖霊が働いてくださって、聖書の言葉を通して私たちもイエスさまにお会いして、イエスさまを信じて、「とっても幸せな人」になることができるように導かれています。お祈りしましょう。 （大宮季三）

《今週の暗唱聖句》

イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」（ヨハネによる福音書２０章２９節）

４月４日　　ヨハネによる福音書２０章２４～２９節　　【分級展開例Ａ】

復活されたイエスさま

〈もんだい１〉　イエスさまが復活されたのに、信じられなかったトマスは、何て言いましたか？

こたえ：25節後半を声に出して読みましょう。

〈もんだい２〉　①「くぎあと」はイエスさまの体のどこにありましたか？

②もう一つのしるしは、体のどこにありましたか？

こたえ：25節後半を、もう一度声に出して読んでみましょう。

〈もんだい３〉　イエスさまは弟子たちに何と言われましたか？

こたえ：26節後半の言葉を、声に出して言ってみましょう。

〈もんだい４〉　トマスには何と言われましたか？　言葉を完成しましょう。

「あなたの○○をここに当てて、わたしの○を見なさい。また、あなたの○を伸ばし、わたしの○○○○に入れなさい。○○○○○○○ではなく、○○○○○○になりなさい。」

〈もんだい５〉　トマスは何て言いましたか？

こたえ：「わたしの○、わたしの○よ。」

〈もんだい６〉　イエスさまは何と言われましたか？

こたえ：29節

〔工作〕クロスパズルを作ろう！（用意するもの：画用紙、はさみ）

教師の準備：インターネットで「タングラム　クロスパズル」を検索して、長方形の画用紙に図形を書いておく。

子どもの工作：図を切り取って十字架の形を作る。

同じ型でほかのいろんな図形も出来るよ！

４月４日　　ヨハネによる福音書２０章２４～２９節　　【分級展開例Ｂ】

復活のキリスト

イエスさまの復活はどんな様子でしたでしょうか。また、復活したイエスさまは、どんなお姿だったでしょう。

聖書の復活したイエスさまの描写を確かめてみましょう。

またその描写は、私たちにどんなことを教えてくれるでしょう。

全部を取り上げるのは大変です。ポイントとなるような１～２箇所を読んで、イエスさまの復活がどんな意味を持つか考えましょう。

マタイ福音書

- 28：9　声をかけてくる。足があり、その足を抱くことができた
- 28：18　天と地の一切の権能を授かっている

ルカ福音書

- 24：12　亡くなった時の肉体が復活した
- 24：27　聖書全体が預言した通りに復活した
- 24：31　思うままに見えなくなることができる
- 24：36　突然人々の真ん中に立つことができる
- 24：39　肉や骨がある。目で見て確かめることができる
- 24：43　魚を食べることができる
- 24：51　その肉体をもって天に上げられた

ヨハネ福音書

- 20：16　復活前の知識、言語を使う
- 20：19　鍵がかかった部屋に自由に出入りできる
- 20：20　十字架で受けた傷を持つ
- 20：22　息を吹きかける

使徒言行録

- 2：11　同じ有様で、またおいでになる
- 7：56　天で父なる神の右に立っている
- 9：5　天から人に語りかける

４月４日　　ヨハネによる福音書２０章２４～２９節　　【分級展開例Ｃ】

復活のキリスト

復活という言葉も気軽に使われる言葉になっています。「キリストの死からの復活」がどんな出来事なのか、それがどれほど受け入れ難い出来事なのかを改めて確認しましょう。

また、自分が復活をどう受け止めるか改めて考えてみましょう。答えは理想の答えをすぐに得る必要はありません。考えるきっかけとなれば幸いです。

「復活」ってどういうことでしょう？

スポーツとかで倒れていた人がもう一回立ち上がるのも「復活」って言いますね。人気がなくなっていた芸能人がまた注目されるのも「復活」です。他には？

イエスさまの復活はどんな特徴があったでしょう？　聖書が確認していることを見てみましょう。上で挙げた「復活」と一緒でしょうか？　どこが違いますか？

マルコ福音書15：44～46、ヨハネ福音書19：30～42

トマスはどうして「わたしは決して信じない」と言ったのでしょう。気持ちを考えてみましょう。自分がトマスだったら、なんと言いますか？

イエスさまはどうして信じないトマスに現れてくださったのでしょう。その時のトマスの気持ちも考えてみましょう？

どうしてイエスさまは、復活を信じない人のところに現れてくださらないのでしょうか。

・世界中の人に現れることはできないから
・信じられない人は目で見ても結局信じないから
・聖霊が助けてくだされば見ないでも信じられるから　など

【分級展開例 D】

続・聖書の世界を知ってるかい？（動物編）

聖書（新共同訳）に出てくる動物にはどんなものがあったでしょうか。レビ記11章には食べよい生き物と食べると汚れる生き物が分類されています。まず、どのような分類方法か確かめてみましょう。

A．ひづめが分かれ、完全にわれており、しかも反芻（はんすう）する。→食べてよい（3節）

【反芻（はんすう）】一度飲み下した食物を口の中に戻し、かみなおして再び飲み込むこと。

B．ひづめが分かれているか、反芻（はんすう）するだけのもの。→食べてはならない（4節）

なぜ、そのように命じられているのか理由はわかりません。では、それぞれにどのような動物が挙げられているか、書き出してみましょう。

A．

B．

次に水中の生物については、こう言われています。

A．ひれやうろこのあるものは食べてよい。

B．ひれやうろこのないものは食べてはならない。

では、「うなぎ」はどうでしょうか（＊聖書にはウナギは出て来ません）。ユダヤ教のある人々は「うなぎ」は食べてもよいとしました。何故だと思いますか？

次に鳥類・昆虫・爬虫類についてはどんな生き物が挙げられていますか？

鳥類：

昆虫（「4本足」は6本足だと考えてください）：

爬虫類：

その他に、「四本の足で歩くが、足の裏の膨らみで歩く野生の生き物はすべて汚れたものである」（27節）とあります。どのような動物か、名を挙げてみましょう。

レビ記の他に聖書の中で動物が出てくる箇所を幾つあげることができるでしょうか。次の生き物について探してみましょう。

1．蟻

2．ジャッカル

3．ベヘモット

4．レビヤタン

４月１１日　ルカによる福音書２３章３９～４３節、子どもと親のカテキズム問４０　【解説と黙想】

死後の祝福

１．教理の解説

問40　私たちは死んだあと、どうなりますか。

答　　死んで終わりではありません。死んだあと、私たちのたましいは完全にきよめられ、天におられるイエスさまのもとに引き上げられます。体はイエスさまに結び合わされたまま墓の中で休みます。

以下は、日本キリスト改革派教会大会教育委員会著「神さまと共に歩む道『子どもと親のカテキズム』解説」132～134頁の抜粋です。

(1) 肉体の死

問40と問41は個人の死と死後の問題を扱います。人間は、罪を犯した結果、神によって神との交わりを失う霊的死、肉体の死、永遠の死と滅びへと定められました。アダムが罪を犯して以来、人間は生まれながらにして悪へと傾く性質を持つ者となり、すべての人が罪人となりました。それゆえ、霊的死と肉体的死がすべての人に及びました。しかし、神は、私たちを罪と滅びから救い出すためにイエス・キリストを地上に送ってくださいました。イエス・キリストを救い主として信じる者たちにとって、肉体の死は絶望ではないのです。

(2) 死後のたましいは？

救い主イエス・キリストは、私たちの罪のために十字架に死に、復活し、死に勝利して、今や神の右に座しておられます。そして、天に私たちの場所を用意してくださっています(ヨハネ14:1～3)。ですから、私たちにとって、死は終わりではありません。死んだ後、私たちの魂は、天上のキリストのもとに直ちに召されるのです。

(3) 死後の体は？

キリストによる贖いによって、私たちの体も贖われました。信仰によって、魂だけでなく、肉体も含めた全存在がキリストに結ばれているからです。肉体の死に際して、肉体は地上にキリストに結ばれて墓に休みます。

２．テキストの解説

ルカによる福音書　23章39節～43節は、主イエスと共に十字架にかけられた一人の罪人の信仰告白と、それに対する主イエスの憐れみ深い救いの約束の場面です。残り僅かの命しか残っていない罪人が、ただ主イエスに望みを置いたとき、主イエスから「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」(43節)という救いの約束をいただきました。

３．子どもへのメッセージ

私たちは、もちろん与えられた命を大切にして、この世において主イエスに従って精一杯生き続けるべきです。けれども、死を過度に恐れる必要はありません。むしろ、私たちにとって死は「罪と悲惨、この世の労苦と涙からの完全な解放、永遠の命の豊かな祝福の入り口です（「終末の希望についての信仰の宣言」)。十字架の激痛と苦しみの極みを通して、ご自身の尊いお命を献げて「他人を救う」という犠牲によって打ち立てくださった楽園の恵みに、私たちも与らせていただきましょう。　(小澤寿輔)

《参照聖句》　テサロニケの信徒への手紙一書５章２３節前半
《教理問答》　ウ信仰告白３２章１節、ウ小教理問答問３７

４月１１日　ルカによる福音書２３章３９～４３節　　**【説教展開例】**

死後の祝福

◇…… **単元のねらい** ……◇

地上に生を受けた者はすべて生まれながらして罪を持っているため肉体の死を経験するが、イエス・キリストを救い主と信じて心にお迎えする人は、その肉体の死ですべてが終わるのではなく、死の時、イエス・キリストに結ばれている魂は天の国に引き上げられ、イエス・キリストに結ばれている体は墓の中で復活を待つという、大きな希望に満ちていることを知ってもらいたい。

「わたしと一緒に楽園にいる」

おはようございます。皆さんは、何か生き物を飼ったことがあるでしょうか。犬を飼っている、猫を飼っているというお友だちがいるかもしれません。また、魚を飼っているお友だち、夏には虫を飼うお友だちもいるかもしれません。生き物を飼っているお友だちも、飼っていないお友だちも知っていると思うのだけど、生き物は、いつかは死んでしまいます。いつまでも一緒にいたいと願っても、いつか必ずお別れのときが来ます。これは人間も同じです。私たちも、いつかは死ぬことになります。

今日の「子どもと親のカテキズム」問40は、「私たちは死んだあと、どうなりますか」と問うています。「イエスさまを信じている人が死ぬと、そのあとどうなるのですか？　その人のたましいはどうなるのですか？　その人の体はどうなるのですか？」と聞いています。

イエスさまを信じている人は死んだあとどうなると、カテキズムは答えているでしょうか。「答：死んで終わりではありません。死んだあと、私たちのたましいは完全にきよめられ、天におられるイエスさまのもとに引き上げられます。体はイエスさまに結び合わされたまま墓の中で休みます」とあります。「死んで終わりではない」と言っています！「死んだら完全に消えてなくなる」と思っている人が多いようですけど、本当は死んで終わりではないのですね！では、ぼくたち私たちのたましいはどうなるのでしょう。体はどうなるのでしょう。

さっき読んだルカによる福音書23章39節から43節にその答えがあります。これは、イエスさまが十字架にかかられて苦しんでおられるときのお話です。そのとき、十字架の周りにいるすべての人たちは、イエスさまに「もし神からのメシア（救い主）なら、自分を救ってみろ」と悪い言葉を言ってあざ笑っていました。

ここに二人の犯罪人が登場します。彼らもイエスさまと一緒に十字架にかけられていました。そのうちの一人がイエスさまに「お前はメシア（救い主）ではないか。自分自身と我々を救ってみろ」(39節）と言ってののしりました。十字架の激痛の最中に、よくそんなことが言えましたね。

その言葉を聞いたもう一人の犯罪人がたしなめました。「お前は神をも恐れないの

か、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ」と彼は言います（41節）。彼は、イエスさまが神であること、そして、自分が罪人であることを認めています。それだけではありません。彼は、「この方は何も悪いことをしていない」(41節後半)と、イエスさまが無罪であるとも言っています。そして、この犯罪人は、イエスさまにお願いをします。「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」（42節）。彼は何と言いたかったのでしょう。それは、「イエスさま、私を救って天国に入れるようにしてください」というお願いです。今、十字架の刑にかけられていて、わずかの命しか残っていないこの犯罪人は、もう罪の償いなど何もできません。悪いことをしてしまった相手に「ごめんなさい」と謝ったところで、もう手遅れです。しかし、彼は、隣にいらっしゃるイエスさまに望みを置きました。「イエスさまなら、わたしを救ってくださる」そう信じた彼は、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」（42節）とお願いしたのです。それは、真心からのお願いでした。

その彼のお願いに対して、イエスさまは何とお答えになったでしょう。「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」（43節）と言われました。これは、「あなたは死んだあと、わたしと一緒に天国にいる」という約束です。ものすごい約束ですね。イエスさまと一緒なら「天国」なのです。

このお話にあるように、イエスさまを自分の救い主と信じる人は、死んだあと、たましいは、すぐにイエスさまのおられるところ「天国」に入れていただけることが約束されます。たましいだけでなく、体も救われます。体は地上に残されますが、イエスさまに結ばれているから救われています。イエスさまを信じ、イエスさまと共にいるとき、あらゆる罪は赦され、神の子どもとされるのです。そして、天国のお約束をいただけるのです。それは、私たち人間にとって最高の幸せです。幸せとは、どこか遠くにあるものではありません。イエスさまと共にあるのです。

この犯罪人は、イエスさまによって最高の幸せである「天国」のお約束をいただきました。そして、心の平安もいただきました。もうこれ以上、何が必要でしょう。

まとめ

今日のこのお話を、私たちは他人事のようにとらえて、聞き流してしまっても良いのでしょうか。いいえ。決して他人事のようにとらえないでください。ぼくたち私たちも、このお話に登場する犯罪人と同じ「罪人」なのです。神さまを悲しませることを一度もしたことが無いと言える人は、この世に一人もいません。人はみな、生まれ持った「罪」のせいで、神さまとの交わりが切れてしまっているので、たましいは死んでいます。

「罪」を持ったまま死んだら、どうなるでしょう。たましいと体が分かれて、たましいは神さまの裁きを受けて永遠に滅んでしまいます。体も永遠に滅んでしまいます。誰でも「罪」を持ったまま死ねば滅びてしまいます。

もし、ぼくたち私たちが「罪」のために永遠に滅びてしまったら、神さまはとっても悲しまれます。ぼくたち私たちを深く愛してくだっているからです。神さまは、ぼ

くたち私たちを「どうしても救いたい」と思ってくださいました。そして、そのために、イエスさまが、ぼくたち私たちの身代わりとなって十字架の刑罰を進んで受けてくださったのです。そうです、イエスさまは、ぼくたち私たちの救い主なのです。

イエスさまを自分の救い主として信じて心に受け入れた人にとって、体の死は、もう絶望ではないのです。たましいも体も、イエスさまに結ばれて永遠に生きるようにされるのです。ぼくたち私たちも、救い主イエスさまを心にお迎えして、天国のお約束をいただきましょう。お祈りしましょう。

お祈り

「イエスさま、あなたは私を罪の滅びから救ってくださるために、私の身代わりとなって十字架にかかってくださいました。心から感謝します。今、救い主として、私の心に来てください。私を天国に入れるようにしてください。このお祈りをイエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン」 （小澤寿輔）

《今週の暗唱聖句》

どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。

（テサロニケの信徒への手紙一５章２３節）

４月１１日　ルカによる福音書２３章３９～４３節　【分級展開例Ａ】

イエスさまの祝福

〈しつもん〉 ①十字架につけられたのは何人ですか？
②十字架につけられたのはだれでしたか？

〔工作〕“だれが言ったか”パズル（用意するもの：紙、はさみ、ペン）

1．紙に 3 つの十字架を、間隔を空けて描く。

2．3 つの十字架にそれぞれ「イエスさま」、「はんざいにん」、「もう一人のはんざいにん」と書く。

3．紙に39節、40, 41節、42節、43節の「　　」の言葉を書いて切り抜く。
（言葉を言っている吹き出しの形 にしてもよい。子ども自身書くのが　むずかしければ、教師が準備しておく）

4．切り抜いた言葉が誰の言葉か、子どもに考えさせる。
「3 つの十字架のそばに置いてみましょう。声にだしてロールゲーム（役になり切るゲーム）をしてみましょう」

４月１１日　ルカによる福音書２３章３９～４３節　　【分級展開例Ｂ】

死後の祝福

人が死んだ後どうなるのか、実際に見てきた人はいません。様々な死生感に基づく死の理解があり、特に日本では無自覚に異教的迷信的な死生感が子どもたちにも大きな影響を与えています。

死について受け止めることができるかどうかは個々の子どもの理解度や経験によって異なります。辛い思いをしないように丁寧に配慮しましょう。

イエスさまは、ご自分が十字架で死ななければならないこととどのように向き合ったでしょうか。ルカ福音書22：39～46、23：32～38を読んで、イエスさまの気持ちを想像して話してみましょう（例、辛かった、嫌だった、悲しい、など)。

十字架上で「犯罪人の一人」は、イエスさまにどんなことを願ったでしょうか。どうしてそういう願いをしたと思いますか。

イエスさまの言う「楽園」とはどんなところのことでしょう。

聖書は人間の死についてどんなことを教えているでしょう。なぜ死ぬのは辛いのでしょう。

信じる者はそうでない者とどう違うでしょう。

創世記3：19（人の罪の結果としての死）
サムエル記下14：14（取り返しがつかない）
詩編6：6（神に感謝できない）
コヘレトの言葉12：7（肉体は大地に、霊は神に帰る）
ヨハネ福音書11：25～26（信じる者は乗り越える）
ローマ6：6（罪の体が滅びる）
コリント一15：50～56（復活の勝利へと続く）

４月１１日　ルカによる福音書２３章３９～４３節　　【分級展開例Ｃ】

死後の祝福

死の問題について、子どもたちはあまり触れ慣れていません。個々の子どもたちの状況に注意を払いましょう。ふざけ半分に発言する子どもたちがいる場合、また特に近い時期に近親者を亡くすなど、死を経験し繊細になっている子どもがいる場合は、すこし距離を保って扱うようにしましょう。

質問例

「子どもと親のカテキズム」の問40を改めて開いてみましょう。

前提として、聖書は人間が、何と何からなっていると考えていますか。

人間の二つの要素は、死によって生きている時とはどう変わりますか。

人にとって死は苦しみや悩みそのものであり、他の様々な悩みの原因となります。
どうしてだと思いますか。

どうすれば、人は死の悩みを解消できるでしょう。カテキズムはなぜ「死は終わりではない」と教えるのでしょう。

カテキズムは死が終わりでないことに加えて、死を迎える時に起こることをいくつか挙げています。それらの変化が起こったら、どうなると思いますか。

４月１８日　ヨハネの黙示録２１章１～４節、子どもと親のカテキズム問４１【解説と黙想】

体の復活

１．神の「良き」創造における霊と肉

わたしたちは、心や魂が尊いもの、身体が劣ったものと考えがちかもしれない。しかし、聖書は、神が人間を霊と肉とから成る統一的な存在として創造されたと語る。その創造に対して、神は「極めて良かった」（創世記１章31節）と言われた。人間をかたちづくる霊と肉とはいずれも本来、「良い」ものであり、両者の間に区別はあっても序列はないはずである。両者はそれぞれの役割をもって、相互補完的に一人の人間をかたちづくっている。

また、神の民は「主を賛美するために」創造された（詩編102編19節）とも言われる。詩編を見渡せば、「わたしの魂は主を賛美する」（詩編34編３節）という人間の霊的な部分が神に向かう描写もあれば、「太鼓に合わせて踊りながら神を賛美せよ」（詩編150編４節）という人間の肉たる全身をもって神に向かう描写もある。やはり、人間は霊と肉とをもって、神を賛美するために創造された存在である。

２．御子の受肉と復活

神の御子は肉体をもつ人としてこの世に来られた。人間はその罪によって、自身と隣人の霊と肉とを汚した。霊と肉とによる賛美から遠ざかった。しかし、神は創造の良き思いを絶やすことなく、御自身の創造物たるこの世と人間とを愛し続けられた。その愛の結実が神の御子の受肉という出来事であった（ヨハネ３章16節）。神は人間の霊と肉とを罪から救い出されるために、御子に肉をとらせ、人とならせられた。御子は人として、人が負うべき罪とその代価を十字架に至るまですべて担いきられた。そして、復活された。新しい肉体を身にまとわれて。その主に弟子たちはすぐに気づけない（ルカ24章16節）。しかし、復活の体は確かに主のものであった（同39節）。その主に弟子たちは礼拝を献げる（同52節）。

３．わたしたちの復活

主の復活は、キリストに結び合わされ、この地上を生き抜いた者の初穂である（Ⅰコリ15章20節）。神の民もまた終りの日に復活する。新しい、朽ちない肉体をもって。神の民も一度は地上を去らなければいけない。しかし、その死は罪の罰ではない。それは十字架で乗り越えられた死、栄光に入る死である。ひと足先にその霊魂が。肉体はキリストに結び合わされたまま地上に置かれる。肉体は、なおも地上の日々を歩む者たちに教えることがある。地上で身にまとう肉体は朽ちるものであり、やがて朽ちない体に変えられる終りの日を待つべきことを。終りの日に、神はわたしたち神の民を復活させられ、新しくされた体を栄光化された魂とひとつに結び合わされる。人間がなすべきことをなすために。それは主を賛美することである。主を賛美することを喜ぶことである。もはや何にも遮られることなく、嘆きと労苦に邪魔されることなく、人間は神への賛美に全存在が喜びで満たされる。そこに神の祝福がある。わたしたちが約束され、目指しているのはそんな日である。

（柏木貴志）

《参照聖句》　コリントの信徒への手紙一１５章５２節、フィリピの信徒への手紙３章２１節
《教理問答》　ウェストミンスター大教理問答８７、９０、ウェストミンスター小教理問答３８、ハイデルベルク信仰問答５７、５８

４月１８日　ヨハネの黙示録２１章１～４節　**【説教展開例】**

体の復活

◇…… **単元のねらい** ……◇

わたしたちは今日もまたひとつ神への賛美を重ねながら、終りの日を待ち望む。わたしたちの主イエス・キリストが再臨くださり、この世界を、わたしたちの体を新しくしてくださる日を待ち望む。その日、神の民は、神が創造において志向されていた「良さ」の完成をその身に知る。その完成をもって献げるのは喜びの賛美である。その日をめざす賛美をきょうも子どもたちと共に献げたい。

「神さまを賛美するために」

序論

みんなは、何のために生きるか・生きているかって考えたことがありますか。

昔、流行ったラブソングに「君を守るため、そのために生まれてきたんだ」(「ライオンハート」）と歌ったものがありました。誰か大切な人を守るために、自分は生まれてきた、生きていくんだと歌うこと、それはとても素敵なことで､憧れちゃいますね。聖書も、「心を込めて愛し合いなさい」（Ⅰペト４章８節）と教えています。人は人を愛するために生きている。それは間違いなく、わたしたちが大切にし続けなければいけない聖書の教え、真理です。

そして、聖書はそのために、神さまがまずわたしたちを愛してくださっていることを教えています（ヨハネ３章16節、一ヨハ３章10節)。その神さまの愛をみんなで分かち合うこと。それが、わたしたちが愛し合うことになります。そんな神さまの愛を賛美するために、きょう、みんなでこうして集まっています。そういえば、聖書には「主を賛美するために民は創造された」（詩編102編19節）という御言葉もありました。みんなは神さまを賛美するために生まれてきたんですね！

本題１　心と体を使って賛美する

さて、きょうは「体の復活」というお話をするよと言っていたのに、全然関係ないようなお話から始めたので､みんな､あれ？と思っているかもしれません。でも、実は全然関係ないお話ではないんです。みんなが､神さまを賛美するという時に､どうやってするかな。

まずは、心を神さまに向けましょうと教えられてきたよね。それから、賛美歌をうたう時には立ち上がって、お腹に力を入れて、口から大きな声を出して……けっこうカロリーを消費するよね。詩編には「両手を広げ」（143編６節）て賛美するとか､「太鼓に合わせて踊りながら」（150編４節）というのもあるね。どうやら、賛美というのは心も体も全部を使ってやるもののようです。

それは、神さまがわたしたちの心も体もとっても「良い」ものとして、神さまを賛美するためにつくってくださったからで

す。体を動かすのが苦手という子や、先生のようにオンチでうまく歌えないという子もいると思うけれども、いいんです、いいんです、神さまは、必ず得意なこと、こういうふうに賛美しているのが楽しいということを与えてくださっているはずなんです。一人で静かにお祈りしているのがうれしいという子もいると思います。そういう自分の賛美を見つけていきたいですね。そして、みんなと一緒にできる賛美を見つけていきたいですね。なんといっても、みんなは主を賛美するために創造されたんですから！

神さまを賛美しながら、わたしたちは生きていきます。教会で、毎日の生活で、神さまと一緒に生きていきます。でも、どうでしょう。なかなか神さまを心から賛美できない日もあるかもしれません。心が重たくなったり、身体が疲れ切ってしまうことがあるかもしれません。きょうも、明日からのことが心配になっていたり、お昼ご飯のことに気持ちがいってしまっている子もいるかもしれません。みんなは、賛美することがとても大切なことだとわかっています。それがとてもうれしいことだともわかっています。同時に、それがなかなかムズカシイことだとも経験し始めていると思います。お兄さんお姉さんになればなるほどね。

聖書はそれを「罪」と呼びます。みんなはこの「罪」とずっと付き合っていかなければいけません。生きている限りずっとです。この地上から去る、その時に「罪」から解放されるその時まで、ずっと、みんなは「罪」を抱えながら、神さまと一緒に歩む難しさと、それでもうれしいという両方の思いを抱えながら生きていくんです。それはけっこう大変なことですよね！　ですから、みんなで祈り合って、励まし合っていかなければいけません。愛し合わなければいけません。一人で生きるんだ！なんて思っても絶対に無理です。やっぱり祈ってもらわなければいけません。そして、みんなで同じところを目指していかなければいけません。

本論２　代々とこしえに喜び楽しみ

きょう、「体の復活」というテーマで、確認したかったのはこのことです。みんなはどこを目指して生きているのか、ということです。

聖書は、神の民にとって死はもう罪の罰ではないと教えます。パウロさんは「死は勝利にのみ込まれた」（Ⅰコリ15章55節）と叫びました。みんなにとって死は神さまの栄光の中に入っていくということです。亡くなるとすぐにその魂は天におられるイエスさまのところに引き上げられます。それで、体だけが残されるんだね。体はすぐに消えてなくなりません。お骨になってお墓に埋められます。それは待つためです。イエスさまがもう一度、来てくださって、この世界を完成させてくださる時をです。イエスさまがもう一度、来てくださったときに、魂と、復活して新しくされた体が一つにされる時をです。そして、新しい魂と新しい体で、でも、みんな自身の魂と体で、神さまを賛美するんです。みんなは、神さまを賛美するために創造されたんですから！

みんなは、イエスさまが十字架のあと、三日目の朝にご復活されたことを知っているよね。それは、わたしたちもまた死の先に、復活するんだということを、本当にそ

うなんだ！　ということを、わたしたちが知るためでもありました。イエスさまでもできないことを、わたしたちができるはずないですよね。でも、イエスさまはご復活なさいました。新しい体をもって、弟子たちの前に現われてくださいました。本当に体があるんだよと、「わたしの手や足を見なさい」(ルカ34章39節)と言われましたし、一緒にご飯も食べられました（同43節)。そうして、イエスさまは弟子とわたしたちに、新しい体が与えられる復活が本当にあること、そこに神さまの祝福があらわされることを見せてくださいました。ですから、復活は本当に、わたしたちの身にも起こるんです。そのために、イエスさまがもう一度、この世界に来てくださいます。そして、その時に、新しくされるのはわたしたちの体だけではありません。

聖書は、この世界が「新しい天と新しい地」(黙示21章１節)になると教えています。そこではもう、みんなが悲しい涙を流すことはありません。「もはや悲しみも嘆きも労苦もない」(同４節)。みんなは、新しくされた世界のなかで、神さまの祝福を全身に浴びながら、神さまを賛美するんです。明日に怯える必要もなければ、食べる物、着る物の心配をする必要もない。みんなは本当のみんなになって、そうして、目の前に神さまを仰いで、賛美の喜びに浸るんです。そのかけらを、きょう、一緒に受け取れたら、いいですね。

終論

終りの日がいつやってくるのかは誰にもわかりません。けれども、必ずやってきます。イエスさまがあふれる祝福をもって来てくださいます。みんなで、神さまへの賛美を重ねながら、その日を待ちましょう。その日をわたしたちは目指しているんです。　（柏木貴志）

《今週の暗唱聖句》

もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。（ローマの信徒への手紙６章５節）

４月１８日　ヨハネの黙示録２１章１～４節　　**【分級展開例 A】**

からだの復活

〈おはなし例〉

イエスさまが、また来てくださるときあります。それがいつかは、だれも知りませんが、かならず来てくださいます。

そのときまで生きているでしょうか。もう死んでいるかもしれません。でも、心配しないでください。イエスさまを主と呼んで、神の子であることを知って、信じている人をよみがえらせてくださいます。

そのときに、たましいといっしょにからだも復活します。どんなからだでしょうね。今と同じかな？　そうではありません。イエスさまと同じ素晴らしい栄光のからだに変えられるのです。

もし今病気でも、もう病気のないからだに変えられるでしょう。目や耳が悪くても、よみがえらせてくださるときには、目も悪くなく、耳も悪くないからだに変えられるのです。そして、もう死ぬことはありません。

わたしたちが新しい栄光のからだとたましいを与えられて生きるところは、神さまがいつもいてくださる国（御国）です。

聖書には、「神が人と共に住み、人は神の民となる。……彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない」（ヨハネの黙示録21章 3 節，4 節）、と書いてあります。

わたしたちは、新しい神さまの国で、それほどの祝福をあたえられて、永遠に神さまをさんびして、よろこんで暮らすのです。

この神さまが信じるものたちを今も見ておられます。わたしたちのさんびと祈りをきいておられます。神さまがよろこんでくださるようにこれからも歩みましょう。

〈みことばクイズ〉〇にことばをいれてください。

「神が〇〇と共に住み、人は〇〇の民となる。……彼らの目の〇〇〇をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや〇はなく、もはや〇〇〇〇も嘆きも労苦もない」

４月１８日　ヨハネの黙示録２１章１～４節　　【分級展開例Ｂ】

体の復活

現代の子どもたちはゲームなどで「復活」という言葉には慣れています。実際の人生においてもゲームのように「復活する（生まれ変わる、転生する）なら、今の命は捨てても良い」と考えるならば問題です。一回だけのかけがえのない命と体が、復活によって完全に聖くされ、主にある喜びが永遠に続くことを希望とできるようにしましょう。

聖書を読んで、自分の考えを自由に話せるようにしましょう。多少違っていてもその真意を尋ねるようにし、正解を当てさせるのではないように心がけましょう。

・聖書には、私たちが地上の生涯を終えても、それで全てが終わりなのではないことを教えています。復活の時、私たちの体はどうなるでしょう。また復活した私たちはどんなふうに過ごすでしょう。コリントの信徒への手紙一（15:12～58）を開いてみましょう。

・(12～19節）キリストの復活、死者の復活がなければ、なぜ私たちは惨めなのでしょう。

・(20～28節）キリストの復活は、単によみがえることだけでない意味を持ちます。神さまが勝利することは、私たちにとってどんな意味があるでしょう。

・(29～34節）復活があると信じる人とないと思っている人とでは、人生の見方がどう違うと言われているでしょうか。どちらが良いと思いますか。

・(35～49節）復活した身体と今の身体はどこが同じで、どこが違うでしょう。

・(50～58節）人が復活すると信じることで、今の私たちにとってどんな風に喜びとなるのでしょう。

４月１８日　ヨハネの黙示録２１章１～４節　　【分級展開例Ｃ】

体の復活

先々週はイースターでした。聖書の中には「復活」が教えられていますよね。
イエスさまの復活だけでなく、私たちもみんな復活することが教えられています。
復活するってどういうことでしょう？
自由に意見を聞き、子どもたちのイメージを確かめましょう。
復活について、天国、空の上といったイメージを持っていたら、逆にそこがポイントになります！

・聖書の中には、イエスさまを信じたならば、復活し、永遠の命をいただけることが教えられていますよね（参照：ヨハネ福音書11：25～27)。その時の復活って、イエスさまと同じように肉体をもっての復活なんです（参照：ルカ福音書24：39～43、ヨハネ福音書20：27)。

・イエスさまともかく、私たちは弱いところ、劣ったところ、汚れたところがありますよね。どんなに復活したからといってそういう嫌なところのままでは嫌ですよね。でも、今日の聖書の箇所には「もはや悲しみも嘆きも労苦もない（黙示録21：4)」って書いてあります。
　どんなことが解消されるでしょう？

・復活した私たちは「新しい天と新しい地」「聖なる都、新しいエルサレム」に住みます。そこはどんなところだと想像しますか？

４月２５日　コリントの信徒への手紙ー１２章１２～２７節、子どもと親のカテキズム問４２【解説と黙想】

教会と共に歩む道・キリストの体

子どもと親のカテキズムは問42から第二部である「教会と共に歩む道」の項目に入ります。ここでは教会の大切さを教えるわけですが、このカテキズムは教会論を詳しく論じるのが一つの特色となっています。

神を信じて歩む道は時に孤独を感じてしまうかもしれません。この問いはそういった悩みも理解しながら「私たちは独りぼっちですか」と問います。そして「いいえ」と答えることによって、教会において、同じ信仰を持つ者たちと共に歩んでいくという教会論に結びついていきます。

問42では教会とは「聖霊によって頭であるキリストと結び合わされた、ひとつのキリストのからだである教会」と説明しています。この問答で強調していることは教会が「キリストのからだ」であるということです。この単元ではコリントの信徒への手紙Ⅰ12章12～27節の御言葉が選ばれています。ここは使徒パウロが教会を「キリストのからだ」にたとえた非常に有名な聖句です。人間の体は色んな部分によって成り立っています。パウロが言うように目が手に向かってお前は要らないとは言えませんし、頭が足に向かって要らないとも言えません。一つ一つが大切な部分であり、大切な役割があった上で一つにされているのです。教会はキリストの体です。カテキズムの説明のように私たちは「聖霊によって一つに結び合わされ」ています。教会においてすべての人が大切にされなければならず、多様な役割があるのです。そしてキリストに結び付けられていることによって教会は生きた体であり、救いの恵みに満たされるのです。

さらにカテキズムは教会を「キリストのからだ」という表現だけでなく「国籍が天にある神さまの家族」とも説明します。教会は同じ信仰を持つ者たちを「兄弟､姉妹」とお呼びします。私たちはキリストに結ばれて神の子どもたちであり、兄弟姉妹であり､神の家族です。また､「国籍が天にある」と記されているように、神の家族において民族や人種、国といった制約がないことが教えられます。本日の聖書個所においてパウロは「わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け。皆一つの霊をのませてもらったのです」（13節）と説明している通りです。

最後にカテキズムは「私たちは、教会生活を共にしながら、祈り合い、はげまし合い、手を取り合って御国への道を歩みます。」と説明します。地上での教会生活には多くの試練があります。多くの悩みがあります。だからこそ、教会は神の家族であり、キリストの体であるがゆえに、共に祈りあい、励まし合って、歩んでいく使命があるのです。（高内信嗣）

《参照聖句》　エフェソ１：２３、マタイ１８：２０
《教理問答》　ウェストミンスター信仰告白２５，２６章

４月２５日　コリントの信徒への手紙一１２章１２～２７節　　【説教展開例】

教会と共に歩む道・キリストの体

◇…… **単元のねらい** ……◇

この日本で神を信じて生きる時、孤独を感じてしまうことがある。しかし、この単元では決して神を信じる道が独りぼっちではなく、教会という共同体の中で支え合って生きることであることが教えられる。教会と共に歩む道が喜びであることを覚え、歩みたい。

「キリストの体・神の家族！」

みなさん、おはようございます。今日も一緒に聖書のお話を聞きましょう。では早速今日のカテキズムを読みますね。

「問42　神さまを信じて歩む時、私たちは独りぼっちですか。

答　いいえ。私たちは、聖霊によって頭であるキリストと結び合わされた、ひとつのキリストのからだである教会です。神さまの子どもである私たちは、国籍が天にある神さまの家族です。ですから、私たちは、教会生活を共にしながら、祈り合い、はげまし合い、手を取り合って御国への道を歩みます」

今日は皆も朝から集まっているこの「教会」について学びたいと思います。教会って何だろう。考えてみたことあるかな。考えてみたら教会って不思議なところですね。だって家族でもない人、実際のお兄ちゃんやお姉ちゃんじゃない人たちのことを「兄弟・姉妹」って呼ぶんだよ。なぜだろう。それは今日のカテキズムにも書いてありましたが、教会は神の家族だからです。たまにテレビで大家族の生活が放送されることがありますが、神の家族はあんなものじゃないです。神さまが一家のお父さんである大家族です。

神さまを信じて生きていくとき、時に寂しくなることがあります。私は学校の友達が誰一人教会には行っていませんでしたから、本当に寂しかったのを覚えています。でも私たちは決して独りぼっちで神さまを信じているわけではありません。教会と言う神の家族の中で一緒に神さまを信じて生きています。同じ神さまを信じる仲間がいます。

教会って実は色んな人が来ます。日本の人だけじゃないです。外国の方も来ますね。神の家族というのは人種や民族は関係がありません。人種や民族や国を超えて、私たちは神の家族の一員です。

さて、「神の家族」についてお話ししましたが、今日はもう一つお話ししますね。それは今日が「キリストのからだ」だということです。先ほどのカテキズムでも「キリストのからだ」と記されていましたね。実は聖書朗読でもコリントの信徒への手紙Ⅰ12章27節に「キリストのからだ」と書いていますね。

ここはパウロさんという方が教会を「体」にたとえて話しているところです。パウロさんは14節でこう言っています。

「体は、一つの部分ではなく、多くの部分

から成っています」

僕らの体はいろんな部分がありますね。目があって、鼻があって、口があって、耳があって、手があって、足があります。また体の中の目に見えないところも色んな臓器がありますね。色んなものが組み合わされて一つの体になっています。パウロさんはさらにこう言っていますね。

26節「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです」

私たちの体は色んな部分がありますが、一つにつながっています。胃が痛くなったら、体全体が不調になりますね。腕を骨折したら、ひどい熱が出るって言いますね。そのように一つが悪くなると体全体が悪くなる。それは一つの体として結び合わされているからです。

これと同じようにパウロさんは教会が「キリストのからだ」であると説明します。教会には色んな人がいますが、神の家族としてイエスさまに結び合わされているからです。だから教会にいる一人一人は大切な存在だということを覚えたいと思います。そして教会はイエスさまから大きな恵みと力をいただくのです。イエスさまから力を受けて、一つとなって教会は一歩ずつ歩いていくことが許されています。

みんなは時に寂しく思ったり、悲しく思ったりすることがあるかもしれないね。学校に行きたくない時もあるかもしれないね。教会はそんな寂しい思いをする私たちを受け止めてくれて、家族と呼んでくれます。いや、何よりも僕たちが信じている神さまがみんなを子どもとして受け止めてくれています。イエスさまがみんなと一緒にいて力を与えてくれています。

また自分だけではなく、教会にいる仲間たち、教会学校に来ている仲間たちが痛みを覚えることがあります。寂しさの中にいることがあります。その人たちのことを覚えて、祈ってあげること、支えてあげることも教会の一員としてとっても大切なことです。

みんな一人一人いろんなことがあります。苦しいことや、試練もあります。でも私たちは決して独りぼっちではありません。教会の中で生きています。だから私たちは一緒に手を取り合って、祈り合って、励まし合って生きていくのです。イエスさまは私たち一人一人に恵みと力を注いでくださっています。（高内信嗣）

《今週の暗唱聖句》

あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。

（コリントの信徒への手紙一１２章２７節）

４月２５日　コリントの信徒への手紙一１２章１２～２７節　　【分級展開例 A】

キリストの体

〈おはなし例〉

みなさんのからだは、一つ一つの部分がつながって“からだ”になっています。どんな部分がありますか？

（子どもの答え：手、足、目、鼻、耳、口、頭、心臓、など）

からだの部分だけれどどれも大切です。なくてもよい部分はありません。どれかがなくなったら、ほかの部分で代わりはできないでしょう。

教会は、神さまに集められた人のあつまりです。そして、教会のことを聖書はキリストの体と呼び、ひとりひとりはその部分だと言います。

教会のひとりひとりの部分にはどんな人がいますか？

（子ども答：赤ちゃん、こども、大人、男の人、女の人、お年寄り、など）

体の部分のように働き（奉仕）がそれぞれの人にあります。オルガニスト、受付の人、掃除当番、看板を書く人、祈る人など。どれも大切で、どの働きもされているから、教会は体のように生きているのです。

だから、教会はキリストの体なのです。

また、教会は私たちのいる日本だけにあるのではありません。お隣の韓国にもたくさんキリスト教会はあります。全世界に教会はあります。いろんな人がいます。肌の色や言葉も違う国があります。人間はいろいろです。王様も、牢屋に入っている人も、病院にいる人も、スポーツ選手も。仕事もいろいろあります。教会ではどんな人も大事な人です。キリストの体の大切な部分なのです。

〈ゲーム：外国の言葉で言ってみよう！〉

「こどもさんびか（改訂版）」140番に20言語で「平和」がカタカナで記されています。まずカタカナで読んでみましょう。現地の発音を知りたいときはインターネットで聞くことができる言語もあります。

４月２５日　コリントの信徒への手紙一１２章１２～２７節　　【分級展開例Ｂ】

教会と共に歩む道・キリストの体

当時の教会にいた人々の身分や立場などについて、聖書に書いてあることから想像してみましょう。いろいろな立場の人たちがいることを確かめてみましょう。
（民族は？　社会的地位は？　財産は？　家族は？　元々の信仰は？）

・ペトロ（マタイ4：18、8：14、コリント一9：5など）
・ステファノ（使徒6：1など）
・パウロ（使徒16：37、18：2、22：3、コリント一7：7、フィリピ3：5など）
・テモテ（使徒16：1、3、テモテ二1：5など）
・テトス（ガラテヤ2：3など）
・リディア（使徒16：14）
・マナエン（使徒13：1）

４月２５日　コリントの信徒への手紙一１２章１２～２７節　　【分級展開例C】

教会と共に歩む道・キリストの体

家族のこと、個人生活のことについて触れるときは、他の人がいるところであまり深い問題について踏み込んでしまわないように注意する必要があります。

問いかけが、その子の心の深いところに届かなければ、メッセージは伝わりませんが、傷ついたところに触れてしまうと逆に拒絶されてしまいます。慌てて無理に踏み込むのではなく、相手の心に自然に触れる時を待って、種を播いておくように心がけると良いでしょう。

みんな、家族はクリスチャンかな？家族で他に教会に行っている人はいるかな？

学校で、「僕も、私も教会に行っている」って同級生っている？

じゃあ、友達と話してても「僕は教会に行ってるからみんなと違うな」ってことがある？

学校や他の所の知り合い、友達と、教会の知り合い、友達とは何が違うんだろう？

教会に行っててよかったなってことはある？　教会のいいところ、楽しいところってどんなところかな？

５月２日　　詩編１３１編１～３節、子どもと親のカテキズム問４３【解説と黙想】

母なる教会による命の養い

１．子どもと親のカテキズム問43

聖書には、神と私たちとの関係を母と子の関係として教える御言葉がある。「わたしの魂を、幼子のように　母の胸にいる幼子のようにします」（詩131：2)、「母がその子を慰めるように　わたしはあなたたちを慰める」（イザヤ66：13）

問43の答えは、キリストが、母の胸に抱かれるように私たちを養い、育て、守り、導いてくださるという告白である。

キリストを頭とする教会は、まさに御言葉と聖餐の食卓において、神の子どもたちを養い導いてくれる「母」なのだという教会理解が教えられている。教会は子どもたちにとって「母」のような存在になれているだろうか。困ったときは「母なる教会」に行けば、「大丈夫だよ」と抱きしめてくれるような温かい存在であるだろうか。改めて考えさせられるテーマである。

２．母なる教会

最初に集うようになった教会を「母教会」と呼ぶが「父教会」とは表現しない。教会を母に喩えるようになったのは、一つは、ギリシャ語で教会を意味する「エクレシア」という言葉が女性名詞だからかもしれない。さらには、古代教父や宗教改革者たちが、教会を母に喩える「母なる教会」というイメージを教えたからでもあるだろう。古代教父のキプリアヌスは「教会を母として持たないものは、神を父として持つ事はできない。」と記した。

またカルヴァンも綱要の中で、「すなわちこの母の胎にみごもられ、この母から生まれ、その懐に育てられ、その保護と支配の下に守られて、遂に死すべき体を脱ぎ捨てて天使のようになることに至るのでなければ、命に入る道はないことを学ぶのである」（綱要Ⅳ１～４）として「神を父とする者は教会を母とする」と教えた。

母親が子どもたちを養い守るように、神さまの子どもたちは教会においてその命を育まれていくことを学びたい。

３．新しく生まれなければ

ヨハネ福音書３章にニコデモとイエスさまとの対話が記されている。その中でイエスさまは「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」（3：3）と教えた。ニコデモはその意味が分からず「母の胎から一度生まれてきた者が、どうやってまた生まれることができるのか」と問うた。

ここでイエスさまが教えるのは、神の国に入る者たちは２度生まれるということである。１度目は母の胎から、その家の子どもとして生まれる。わたしの場合は小橋口家の子どもとして生まれたのが１度目の誕生である。その私が神の国に入るには新たに「神の子どもとして」生まれなければならないことを教えている。これが２度目の誕生である（新生・再生)。

神さまの子どもとして生まれた者は、その人が何歳であっても神のみ前には幼子として生まれ、成長を始めるのである。神に「父よ」と祈ることを学び、「母なる教会」に養われて生きる道こそいのちの道である。　　（小橋口貴人）

《参照聖句》　イザヤ４０：１１、６６：１３、ヨハネ３：３
《教理問答》　ウェストミンスター小教理問答問２９～３１

５月２日　　詩編１３１編１～３節　　【説教展開例】

母なる教会による命の養い

◇…… **単元のねらい** ……◇

神さまがわたしたちを養ってくださる「場」としての教会について聖書から学びたい。教会は「キリストの体」（エフェソ1：23、Ⅰコリ12：27)、「キリストの花嫁」（エフェソ5：25）などと表現されるが､「母なる教会」という教会のイメージが古代教父たちの時代から教えてられてきた。神さまの子どもとして「母なる教会」の中で守られ、養われ、成長することの幸いを伝えたい。

「父なる神、母なる教会」

教会ってどんな場所？

今日は教会について一緒に学びましょう。みんなにとって教会ってどんな場所ですか？　中には、生まれた時から（お母さんのお腹にいる時から）通ってましたという人もいるでしょう。日曜日に行くところだと考えている人もいるでしょう。小さいときは楽しかったけど、最近は楽しくないと思っている人もいますか？

聖書は教会をどう教えているでしょうか。いくつかありますが、その一つは「教会はキリストの花嫁だ」と教えています。教会がイエスさまの花嫁だということは、教会はイエスさまの結婚相手だということですね。つまり、教会はそれほど大切なところだということを聖書は教えています。あってもなくてもいいというものではなくて、教会は神さまにとって、とても大切なものなのだということをまず覚えておいていただきたいと思います。神さまの結婚相手ですから。

大人の人たちの中に、「わたしは神さまは好きだけれど、教会は嫌いだ」という人がいます。もしかしたらみんなの中にもこう思っている人がいますか？　神さまのことを信じている多くのクリスチャンたちが教会は嫌いだからと言って通っていない。そういう人たちもたくさんいます。これは悲しいことです。

例えば、新しく知り合った人から「わたしは小橋口さんのことは好きですし、お知り合いになれてうれしいです。でも、あなたの奥さまはどうも好きになれません」と言われたら、私はとてもショックです。たぶん、その人とはいいお友達にはなれないと思います。

「神さまは好きだけれども、教会は嫌いです」と言うのは、そういうことになってしまいます。神さまはとても悲しまれると思います。

教会は「キリストの花嫁」だ。それくらい神さまにとって教会は大切なものです。だから私たちも、教会を大切にしましょうね。礼拝を大切にすること。また、みんなにもできる奉仕（お掃除、お祈り……）とかも一生懸命やりましょう。

母なる教会

じゃあ、神さまにとって教会が花嫁だとしたら、私たちにとっては教会はどういう存在になるでしょうか。神さまはわたしたちにとって「父なる神さま」ですね。その結婚相手が教会だとしたら……？

みなさんカルヴァンという人の名前を聞いたことありますか？小学生のみんなはまだ習ってないかもしれませんね。もう少し

大きくなったら学校で勉強すると思います。宗教改革という出来事で活躍したフランス人です。この改革派教会の流れを作った人でもあります。カルヴァンがこういうことを言いました。「神を父とする者は教会を母とする」

私たちは神さまの子どもですね。父なる神さまの子どもとって、教会は母親のような存在だということです。みなさん、教会がお母さんみたいだなと感じたことありますか？　お母さんたちは、みんなを生んでくれて、今まで育てて来てくれましたね。いつもみんなのことを心配しているし、何よりもみんなのことを愛しています。ご飯を作ってくれるし、病院に連れて行ってくれるし、時にはお勉強も教えてくれますか？

実は、教会は神さまの子どもたちにとってそのようなお母さんのような存在なんだということです。わたしたちは、教会で生まれて、教会に育まれて、教会に守られているということですね。今一緒に集まっているお友達は、みんな同じお母さん（教会）のもとに集まってきた兄弟姉妹として、神さまは喜んで育ててくださるんですね。

神さまの子どもたちを生み、育む教会

もしみんなが「今すぐ家を出て行きなさい。お母さんと一緒に暮らしていくことはもうできません」と言われたら、生きていけますか？　お母さんがいないときっといろいろ大変ですよね。（離婚などの理由でお母さんがいない子がいる場合は配慮が必要）　それと同じように、神さまの子どもとして生きていくときに、「母なる教会」と離れて生きていくことはとっても大変なことです。

イエスさまがニコデモという人にこのように言いました。「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」。（ヨハネ3：3）つまり、あなたはもう一度新しく生まれないと神さまの国に入れないんだよ、ということです。こう言われてニコデモさんは困っちゃったんですね。「どうやったらもう一度生まれることができるんだろうか。もう一度お母さんのお腹の中に入るんだろうか」と考えました。

でも、イエスさまは決して難しいことをおっしゃったわけではありません。「人は新たに生まれなければ」というのは、あなたも神さまの国に入りたいならば、神さまの子どもにならないとねと言ったわけです。小橋口家の子どもとして生まれたあなたも、神さまの子どもとして新しく生まれなければいけないよ。

そうやって、神さまの子どもとして生まれた者たちは、「父なる神さま！」と祈ることを覚えながら、「母なる教会」の中で守られて、成長していきます。神さまは教会の礼拝の中でみんなの心がちゃんと栄養を取って成長できるように「みことば」という命のパンをくださいます。お家でみんながご飯を食べて大きくなるように、教会ではいのちのパンをしっかり食べて成長していくというのが神さまの子どもたちの幸いです。

みんな嫌なことがあったり、大変なことがあったり、悲しいことがあったりしたときに、神さまに「父なる神さま！」と祈ってください。でも神さまの子どもとしてみなさんには「父」がいるだけでありませんよ。教会という「母」もいて、その「母なる教会」に守られて成長していくことを神さまは願っておられます。　（小橋口貴人）

《今週の暗唱聖句》

「わたしは魂を沈黙させます。
わたしの魂を、幼子のように
母の胸にいる幼子のようにします。」（詩編１３１編２節）

５月２日　　詩編１３１編１～３節　　【分級展開例Ａ】

教会はおかあさん

○聖書の話

この詩編はユダヤの王様ダビデの祈りの言葉です。ダビデと言えば……ゴリアテを倒した少年ダビデ！　そのダビデさんは、大人になりやがて神さまに油を注がれて王様になります。

そのダビデ王がこう祈るのです。

『わたしは魂を沈黙させます。
わたしの魂を、幼子のように
母の胸にいる幼子のようにします。』

○想像してみよう（クッションや会堂の長座布団などを使って、リラックスした状態で）

みんなもやってみよう。目を閉じて、心の中で赤ちゃんに戻ろう。魂を“ちんもく”させてみよう。できるかな？　みんなは、今小さな赤ちゃんで、お母さんのおひざの上で、お母さんの腕に抱かれています。甘いミルクをたくさんいただいて、お腹はいっぱいです。とても気持ちよく、とても満足しています。安心しています。

○まとめ

今日のダビデ王様の詩編は、『これが教会で礼拝するわたしたちの姿ですよ。』と教えてくれます。子どもも、大人も教会に来て、聖書のお話しを聞きます。その時、神さまの愛がよくわかる心が与えられて、大きな愛に包まれて、まるで赤ちゃんのように満足するのです。心が平安になり、ミルクをいっぱいいただいた赤ちゃんのように、満たされるのです。教会は、実に、お母さんみたいだと思いませんか？今日の大人のお礼拝の時、観察して確かめてみよう！

５月２日　　詩編１３１編１～３節　　【分級展開例Ｂ】

母なる教会による命の養い

①詩編131編をみんなで読んでみましょう。

とても短い詩編ですね。聖書の中でもとても短い章の一つだと思います。これは誰が書いた詩編でしょうか。

②そうですね。１節にあるように「ダビデ」です。みんなはダビデさんのことを知っていますか。あのダビデです。少年のころ羊飼いで、巨人のゴリアテを石ころ一つでやっつけたダビデ。その後、イスラエルの王様にまでなりました。でも失敗もいくつもしました。大事なのは失敗したあとです。ダビデは自分の罪を神さまに告白できる人だったということです。

③僕たちはどうでしょうか。失敗してもすぐにごめんなさいを言うことは難しいですね。できれば隠したい。そんな気持ちが誰にもあります。ダビデもきっとそうだったと思います。ところで、この詩編131編はダビデがいつの時代に書いたのでしょうか。少年の頃？バリバリ王様の仕事をしていた時？それとも王様を引退するようなおじいさんの頃でしょうか。

④ある人は、この詩編はダビデがおじいさんのころに書いたのではないかと想像しています。それは「わたしの目は高くを見ていません。大きすぎることを、わたしの及ばぬ驚くべききことを、追い求めません」（１節）とあるからです。大人になることは自分がどれくらいの大きさかわかること。自分は神さまの前にちっぽけな存在だということを知ることだからです。神さまが農夫のようにいらない枝を切り払ってよいブドウの実がなるようにされます（ヨハネ15章）。きっとダビデもいばる心を神さまから刈り込みをされたのでしょう。

⑤「わたしは魂を沈黙させます。わたしの魂を、幼子のように、母の胸にいる幼子のようにします」（２節）。ダビデは神さまを礼拝することで、心を刈り込まれていったのでしょう。それは僕たちなら教会の礼拝に出席して自分の罪や弱さが分かること。そして神さまの赦しをだんだんと深く知ることです。ここで「幼子」は乳離れした子どもという意味です。安心して母親のそばですごす小さな子どものようだとおじいさんのダビデは自分のことを考えているのでしょう。いくつになっても神さまの子どもとして生きることができるのは本当に幸せなことです。

５月２日　　詩編１３１編１～３節　　【分級展開例Ｃ】

母なる教会による命の養い

教会を「母」と呼ぶのはカトリック的な表現とみなされることがあります。けれども古代の教父から宗教改革者に至るまで教会を理解する時の伝統的な表現であり、詩編131編をはじめとする旧新約聖書の表現から採られたものです（参照：『神さまと共に歩む道－子どもと親のカテキズム解説』p. 143)。母のイメージを豊かに広げて理解を味わうことができれば良いでしょう。本カテキズムではキリストの働きとして母のイメージが用いられていることに注意しましょう。

母のイメージは当然父のイメージと組みになります。家族の中の父母のイメージや実際の役割分担は時代によって随分変化しています。また個々の家庭環境によって子どもたちの理解は様々です。教師たちの世代の常識で「父親は……であるべき」「母親は……であってはならない」といった言い方をすることは避けましょう。

質問例

・今日のカテキズムにはイエスさまを母親に例えていたけれど、母親ってどんなイメージ？
「やさしい」「世話してくれる」「お弁当を作ってくれる」「怒ると怖い」

・イエスさまが私たちを養ってくださるために何をくださっているでしょう。
私たちは、その養いによって、どんなふうに育てられているでしょう。

・どうして、私たちには教会が与えられていると思いますか？
毎週、礼拝に出るのはどうしてでしょう。
色々に受け取ることができる質問です。一つの正解があるわけではありません。
この質問をきっかけに、子どもたちが考え、教師が自分の体験を話してあげられると良いでしょう。

５月９日　　マタイによる福音書２８章１８節～２０節、子どもと親のカテキズム問４４ 【解説と黙想】

教会の使命

「キリストが教会の頭であり、自らその体の救い主である」（エフェソの信徒への手紙5：23）。イエス・キリストは天におられた神の子であられます。その方がこの世に来られました。教会はキリストの体であり、キリストは今も教会の頭であられます。教会はイエス・キリストによって招かれた羊の群れであり、神さまによって建てられているのです。ですから教会はキリスト抜きで成立することはなく、理解することも出来ません。教会はどういう所なのかを理解するためには、人間的な意味を考える以前に、神さまの意図を知ることが必要です。

教会は単なる建物ではありません。十字架がついた会堂があり、キリスト教会という名前が付けられているからと言って、教会であるとは必ずしも言えないのです。イエス・キリスト御自身が「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」（マタイによる福音書18：20）とおっしゃっているように、イエスさまを信じる人の集まる所が教会なのです。その集まりがどれほど小さく貧しくても、建物がなくても、イエスさまが共にいて下さって、教会になるのです。逆にいくら立派な会堂があり、多くの人が集まっていても教会でないことがあります。ですからそこに集う人間の、イエスさまに対する信仰が問題となるのです。私たちは本当にイエスさまの名によって集まっているのか、単にその名を口にしているに過ぎないということはないのか、ということが問われるのです。

神さまがイエス・キリストにおいてこの世に教会を建て上げる理由は三つあると「子どもと親のカテキズム」は教えています。一つ目は、イエスさまだけに救いがあると宣べ伝えること、二つ目は人を愛すること、三つ目はこの世を治めることです。いずれもイエス・キリストがこの世でなさったことです。イエス・キリストは御自身の働きを継続し、それを果たすという使命を教会にお与えになりました。

私たちは聖霊によってキリストと結び合わされ、神の家族として大きな恵みのうちに養い育てられています。その私たちは、その恵みに感謝しつつ、イエス・キリストに身を投げ出すようにして、上に挙げた三つの使命に生きるのです。もし教会が、この世的な交わりや自己満足を求める場になってしまうならば、混沌としたこの時代において、人々はどこに救いを見出すことが出来るでしょうか。

教会は救いの拠点です。私たちが救われ、教会に連なるものとされたのは、使命を与えられたということでもあります。それは厳しい戦いかもしれません。しかし教会は、既に勝利されたキリストに従い、神さまに喜ばれる歩みをしていくのです。

（常石召一）

《参照聖句》　ルカ１０：２５～３７、創世記１：２８
《教理問答》　ハイデルベルク信仰問答 問３２

５月９日　　マタイによる福音書２８章１８～２０節　　【説教展開例】

教会の使命

◇…… **単元のねらい** ……◇

私たちは、この世の他では得ることが出来ない安らぎを教会の中で感じることが出来ます。それは教会が神さまによって建てられ、救いのために用いられるからです。教会には使命が与えられているのです。その使命とは具体的にどのようなものなのでしょうか。

「教会って何するところ？」

おはようございます。よく集まって下さいました。日曜の朝は、もっと寝ていたい、友だちと遊んでいたい、あるいは友達みたいに塾に行かなくていいのかな、などと思うかもしれません。しかしこうして皆さんが集まって下さり本当に嬉しく思います。

皆さんは何故教会に来るのでしょうか。それを知るためにはまず、皆さんはなぜ生まれてきたのか、というところから考えた方が良いと思います。このふたつのことは、関係がないようでいて、実は深く繋がっているからです。

なぜ生まれて来たのかと言われても、気が付けば生まれていたのですね。「よし、生まれることにするか」と考えてこの世に誕生した人は誰もいませんね。自分で考える前に生まれて来ていたのです。では誰があなたを産もうと思ったのでしょうか。ご両親がそう願ったのかも知れません。しかしそれ以前に神さまがあなたを生まれさせよう、この世で生きることが出来るように命を与えようと考えられたのです。そして、あなたのご両親を用いてあなたを生まれさせようと思われたのです。

神さまがあなたに命を与えようと思われたのには訳があります。神さまは、みんなが互いに愛し合って欲しい、そしてみんなが天国に集まってその喜びを味わって欲しい、と願っておられます。天国とは三位一体の神さま、つまり父なる神さま、子なる神さまであられるイエスさま、そして聖霊なる神さまが愛し合っている所です。そういう愛し合う関係を、神さまと人との関係、人と人との関係にまで広げようとなさったのです。皆さんが天国を体験できるようにと御計画なさったのです。それが皆さん一人一人を神さまが造ろうとお決めになった理由です。ですから決して自分勝手に毎日を暮らすことが私たちの生きる目的はないのですね。偉くなってお金持ちになることや、みんなから褒められることや、夢を実現すること、そういうことが私たちの造られた目的なのではないのです。神さまを愛し、また互いに愛し合うことが神さまの私たちをお造りになった目的なのですね。

しかし初めの人間であるアダムさんは罪を犯しました。アダムさんは、神さまが「善悪の知識の木からは決して食べてはならない」とおっしゃったたった一つの戒めを破ることによって罪を犯したのです。エデンの園には食べ物が十分ありました。神さまが食べてはいけないと禁じられた木はたっ

た一本です。そこからわざわざ取って食べる必要は全くなかったのです。アダムさんが神さまのたった一つの戒めを破ったのは、神さまはこんな戒めを与えて自分を縛り付けようとするひどい方だと思ったからです。神さまなしで生きる方がもっと自由な良い生き方が出来ると思ったからです。

神さまはアダムさんに「なぜ私の戒めを破ったのか」と聞きました。その時、アダムさんはこう言い訳をしました。「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました」。アダムさんは妻であるエバさんのせいにしたのです。そしてエバさんを創って与えて下さった神さまのせいにしたのです。それを聞いてエバさんはどう思ったでしょうか。「アダムは私を守ってくれなかった。裏切られた」と思ったでしょう。そのがっかりした気持ちは一生忘れられないものだったのではないでしょうか。誰かのせいにするというのは、その人を愛することとは正反対の行ないです。このようにアダムさんは神さまをも、人をも愛せない者になってしまいました。

アダム夫婦は楽園であるエデンの園から追い出されることになってしまいました。神さまとの愛の関係、また人との愛の関係が壊れてしまい、愛することも、自分が愛されていると感じることも出来なくなったのです。これはとても深刻なことです。

私たちは皆、このアダム夫妻の子どもたちです。私たちもアダムさんと同じようについつい神さまのせいにし、人のせいにしてしまうのです。それはとても大きな罪です。一生かけても償えないようなことなのです。しかしそのような私たちのために父なる神さまはイエスさまを遣わして下さいました。イエスさまは私たち罪人の身代わりになって十字架に架かって下さり、復活によって天国への道を開いて下さったのです。そうして神さまと人を愛し、愛される関係をもう一度築くことが出来るようにして下さったのです。そのようにして人が造られた時の目的に生きることが出来るようにして下さったのです。

私たちが生きていく上で最も大切にしなければならないのは、まず何よりも救い主イエスさまを信じ受け入れることです。そしてイエスさまに救われた者として、イエスさまに感謝して生きることと、イエスさまによって人は救われるのだと証しすることです。さらにイエスさまの愛に促されるようにして神さまと人とを愛していくということです。そうすることが出来るようにイエスさまは私たちに力を与えて下さるのです。

もう一つ神さまが人をお造りになった目的があります。それは創世記１：28に記されていますように「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ」ということです。神さまはこの世界が、整えられるようにという目的のためにも人間をお造りになっていたのです。今、地球温暖化とか環境汚染ということが問題とされています。人間は世界を整えるどころか壊しているのです。しかし神さまはやがてこの世界をとても素晴らしいものに造り変えて下さいます。私たちはそのお手伝いをすることが出来るようにされているのです。

このように①イエスさまの救いを宣べ伝えること、②愛すること、③世を治めること、これら三つが私たちの生まれて来たそもそもの目的です。これをするようにと私

たちの救い主イエスさまはおっしゃっているのです。

先ほども言いましたが、私たちにとって最も大切なことはイエスさまを救い主として信じることです。イエスさまを信じるからこそ、上の三つの目的を果たしていくことが出来るのです。教会はイエスさまを信じる所です。教会の働きによってイエスさまを信じる人が起こされるのです。イエスさまはそのような所として教会を建てて下さっているのです。

教会というのは私たちが救われる場所であり、救われる人が起こされていく場所です。そのようにして人が本来の生き方をすることが出来るようになっていく場所です。更に世界が救われていく所です。そのようにイエスさまが働いて下さる所なのです。教会というのは他のどこよりも凄い所です。私たちにとって最も大切な所です。皆さんもそのような教会につながる者として歩んで欲しいと願っています。

（常石召一）

《今週の暗唱聖句》

だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。

（マタイによる福音書２８章１９～２０節）

５月９日　　マタイによる福音書２８章１８～２０節　　【分級展開例Ａ】

教会の使命

○工作「アース・プレートを作ろう」

〈用意するもの〉＊すべて人数分

・紙皿　　・青か水色のクレヨン、ペン　緑色、黄色の画用紙（B5サイズ程度）

・黒ペン、マジック　　・ひも、リボンなど　　（水のり、ハサミ、穴あけ器）

〈作り方〉

①紙皿の表面を青か水色で塗る。(「海」に見立てます。)

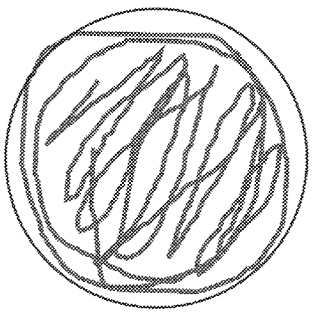
②緑色の画用紙を適当な形に何個か切りとり、①の上に貼る。(「大陸」に見立てます。)

③黄色の画用紙に、自分の足を型取りハサミで切り取る。

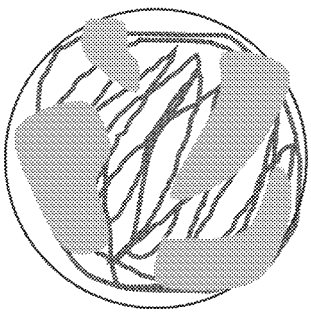
④③に今日の聖句を黒ペンで書き、②の好きな場所に貼りつける。

⑤紙皿の上方に１か所穴を空け、ひもかリボンを通して壁に掛けられるようにして、できあがり。

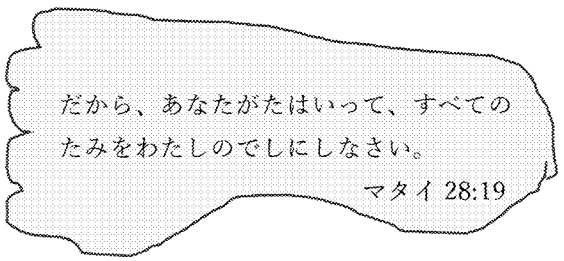
①



②



③



④　⑤

できあがり！

５月９日　　マタイによる福音書２８章１８～２０節　　【分級展開例Ｂ】

教会の使命

①「子どもと親のカテキズム」問44を読んでみましょう。問「教会の交わりの中で養われる私たちの使命は、何ですか」答「イエスさまは教会に、全世界に出て行って福音を宣べ伝えること、困っている人を助けること、大地を大切に治める使命を与えられました。私たちは神さまの子どもとして、いつでもどこでもこの使命を果たします」

②この問答で気付くことがありますか。教会に使命がある。教会がお仕事をするのです。どうも教会は教会堂の建物ではないようです。それなら教会は何のことでしょうか。車が変形してロボットになる「トランスフォーマー」がありますね。車が変身して敵から守ってくれたりする。でも教会堂は変身しません。もともと動くのが教会なのです。それってどういうことでしょうか。

③教会は「集められたもの」という意味です。つまり僕たち一人一人が教会なのです。洗礼を受けた人は頭をキリストとして大きな教会の一部になるのです。僕たちが超大型ロボの一部になってしまうイメージも間違っていないと思います。その合体ロボ「教会」の仕事のことを「使命」というのです。

④三つの使命があります。一つは「福音を伝えること」、二つ目は「困っている人を助けること」、三つめは「大地を大切に治めること」この三つが使命です。このお仕事を任されているのが教会です。

⑤教会に来て洗礼を受けた人のことがクリスチャンと言われることがあります。これは政治「で〇〇党」と言うように、「キリスト、キリスト」と言っているので「キリスト党」のようにあだ名をつけられたのが始まりでした。だから私たちイエス様を信じる人は誰もがクリスチャンであり、また「小さなキリスト」と言えるのです。とても誇らしく、そして自分にはもったいない名前ですね。そしてイエス様にはお仕事がありました。イエス様のお働きを預言者・祭司・王なのだと説明されます。だから私たちにも小さなキリストイエス様から頼まれた三つの働き、預言者・祭司・王（「福音を伝えること」、二つ目は「困っている人を助けること」、三つめは「大地を大切に治めること」）があるのです。

５月９日　　マタイによる福音書２８章１８～２０節　　【分級展開例Ｃ】

教会の使命

・今日の聖書の箇所には、イエスさまが私たちに一つの「使命」を与えてくださっています。そして、その使命には二つの働きがありますね。もう一度聖書を確かめてみましょう(マタイ福音書28：29，20)。

使命：「すべての民を弟子にする」

働き：「洗礼を授ける」、「命じておいたことを守るように教える」

・「使命」と言っても、無理やりさせられるのではありません。カテキズムの最初のページを振り返ってみましょう。

問１　私たちにとって一番大切なことは、神さまと共に歩むこと

問２　神さまと共に歩むとは、神様を知り、栄光をあらわし、喜び、仕えて歩むこと

問３　共に歩むために、イエスさまを信じ、救われ、神さまの子どもとされる

問４　神さまの子どもとしてだいじなことは、教会の生活を大切にすること

その結果

問44　イエスさまは教会に、使命を与えられました。

私たちが神様を喜ぶ時に、与えられた使命を大切にしていくことになるんですよ

・みんなは、学校の友達とかに、自分が教会に行っているって話してる？
キリスト教の話をしたりする？

・その時に、どんな気持ちがする？　嫌々話すかな？　ちょっとワクワクするかな？

・どんなふうに話すと、みんなに伝わるだろう？

５月１６日　ヨハネによる福音書２０章１９〜２３節、子どもと親のカテキズム問４５【解説と黙想】

主の日の祝福

安息日から主の日

問45から礼拝に関する問答が始まります。旧約聖書において安息日は、創造の七日目に主が安息された日として、人がその日一切の仕事をしてはならないと命じられた日です（出エジプト20：8〜11)。この安息日の戒めはその後も繰り返し述べられ(出エジプト31：15〜17、35：2〜3、レビ23：3)、出エジプトに導かれたイスラエルの民も荒野のマナの経験を通して、その日を守ることを経験させられてきました（出エジプト16：23〜30)。

新約聖書においては、安息日の次の日である「週の初めの日」(マタイ28：1)、つまり、イエスさまが十字架の死から復活されその姿を民に表された日に、人々はパンを裂いたり（使徒20：7)、献金が教会に献げられるようになりました（コリントI16：2)。また、この日は主イエスの復活を記念する「主の日」(黙示録1：10）とも呼ばれています。週の初めの主の日、これが、今日のキリスト教会が日曜日に礼拝を献げるようになった起源です。

復活のイエス

ヨハネによる福音書20章で復活のイエスさまは、週の初めの日に、マグダラのマリアや弟子たちにその姿を表されました。弟子たちはマリアから復活の主を告げられたにも関わらず、それを信じることができずに、自分たちの死の恐れと不安のあまり、家の戸に鍵をかけていました（20：19)。

しかし、復活の主はその家の真ん中に来られ、平和があるように、と繰り返しお語りになります。恐れや不安にとらわれ、平和の無い者に、復活の主はこの世とは全く別の仕方で、ご自身の平和を弟子たちにお与えになりました。イエスの死を悲しみ、さらに自分たちの死をも恐れる者に、イエスはご自身のいのちの平安、死に打ち勝った平安をお与えになられ、ただ恐れていた者に喜びを与え、罪の赦しを与えるために彼らを聖霊と共にお遣わしになります。

この弟子たちの姿からも、復活の主の内に、いのちや喜びの一切があることが分かります。旧約聖書の律法に、安息日に一切の仕事を止める、と規定されていることも、単純に何もせずに仕事を止めれば良いのではなく、むしろ、他の一切を止めて、神さまとのいのちのつながり、平和に努めることに主眼があると思われます。

神に喜ばれる者へ

問45の答の後半では、「毎週この日に集まることによって、今も復活のイエスさまが聖霊において私たちと共にいてくださることを確信させてくださいます。」と言われています。ここでも子どもたちが、日曜日にただ他のことを止めて礼拝に集まることに止まらず、何よりもこの日に復活のイエスさまを確信することが願われています。復活の主がその姿を表された主の日に、私たち一人一人にもこの主との出会いが与えられ、神さまに真に喜ばれる者にされたいと願います。　（宮﨑契一）

《参照聖句》　マタイによる福音書２８章１〜１０節
《教理問答》　子どもと親のカテキズム問６９、ウェストミンスター大教理問答問１１６、ハイデルベルク信仰問答問１０３

５月１６日　ヨハネによる福音書 20章19～23節　【説教展開例】

主の日の祝福

◇…… 単元のねらい ……◇

主イエスは、復活の主との出会いの体験を、主の日ごとに新たにして下さる。イエスに出会うことに私たちの力の全てがあることを学び、子どもたちとこの日の喜びを味わいたい。

「復活のイエスに出会う」

教会では、いつも春になるとイースターのお祝いをします。それは、復活のイエスさまをお祝いするためです。

でも、私たちがイエスさまの復活をお祝いするのは､年に一度だけではないのです。旧約聖書の時代には、日曜日の前の土曜日が安息日として神さまのための特別な一日とされました。それが、新約聖書では、復活のイエスさまが怖がる弟子たちのいる部屋に入ってこられ、その姿を表された週の初めの日、日曜日となりました。その日に教会は、神さまへの礼拝を献げるようになったのです。だから週の初めのこの日、毎日曜日に、私たちは復活のイエスさまを喜ぶために礼拝に来ているのですね。

イエスさまが復活された時、弟子たちは恐れと不安の真っただ中にありました。自分たちの先生であるイエスさまがユダヤ人たちの手によって死んでしまった。弟子であった自分たちも、そういう目に会うのではないか。死んでしまうことの怖さにも似たものがこの時の弟子たちにあったと思います。弟子たちは自分たちの家の戸に鍵をかけて、当時力を持っていたユダヤ人たちを、ただただ恐れるばかりでした。

けれども、そういう場所に復活のイエスさまが来てくださいました！　復活されたイエスさまは戸を開けて普通に入って来たのではありません。不思議なことに突然家の真ん中に来られて、弟子たちの真ん中に立たれました。そして、あなたがたに平和があるように、と言われ、ご自分の十字架の跡のある手と脇腹をお見せになって、ご自分が十字架の死から復活されたことを明らかにしてくださいました。

この時突然現れたイエスさまに、弟子たちは多分びっくりしたと思います。でもそれ以上に、この時ただ怖い思いばかりがあった弟子たちは、イエスさまの言葉を聞いて、その姿を見て、本当に安心するような平和の思いでいっぱいになったと思います。そして、喜びでいっぱいになったと思います。私たちの主が生きていて、今確かに共にいてくださっている！　復活のイエスさまに出会うことには、驚きを超えた大きな喜びがありますし、死ぬことの怖さも超えた大きな平安があるのです。

だから、復活のイエスさまの中には、私たちに必要な全てがあります。私たちは毎日、小さなことに怖がったり、不安な思いになることがあります。それは大人も子どもも変わりません。そんな時、自分のことをとても小さく感じたり、惨めに思うこともあります。そして、一番の大きな恐れは

死の恐れです。私たちの全ての不安や恐れも、結局はそこにつながるものと言えると思います。

でも、だからこそ、その死に打ち勝ったイエスさまによって、弟子たちはこんなにも喜んだし、安心する平安な思いになりました。そして、神さまがイエスさまをお送りになったように、弟子たちも聖霊の神さまと一緒に、イエスさまのために送り出されることになりました。それまではただ家に引きこもるばかりの弟子たちにとって、このことはどれほどの大きな出来事だったでしょう。それはイエスさまの中に、地上の死で終わらないいのちがあるからです。イエスさまと出会うことは、私たちの生活が180度変えられるほどの大きなことなのです。

みんなは何のためにこの礼拝に来ていますか？　いろんな理由があると思うけど、これに答えるのはけっこう難しいかもしれません。先生も高校生くらいまでは、何のために毎週日曜日に教会の礼拝に出ているのか、その意味はあまり分かりませんでした。でも、大学生になって、いろいろな経験をするようになる中で、初めてキリストが自分の罪を赦してくださったこと、自分のような者にもイエスさまが訪れてくださったことの喜びを知るようになりました。そこから、教会の牧師になりたいと思うようになり、思いがけず、牧師をするようになりました。復活のイエスさまとの出会いがあったからです。そこに、私たちにとっての全てがあります。教会の礼拝は、聖書の言葉を通して、私たち一人一人がこのようにイエスさまと出会うところです。

旧約聖書の律法と呼ばれる神さまの掟には、週に一度のこの日には自分たちの仕事を一切してはならない、ということが繰り返し言われています。この日は他の６日間とは違って特別な日とされました。みんなも、自分たちのやりたいことを我慢して日曜日に教会に来ているかもしれませんね。でも、旧約聖書で言われていることは、単に私たちがこの日に何もしなければ良い、仕事を休めば良い、というものではないと思います。むしろ､この日に何もしないで、私たちがイエスさまの喜びを知ること、イエスさまだけを知ることだけを願って礼拝に来ること、ただこのことに、この日私たちが自分たちの仕事を止めて礼拝に来ることの意味があるのです。

復活のイエスさまは、聖書の時代と変わらず、今も私たちのところに不思議な仕方で来てくださいます。そこに私たちにとっての全てがありますから、みんなも是非、日曜日に教会の礼拝に来てください。そこには、みんなの思いや予想を超えた神さまからの恵みがあります。最後に暗唱聖句のヨハネの福音書20章19節をお読みします。

その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。

（宮﨑契一）

《今週の暗唱聖句》

そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。

（ヨハネによる福音書２０章１９節）

５月１６日　ヨハネによる福音書２０章１９～２３節　【分級展開例Ａ】

主の日の祝福

○ワークシートにトライしよう！

(準備するもの)・ワークシートのコピー（人数分）　・のり（人数分）
・下の言葉を切り取ったもの（人数分）　・色鉛筆など

(やり方)

上から順番にお話を読みながら、言葉を貼っていく。その時のお弟子さんたちの気持ちを○の中に表情で書き込む。

ヨハネによる福音書 20 章 19～23 節

復活の主イエスにであう日曜日

おでしさんたちの
きもちを、かおに
あらわしてみよう

その日、すなわち週のはじめの日の夕方、
弟子たちはユダヤ人をおそれて
［　　］
そこへ、イエスがきてまん中に立ち、
「［　　］」といわれた。
そして、手とわき腹とをお見せになった。
弟子たちは、主を見てよろこんだ。イエスは言われた。
「［　　］
父がわたしをおつかわしになったように
［　　］」
そう言ってから、かれらに息をふきかけて言われた。
「［　　］
だれの罪でも、あなたがたがゆるせば、
その罪はゆるされる。だれの罪でも、あなたがたが
ゆるさなければ、ゆるされないままのこる。」

怖がる顔
描ける？

びっくりし
た顔だよ！

髪や帽子
も描こう。

力づよい
顔かな？

いえの戸にかぎをかけていた。	あなたがたに平和があるように	聖霊をうけなさい。
わたしもあなたがたをつかわす。	あなたがたに平和があるように	

５月１６日　ヨハネによる福音書２０章１９～２３節　　【分級展開例Ｂ】

主の日の祝福

①礼拝に集まるのはどうして日曜日なのでしょうか。
　学校が休みになるのが日曜日だから……お父さんやお母さんのお仕事が休みの日だから……でもそうじゃない人もいますね。そもそもどうして学校は日曜日が休みなのでしょうか。教会学校の先生と一緒に調べてみよう。

②お店で売っているカレンダーは２種類あること知っていますか。月曜日からはじまるものと、日曜日からはじまるものですね。教会はどっちかだけを使います。どっちを？どうしてそっちなの？

③旧約聖書の時代から礼拝をする日を安息日と呼んでいました。この日を「聖別」するのです。「聖別」って難しく聞こえるけど「神さま用」にするということです。旧約時代は一週間のいつを安息日にしていましたか。それはどうしてその日になったのでしょうか。

④そうですね。旧約時代は一週間の最後の日を安息日にしていました。それは神さまが世界のすべてを造られた後、休む模範を示してくださったからです。そして神さまは旧約時代の人たちに神さまに倣って安息日を休むように命じられました。どうしてでしょうか。

⑤そう、僕たちは忘れっぽいからです。安息日になると世界中が礼拝のために黄金に輝くわけではない！　前の日とほとんど一緒。でも、この日みんなで集まって礼拝をすることで、神さまが僕たちの造り主、そしてエジプトを脱出させてくださった救いの恵みを思い出すとても大事な一日なんです。

⑥それならどうして僕たちは旧約聖書の時代と違って、日曜日に礼拝をするのでしょうか。そう、今日のお話に合ったようにその日に復活のイエスさまがお弟子さんたちに出会ってくださったからです。僕たちの一週間はイエスさまの復活を覚えて日曜日から始まるのです。そして僕たちはもう一度、この世界を完成させてくださるイエスさまを待ちながら毎週日曜日に集まって礼拝を守ります。完成の日、「神の安息にあずかる約束」（ヘブライ4：1）をしっかり覚え希望をもって歩みましょう。

５月１６日　ヨハネによる福音書２０章１９～２３節　【分級展開例Ｃ】

主の日の祝福

・今日は日曜日ですね。私たちはみんな日曜日に教会に来ますね。改めて、どうして私たちは日曜日に教会に来るのでしょう？

神さまを信じて救われると言いますけれど、「救われる」って一体どんなことでしょう？
以前、「子どもと親のカテキズム」の問36を読みましたけど覚えていますか？
そこでは、私たちの救いについて、「無罪と宣言し……受け入れてくださいます」と書かれていましたよね。

ちょっと考えてみましょう。
私たちが何か悪いことをして、相手を怒らせたとします。どうしたら良いでしょう？
素直に心から謝ることが大切ですよね。そうしたら許してもらえるでしょう。
でも、許してもらった後、前と全然変わらなかったらどうでしょう？
だめですよね。反省したら、心を入れ替えないといけません。

けれども、私もみんなも、そんなに簡単に、心を入れ替えることはできないですよね。
そこで神さまは素晴らしいことを考えてくださいました。
今日のカテキズムに書いてありました。
聖霊なる神さまが、私たちの心をきよくしてくださるんです。
私たちは、自分をきよくすることができないですけれど、神さまだったらできますよね。

では、きよくされた私たちはどうなるでしょう？
これもさっきのカテキズムに書いてありましたよね？
そうです。イエスさまの姿に似せられていくんです。
では、イエスさまに似せられるって、どういう風になるんでしょう？
（自由な発言を促す）
優しい、親切、他の人を助ける、奇跡を起こす、十字架につく。など。

５月２３日　使徒言行録２章１～１３節　　**【解説と黙想】**

聖霊降臨

使徒達は、命令に従い、熱心に祈りつつ、約束の成就を待っていた（1：4，8）。

［１節］「五旬祭」はギリシャ語で「ペンテコステ」。「50日」目の祭という意味。イスラエルの男子が全国からエルサレム神殿に巡礼しなければならない３大祭（過越祭、五旬祭、仮庵祭）の一つ（出34：22）。その日は、週の第一日であった。前日の土曜日も安息日のため、皆集まっていたと思われるが、彼らは再び集まった。週の初めの日は、主の復活を記念する日で日曜日である。「一同」とは、12使徒、婦人達、母マリア、主の兄弟達、120人程の信者達（1：14，15）全員と考えられている。

［２節］「家中」とあるが、**「朝の九時」**（2：15）は、定められた祈りの時刻で、**「物音に大勢の人が集まって来た」**（6）ことから、神殿のどこかであると考えられている。**「激しい風が吹いて来るような音」**の**「風」**は聖霊を象徴する（ヨハネ3：8）。**「音」**は耳に聞こえたしるし。**「天から」**は天からの聖霊が作用しつつあるということ。

［３節］「炎のような舌」「炎＝火」は神が現れる印。聖霊とも関係する（マタイ3：11，ルカ3：16）。**「舌」**は言語や言葉を意味する。**「一人一人の上にとどまった」**とは、主イエスの弟子達全員が体験したということ。聖霊は超自然的な力と共に、目に見え、耳で聞こえ、人間の全存在を揺るがす仕方で、天から降られた。

［４節］「一同」は全員。全員が聖霊に満たされたて、色々な他国の言葉で語り出した。これは、異言ではなく外国語。**「聖霊に満たされる」**とは、神さまの霊感を受け促されて非常に大事な発言をする時の表現。聖霊は、弟子達全員にもれなく、様々な外国の言葉で語らせたのである。他に類が無い出来事。

［５～８節］各地に散らされていたユダヤ人が、**「故郷の言葉」**で聖霊による証言を聞いた。当時、ユダヤ人は外国に5，6倍も住んでおり、五旬祭のために帰って来ていた。

「大勢の人」なので、多くの証人を得、聖霊降臨が確かな事実である事が立証される。

［９～13節］「パルティア、メディア、エラム」はペルシャ帝国の方。**「カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア」**は小アジア地方で、これから使徒達が伝道して回る所。**「エジプト、キレネに接するリビア地方」**は地中海を隔てて南。**「ローマ」**は使徒言行録の終着駅。これらの地域は、当時の全世界を指し、世界中のユダヤ人の代表が福音を聞いたことを意味する。また、福音の宣教が、最初から全世界を目標にしていることを示唆する。

聖霊降臨のこれらの出来事によって、力強く「イエスが主である」ことが証言され、新しい神の民の群れ、教会が誕生したのである。　　（袴田清子）

《参照聖句》　使徒１章４，５，８節、ルカ２４章４９節、ヨハネ１４章１６，１７，２６節、２０章２２節
《教理問答》　子どもと親のカテキズム問３４，３５　ウェストミンスター小教理問答問２９，３０

５月２３日　使徒言行録２章１～１３節 **【説教展開例】**

聖霊降臨

◇…… **単元のねらい** ……◇

聖霊により教会が始まった。教会を建てて民を養われる神への感謝に招く。

「天から降った聖霊」

今日は、聖霊が降られたことをお祝いするのが、ペンテコステです。

イエスさまは、復活されてから、40日にわたり使徒達に現れられました。その間、イエスさまが生きておられることが分かるようにされました。そして、天に昇られるまでの間、弟子達に神の国について教えてくださいました。その時、このようにお命じになったのです。「エルサレムを離れないで、以前から話していた、聖霊を待ちなさい。あなたがたは間もなく、聖霊によって洗礼を授けられるからです。」イエスさまは、十字架に掛かられる前から、聖霊が与えられることをお話しになっていました。

弟子達には、そのことがまだよく分かりませんでした。それでも、イエスさまは天に昇って行かれる前に、弟子達にこのように言われました。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレムばかりでなく、世界の果てまで、わたしの証人となります。」こう語っておられる間に、イエスさまは天に上げられ、雲に覆われ見えなくなってしまわれました。

イエスさまはもうそこにはおられません。でも、イエスさまのお約束を信じて、弟子達と婦人の人達､主イエスの母マリア、主イエスの兄弟達は、言われたように、エルサレムを離れずに、皆心を合わせて熱心に祈っていました。

イエスさまを信じる人達は、みんな一緒に集まるようにしていました。もう既に、120人程の人達がイエスさまを信じていました。

そして、間もなく「五旬祭」というお祭りの日が来ました。「五旬祭」はギリシャ語でペンテコステと言います。このお祭りは、イエスさまが十字架に掛けられた過越祭以来、多くの人で賑わう日でした。

イエスさまを信じた人達は、五旬祭の前の日も集まって礼拝していました｡そして、五旬祭の日も礼拝するために再び集まっていました。そして、丁度朝の祈りの時間である朝の九時頃です。突然、激しい風が吹いて来るような大きな音が、天から聞こえました。そして弟子達が座っていた辺り中に響きました。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、イエスさまを信じる集まった人達､全員の上にとどまったのです。すると、皆聖霊に満たされて、「聖霊」が語らせるままに、他の国の言葉で話し始めたのです。

丁度その日、エルサレムの神殿で礼拝するために､外国に住んでいたユダヤ人達が、世界中から集まっていました。大きな物音

がしたので、皆驚いて様子を見に来ました。

すると、だれもかれも、自分の生まれ故郷の言葉が話されているのを聞き、あっけにとられてしましました。外国語を話せるはずはない人達が、外国語で話しているのです。外国で生まれのユダヤ人には、自分が普段使っている言葉なので、外国語でも分かりました。

しかし、分からない人達は、「あの人達は、ぶどう酒に酔っているのだ」といって馬鹿にしました。

不思議な現象だったので人々は皆、驚いて「いったい、これはどういうことなのか」ととまどいました。

「神さまの偉大な業」が世界中の言葉で語られたのでした。神さまの偉大な救いの御業は、世界中の言葉で語られるべき内容なのですね。

聖霊なる神さまが天から降られたことで、イエスさまを信じた人達は、皆神さまのお働きに加わらせられたのです。そして、聖霊が降られたことに伴う、驚くべきしるしと、御言葉に基づくペトロの力強い説教によって、その日に3000人もの人がイエスさまを信じました。イエスさまが、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける」と言われた約束はその通りに実現しました。

天から聖霊が降られた最初の日は特別な日でした。聖霊が降られたので、弟子達の証言が影響力を持ち、人々に伝わるようになりました。そして、聖霊が降られたので、信じる人々が加えられ、聖霊に伴う奇跡によって、教会の固い基盤が造られていったのです。

また、聖霊は最初から、あらゆる外国の言葉で話させました。これは、イエスさまによる救いという福音が、全世界に伝えられるべき内容だということです。

聖霊が降ったことで、教会が生まれました。そして、この教会は今まで続いています。

その後、聖霊はイエスさまを信じる弟子達を用いて、聖書を完成されました。この聖書によって、私達はイエスさまのことを正しく知ることができるようにされました。そして、イエスさまを信じている人達の集まりが教会です。教会には、聖書を正しく教えてもらえるように、聖霊の導きによって、教会の先生や長老が与えられました。イエスさまを信じていると、みんなの前で言っている人は、既に聖霊が与えられています。そして聖霊は、今も私達の心に住んで下さいます。イエスさまは、私達を孤児にはなさらないのです。

聖霊が降って下さったことを、神さまに感謝しましょう。 （袴田清子）

《今週の暗唱聖句》

あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。
（使徒言行録１章８節）

５月２３日　使徒言行録２章１～１３節　**【分級展開例Ａ】**

天から降った聖霊

○工作：「炎の舌」ヘッドバンドを作ろう

〈用意する物〉

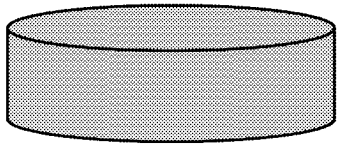
・B4または A3の画用紙（赤色）を10センチ幅の帯状に切ったもの数枚
……ヘッドバンド用

・オレンジ、黄色の画用紙、人数分……炎のかざり用

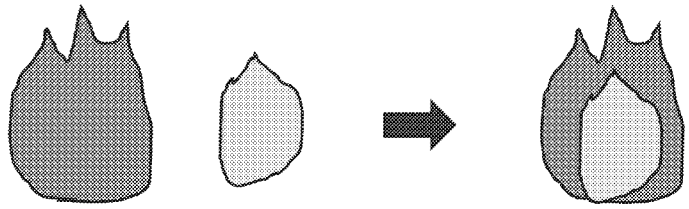
・ホチキス　　・のり

〈作り方〉

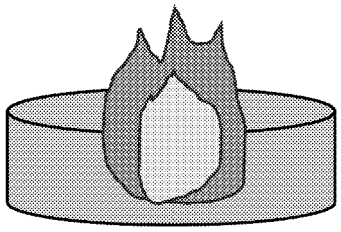
①帯状の画用紙（赤）を輪にし、それぞれの頭のサイズに合わせてホチキスで留める。



②オレンジと黄色の画用紙を「炎」に見立てて切り、貼り合わせる。



③①のバンドにホチキスで②を留める。



できあがり！

☆みんなで暗唱しましょう。
「あなたがたの上に聖霊が下ると、
あなたがたは力を受ける。（使徒1：8a）」
♪讃美しましょう
『こどもさんびか』
93番「おことばしんじ」

５月２３日　使徒言行録２章１～１３節　【分級展開例 B】

聖霊降臨

①五旬祭の日にどんなことがおこりましたか。五旬祭の日が「来た」（１節）、天からの音が「響いた」（２節）とありますが、聖書のもとの言葉では「満ちる」という言葉です。一同は聖霊に「満たされた」のです。これはイエスさまのお約束がそのとおりに実現した（「満たされた」）ことなのです。

②聖霊の神さまがやってこられたことを示すしるしは何でしょうか。そうですね。「風」「音」「炎のような舌」です。こうしたしるしが「突然」おきました。神さまからの圧倒的な力がお弟子さんたちを包んだことが分かります。

③この時、集まっていた人たちが一番驚いたのはなんだったと思いますか。きっと自分たちの故郷の言葉が話されていることにびっくりしたのだと思います。はるばるやってきた旅行先なのにあり得ないと思ったでしょうね。「言葉」と「舌」は聖書の元の言葉では同じです。

④この奇跡に関係して僕たちは何かを思い出しませんか。聖書のずっと初めの方。そうです。「バベルの塔」のお話です。昔、神さまのようになろうとして人間は高い塔を建てようとしました。それをお嫌いになった神さまは、集まっていた人たちの言葉を混乱させて通じなくされました。この奇跡は「バベルの塔」の反対の出来事のようではないでしょうか。弟子たちに与えられた舌（言葉）は世界中からお祭りに集まった人たちを「一つ」にして神さまを礼拝することへと導いたのです。

⑤僕たちの教会には日本ではない国から来ているお友達がいるでしょうか。照れくさかったり、勇気がなかったりして言葉はうまく通じない時もあります。でもやっぱり仲良くなれますね。それは聖霊の神さまによって同じ神さまを信じることができるようにされているからです。聖霊の神さまは私たちを神さまを信じる信仰によって一つにしてくださいます。

５月２３日　使徒言行録２章１～１３節　　【分級展開例 C】

聖霊降臨

今日はペンテコステですね。「聖霊降臨日」とも言います。
三位一体の神さまの「三位」って覚えてるでしょ？
そうです「父なる神さま」「御子イエス・キリスト」そして「聖霊なる神さま」です。

改めて、聖霊なる神さまについて聖書にどう書いてあるか調べてみましょう。
聖霊なる神さまについて書かれている主な聖書箇所
　マタイ28：19、２コリント13：13　父、子とならぶ
　使徒５：３～４　聖霊を欺く＝神を欺く。
　エフェソ４：30　聖霊の感情、人格を持つ（上の箇所も参照）
　マタイ３：16　御子に降る
　ヨハネ14：16，17　父なる神がつかわす
　ヨハネ14：26　御子の名によって、御子の言葉を思い起こさせる
　ヨハネ16：13，14　真理を悟らせる、栄光を与える
　１コリント12：３　キリストを告白させる
　エフェソ１：13，14　救いを保証する
　イザヤ59：21　神から与えられ、離れない

カテキズムや信仰告白なども参考になります
　ウェストミンスター小教理問答　問29～31
　ハイデルベルク信仰問答　問53、65
　日本キリスト改革派教会創立40周年記念宣言　二、聖霊について
　子どもと親のカテキズム　問34、35、37、38

５月３０日　使徒言行録２０章7～１２節、子どもと親のカテキズム問４６【解説と黙想】

礼拝式の祝福

「週の初めの日」に、仲間が共に集うトロアスで、盛大なキリスト教の集会が開かれた。ある説教者はこの交わりを「光の教会」と呼ぶ。７節～12節の短い記事は、初代教会の日曜日の集会の様子が描かれた貴重な報告である。「週の初めの日」という言葉づかいは福音書でも用いられる安息日明けの主の日を指す表現で、主イエスが復活なさった日を指す。直訳すると「ある安息日」と読むことができる。カルヴァンはその可能性をも示唆している。だが、大抵はこれを日曜日と解釈して、これを最古の日曜礼拝の証言とする。

この集会が「礼拝である」と言えるのは、「パンを裂くための集会」と言われているため。これも「週の初めの日」という表現と同じく、教会の常套句で、「パンを裂く」という表現は聖餐式を表わす。初めの頃の聖餐式は愛餐会であった。共に一つの食卓を囲んでキリストの体に与った。そして愛餐には御言葉が伴い、集った兄弟姉妹にパウロが話をした。もちろん世間話ではなく、ここでも言葉を尽くして励ましを語ったものと思われる。ここには様式化した礼拝はないが、説教と礼典が純正に含まれている紛れもない礼拝である。

礼拝は一般の人の家の屋上間で行われるのが常だった。集会は大抵夜にもたれたようである。屋上にはともし火がたくさん付けられ、建物は宵闇を照らす光の塊のように見えただろう。エウティコが窓に腰掛ける程だったのだから、屋上の部屋は人で一杯だったに違いない、とカルヴァンは指摘している。宣教の旅を共にしてきた仲間たちと、別の道を辿って落ち合った兄弟姉妹たち、そして地元トロアスの兄弟姉妹たちがパウロを囲んで熱心に御言葉を聞いている。パウロは翌日には町を出るつもりだったので、その晩の内に話しておきたいことは沢山あったに違いない。けれども、夜中まで話が続き、とうとう徹夜で話すことになってしまったのは、パウロだけでなく会衆の方も聞くのに熱心だったせいだろう。「たくさんの灯し火」は単に灯りを指すのではない。それは御言葉に励まされた会衆の燃え上がる命の光を表す。

屋上間を明るく照らし出していた「ともし火」は「松明」と同じ語。そして一晩中、夜が明けるまでパウロが語り続けている間中、火は燃え続けてトロアスの闇を照らしていた。

そこで、この日を決定的に印象付ける事件が起こる。エウティコの転落死という悲劇である。しかし、ここではエウティコの死の痛ましさにルカはとらわれていない。むしろパウロの極めて冷静な行動を淡々と書き記す。パウロが下に降りていき、彼の上にかがみ込み、抱きかかえて、「騒ぐな、まだ生きている」と言った。それでまた、戻って、何事も無かったかのように話し続ける。読み方によれば、エウティコは、本当は死んでいなかったのだ、とも受け取られそうだが、意図されていることはそうではないだろう。死んでいたものが生き返っ

たのだ。

旧約聖書にあるエリヤの奇跡がまず想い起される。列王記上17章で、神の人エリヤはサレプタの寡婦とその子を貧困の中から救った。けれども、彼女の一人息子が病気で死んでしまうと、エリヤは死んだ子を屋上間に移して神に祈り、彼は生き返る。エリヤが死んだ子を生き返らせた奇跡は、預言者を通して神の言葉の真実を証する記念すべき出来事である。それは、「階上の部屋」を舞台にしていた。このエリヤによる奇跡は、後に弟子であるエリシャによっても繰り返され、新約に至って主イエス・キリストの業に結びつく。ヨハネ福音書ではラザロが墓から甦り、主イエスは周囲で嘆き騒ぐ人々に対して、死んだ者が「ただ眠っているだけだ」と言われた。

死んだ者を生き返らされる、眠った者を目覚めさせられる主の御業は、弟子のペトロによって再び繰り返される。使徒言行録9章で伝えられているように、ペトロは階上の部屋に横たわるタビタを死の深い眠りから目覚めさせ、起き上がらせた。

いずれも証言するところは一つである。神の言葉が人を死から命へと生き返らせる。主なる神が与えてくださった命の言葉はイエス・キリストである。主イエス・キリストに復活の命がある。そして、キリストの福音が語られ、聞かれるところでは、罪に死んだ人が神の命に生き返り、その命は永遠に光と輝く。聖書の中で、神の人たちが、祈りによって、言葉によって行って見せた復活の奇跡は、いずれも、御言葉による命への救いのしるしである。

トロアスで姿を見せた、光の教会にもそのしるしが与えられた。パウロは紛れもなく神の言葉を与えられた神の人である。彼が熱情によって語るところには命が満ちていて、深い眠りに落ちて、死んでしまった者も、また命に還ってくる。パウロは何事も無かったかのように、御言葉を語り続け、教会ではパンが裂かれ続けた。結局、夜が明けるまで集会は続けられたが、キリストの教会では世の終わりまでこれを続けるよう定められている。

パウロは「騒ぐな」と言った。エフェソで一騒動終わった後で、トロアスでもエウティコ青年の事故死から「騒ぎ」が起きかけた。熱狂はいらない。けれども、御言葉を学び続ける、燃えるような情熱が教会にある。愛する兄弟姉妹の死に際して泣き喚く騒ぎは不要である。十字架の痛みはパン裂きにおいて記念されるが、復活の希望が教会を生かしている。週の初めの日ごとに集う私たちには、いつも変わらない御言葉による励ましと慰めがあり、人の死という事態にも落ち着いて向き合っていく道が備えられている。

何をするために私たちは教会に集うのか？　それは、共にキリストの体に与り、御言葉の励ましを受けるため。会堂は、いつでもかつての階上の部屋になり、死人が生き返る場所となる。つまり、罪に死んでいた命が、新しい命によみがえる。私たちの交わりの中に、主は生き返った兄弟姉妹を返してくれる。それは今でも起こっていることである。　（牧野信成）

《参照聖句》　列王記上１７章２１～２４節、続編シラ書４８章１、５節、使徒言行録９章３６節以下
《教理問答》　ウェストミンスター信仰告白２１章、ウェストミンスター小教理問答問８８

５月３０日　使徒言行録２０章７～１２節　　【説教展開例】

礼拝式の祝福

◇…… 単元のねらい ……◇

神はご自身の喜びを満たすため私たちを礼拝に招かれる。真心を込めて、その喜びに与りたい。

「礼拝によって生き返る命」

今日のカテキズムは問46です。「教会の礼拝で、私たちは何をするのですか」とあります。みんなはこうして日曜日ごとに礼拝に来るけれども、礼拝で何をするのかもうよく知っていると思うけれど、教会のことを知らない友だちに説明するとしたら、なんと言いますか？　答にはこうあります。「教会の礼拝で、私たちは神さまと交わり、神さまをあがめ、神さまを喜び、賛美します」。そして実際に何をするかと言えば、「聖書朗読と説教をきき、聖礼典をおいわいします。また、お祈りをし、賛美歌を歌い、信仰を告白し、献金をささげて教会の働きに仕えます」。これはいつもみんながしていることだから、もうわかっていると思うけれど、初めて礼拝のことを聞く人には、聖書とは何か、説教とは何か、と一つ一つ説明が必要ですね。それはこのカテキズム全体を読むと分かるようになっているけれど、今日は、イエスさまの礼拝が始まった頃の話を聖書から学んでおきましょう。

先ほど一緒に読んだ御言葉は、使徒言行録に書かれている、一つの出来事です。トロアスという港町をパウロが訪問した時のことで、それは礼拝の最中に起こりました。初めの頃の教会がどんなふうに礼拝をしていたか、私たちは十分知ることができないのですけれども、ここに書かれているのはその貴重な風景です。

まず、礼拝していた場所は、誰かの家の屋上でした。日本の家とは違って、屋上には人が集まれるような広い部屋があって、そこでみんなはパウロ先生がする聖書の話を静かに聞いていたんですね。夜中まで話をしていたとありますから、夜の礼拝です。屋上の部屋にはたくさんのランプが灯されていた、とありますから、ドローンで空から見たら、さぞかしきれいな風景だったろうと思います。真っ暗な暗闇の中に、礼拝をする人々の部屋が明るく浮かび上がっている―想像できますか？それは見た目の明るさばかりではないはずです。罪のために暗くなっている人の心の中を、イエスさまの御言葉が明るく照らし出している様子を表します。

その時に、一つの事件が起こりました。パウロ先生の話が長く続くので、窓に座っていたお兄さんがそこで眠ってしまって、窓の外へ落ちてしまった。３階の屋上からですから、下は石畳の路でしょうから、そんな高いところから落ちれば大けがではすみません。その人は死んでしまいました。礼拝の最中に起こった大事故です。

ところが、パウロ先生が下に降りて行って、そのお兄さんを抱き起すと、その人は

息を吹き返して、生き返りました。それはちょうど、イエスさまが死んだ人を生き返らせたのと同じような出来事でした。

この事件によって、トロアスの教会の人々は、パウロ先生がお話ししてくれた神さまの言葉がどんなに力強いかを知ることができました。イエスさまは生きておられて、今も礼拝を通して働いておられるのは間違いない、と知って、大きな慰めを受けたのでした。

私たちの教会では、たぶん事故が起こることはありませんが、エウティコ青年が生き返ったように、礼拝の最中に人が生き返ることは今でも起こっています。それは、私たちが喜んでささげる礼拝の中で、今もイエスさまが生きて働いておられるからです。聖書の朗読を聞き、説教に耳を傾ける中で、自分が罪のために死んでいたと気づいた人が、イエスさまの力によって心から救いを信じて、新しい命によみがえる、ということが起こります。それを表すのが洗礼式です。礼拝で行われる聖礼典の一つですね。イエスさまは今も生きておられて、聖霊を通して私たちに御言葉を与え、命を新しくしてくれます。

教会では昔からこうした礼拝をずっと続けて来ています。それは神さまが私たちをイエスさまの新しい命に生かしてくださる方法です。だから、聖書が読まれるのも、先生のお話を聞くのも、聖餐式や洗礼式を行うのも、お祈りをするのも、賛美歌を歌うのも、礼拝の中にあるすべてのものは、神さまが私たちのために用意してくれた、新しい命のお祝いです。そのことをいつも忘れないで礼拝をささげましょう。そうすると、いつか私たちの礼拝の中で、初めてイエスさまのことを聞いた友だちが、神さまの救いを信じるようになるかもしれない。また、私たちと同じように、新しい命に生まれる人が私たちの仲間に加えられるかもしれない。そのために、私たちはここで働く聖霊のお働きを信じて、礼拝に出席し続けますし、ここに友だちを連れて来たいと思います。難しいことのように思えますが、生きておられる神さまがそうしてくださることを信じて、祈り続けることが大切です。（牧野信成）

《今週の暗唱聖句》

今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。（ネヘミヤ記８章１０節）

５月３０日　使徒言行録２０章７～１２節　　**【分級展開例Ａ】**

イエスさまの命あふれる礼拝

○**用意するもの**：下の図を拡大コピーした用紙（人数分)、色鉛筆

クイズをしながら、シートに色や絵を描き加えましょう。

例）Q１「週の初めの日」は何曜日？

Q２「パンを裂くための集会」とは何のことかな？（パンを茶色でぬろう）

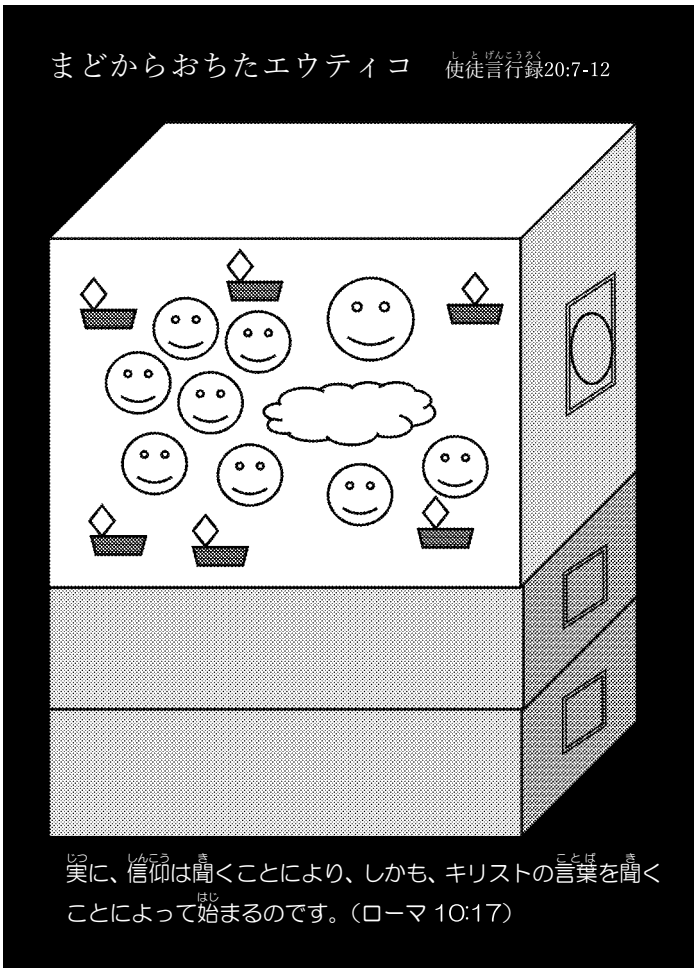
Q３「長いお話をしていたのは誰ですか？」(パウロに髪の毛を描こう)

Q４「お話はいつまで続いたのかな？」(ランプの火を黄色でぬろう)

Q５「お話の途中で何が起こった？(エウティコに眠った顔を描こう)

Q６「エウティコが死んだとき、パウロはどうしましたか？」

Q７「お話は夜明けまで続いたね。パウロと別れて帰る時、みんなはどんな気持ちだったと思いますか？」



☆３階のお部屋を、礼拝の喜びでいっぱいにしましょう。(自由に色を塗る)

☆みんなで暗唱聖句を読みましょう。

５月３０日　使徒言行録２０章７～１２節　　【分級展開例Ｂ】

礼拝式の祝福

①「子どもと親のカテキズム」問46を読んでみましょう。問「教会の礼拝で、私たちは何をするのですか」答「教会の礼拝で、私たちは神さまと交わり、神さまをあがめ、神さまを喜び、賛美します。聖書朗読と説教をきき、聖礼典をおいわいします。また、お祈りをし、賛美歌を歌い、信仰を告白し、献金をささげて教会の働きに仕えます」

②この問答では礼拝でしていることを数え上げていることがわかると思います。僕たちは毎週礼拝をささげますが、礼拝を大きく二つのくくりで分けることができます。一つは神さまから僕たちに向かうもの。それは聖書朗読や説教なのです。反対に僕たちから神さまへ向かうものがあります。それは賛美歌や献金などです。私たちが神さまに感謝をささげるのです。今日の聖書個所はパウロのころの礼拝の様子が伝えられています。何が僕たちの礼拝と一緒で、何が違っているかちょっと考えてみよう。

③違っていることは、礼拝の時間、夜中に礼拝をすることはありませんね。日曜日は休みの日ではなかったようです。だから仕事が終わってから礼拝に集まりました。それから説教の時間です、パウロさんは2時間、ひょっとすると持った長く説教をしました。パウロさんは次の日に出発することに決めていたので最後の説教でした。だから話すほうも聞く人たちも熱心に御言葉に聞いたのです

④僕たちの礼拝と同じとことは何でしょうか。説教があったこと、そしてパンを裂くという、聖餐式があったことです。そして礼拝中に眠ってしまう人がいたことも。でも眠る人を責めることはできません。一日の大変な仕事が終わったあとでへとへとに疲れていたでしょうから。でもその日は､窓に腰かけて寝てしまった青年エウティコがいました。彼は三階の窓から地面まで真っ逆さま。大事故が礼拝中に発生です！

⑤パウロさんはすぐに現場に駆け付けます。そして青年の上に体をかぶせ、そして抱き起します。すると青年は生き返ったのです。奇跡が起きました。実は私たちの礼拝も同じ事が起きているのです。びっくりですが、エウティコさんの事件と同じようなことが毎週の礼拝で起きているのです。礼拝に来る前は元気がなかった。とても疲れてどうしようもない気持ちだった。そんな人たちが礼拝に参加すると、神さまの恵みを受けてとても元気になるのです。死んだ魂が復活するのです。神さまの恵みがその人を元気にするのです。これが礼拝で起こっていることです。礼拝はすごいですね。

５月３０日　使徒言行録２０章１７～３８節　　【分級展開例Ｃ】

礼拝式の祝福

神さまを信じる私たちは、日曜日に教会に集まって、礼拝を献げます。礼拝は、神さまが私たちを養い育ててくださり、救いの完成に導いてくださる恵みです（子どもと親のカテキズム問43参照)。

子どもと親のカテキズムの問46を確かめてみましょう。最初に礼拝の本質が挙げられ、さらに礼拝の基本的な内容が書いてあります。

・礼拝の本質は、何と何と何ですか？
「神さまとの交わり」、「神さまをあがめること」、「神さまを喜び、賛美すること」

礼拝には二つの大きな流れの方向があります。それは「神さまから私たちへ」と「私たちから神さまへ」という二方向です。上に挙げた礼拝の本質で言えば、「神さまとの交わり」が「神さまから私たちへ」の方向、「神さまをあがめること」と「神さまを喜び、賛美すること」が「私たちから神さまへ」の方向と大きく分けることができるでしょう。

もう一つポイントは、その交わりに招かれ、神さまをあがめる主体が「私たち」であることです。神さまの前に立つ私は、一人ではなく多くの人たちと共に神さまの前に一緒に招かれ、一緒に神さまに応えます。この「私たちから私たちへ」の方向を意識することも大切です。

・教会の今日の週報を見て、それぞれの内容が、どの方向か考えてみましょう。
「聖書朗読と説教」「聖礼典」「お祈り」「賛美歌」「信仰告白」「献金」その他

・どんなふうにしたら、これらの本質をより豊かに表すことができると思いますか。
アイディアを考えてみましょう。

６月６日　使徒言行録２章４３～４７節、子どもと親のカテキズム問４７, ４８【解説と黙想】

恵みの方法

初代教会は、42節にあるように、「使徒の教え」、「相互の交わり」、「パンを裂くこと」、「祈ること」に熱心であった。ここに恵みの手段としての「御言葉」と「礼典」と「祈り」が全て記されている。「使徒の教え」は、「御言葉」と言い直しても良い。

[43節] 聖霊降臨、ペトロの説教、使徒達による多くの奇跡と徴に対する外部の人々の反応。「すべての人に恐れが生じた」のは、背後に天的な力が働いているということを、直感したためである。主の奇跡同様、使徒達による奇跡も徴であった。

[44, 45節] 教会内部の生活の描写。経済的共有生活。信者は主にあって一つとされているという深い思いを持った。聖霊による一体感が特別に活発だったので、私的財産という考えを捨て、全ての物を共有していた。「共有にし」は「相互の交わり」（コイノニア）と同じ語源の言葉。献金、施し、相互扶助という、執事的活動が普通に実践されていた。

[46～47a 節] 初代教会の礼拝生活の描写。「ひたすら」は42節の「熱心に」と同じ言葉。「毎日」は「神殿に参り」までを修飾。毎日、熱心に、一つ心で礼拝し、神に祈っていたということ。使徒達は神殿礼拝に参加し続け、公の祈祷の時間を守った。神殿は、大勢で集まるのに好都合だったので、毎日そこに集まって礼拝し、祈っていたのである。「パン裂き」は、主イエスが過越の食事の際に制定された、「聖餐式」（＝礼典）を守ったということ。しかし、神殿の境内で、大勢で行うのは難しい。過越の食事は、元来「家ごと」に行うものだったので、当然「家ごと」で食事をしたのだと思われる。「パン裂き」は、毎日ではなく週のはじめ、主の復活された日曜日に、共同の食事の前か後に行なわれた（使徒20：7）。「喜びと真心をもって一緒に食事をし」（46b）は共同の食事である愛餐会を指す。「真心」は心の純粋性という意味。主イエスに対する信仰は、喜びと真心と兄弟愛を作り出す。「神を賛美していた」（47a）は、主が昇天された後、弟子達がしていた生活が、続けてなされている様子。

[47b 節] 外部の人の反応。「民衆全体から好意を寄せられた」。称賛と尊敬と好意。

[47c 節]「救われる人々」は「仲間に加え」られて「一つ」にされる。救うこと、教会に加えること、一つにすることは全て主の特権。信じた者は、最初から仲間が与えられている。教会で、恵みの手段によって、信仰生活は守られ育まれ、導かれるのである。

（袴田清子）

《参照聖句》　ヨハネ１４章１５～２１節、ルカ２２章１４～２０節、マタイ１８章１９, ２０節、使徒４章３２～３７節、５章１２～１６節、

《教理問答》　ウェストミンスター小教理問答問８５, ８８、ウェストミンスター大教理問答問１５３, １５４、ハイデルベルク信仰問答問５４, １０３, １２３

６月６日　　使徒言行録２章４３～４７節　　【説教展開例】

恵みの方法

◇…… **単元のねらい** ……◇

神さまは恵みを与える手段を私たちに備えてくださった。大切にこの手段を用いよう。

「神さまが恵みを与えてくださる方法」

私達は、教会に集まって神さまを礼拝し、「御言葉」を聞き、「お祈り」をし、「洗礼式」があり、「聖餐式」を定期的に行いますね。これらは、イエスさまがみんなを教え、導き、育てるために備えられた「恵みの方法」なのです。

教会の主であるイエスさまが、聖書の「御言葉」を通して、みんなを教え、導き、養われます。「洗礼式」は、イエスさまを信じた人が、教会の交わりに入るための儀式です。イエスさまを救い主と告白する人と、イエスさまを信じている親に与えられた子どもにさずけられます。「聖餐式」は、イエスさまが、定められ、弟子達がイエスさまのことを記念して行うように言われた儀式です。そして、私達はイエスさまを通して、罪が赦されたので、父なる神さまに近づき、どんなことでも「お祈り」できます。

今述べた３つ、つまり聖書の「御言葉」と洗礼と聖餐の２つの「礼典」、そして「祈り」は神さまが恵みを与えてくださる方法です。これは教会の活動の中心にあります。

実は、聖霊が降られて教会が誕生して以来、ずっとこの「恵みの方法」は続けて行われています。使徒達の時とは、少し異なるかも知れませんが、内容は全く同じです。

ペンテコステの日に、天から聖霊が降られて以来、使徒達によって、多くの不思議な奇跡やしるしが行われていました。人々は、使徒達の背後に、神さまの力が働いていることが分かったので、恐れを感じるようになりました。

イエスさまを信じるようになった人達が、一日で３千人も増えるという、凄いことが聖霊の力によって起こりました。ペトロの説教や使徒達の教え、そして不思議な業やしるしを通して、悔い改めて、イエスさまを信じる人が大勢起こされたのです。信じた人達は、使徒の教えを守りました。使徒の教えとは、今で言う、聖書の「御言葉」と言い換えても良いでしょう。

そして、初代教会に加わった人達は、お互いの交わり、パンを裂くこと、つまり、聖餐式を守ること、そして、祈ることに熱心でした。

そして、信じた人達は、一つであり、仲間であるという思いが強く与えられました。そこで、全ての持ち物を共有にし、財産や持ち物を売って、それぞれの必要に応じて分け合ったと書かれています。このような貧しい兄弟姉妹を助ける働きは、今でも教会で続けられています。私達が献げる献金の一部は、そのために用います。

そして、何と言っても、イエスさまを信じた人達は、毎日、熱心に、ひたすら、心を一つにして神殿に集まり、「礼拝」し、「お

祈り」をしていたのです。信じた人の多くはユダヤ人ですので、神殿で決まった時間に「お祈り」しましたが、イエスさまを信じた人達は、一緒に神殿に詣で、「礼拝」し「お祈り」をしました。3千人もの人が集まれる場所は、エルサレムでは神殿の境内しかありません。

イエスさまを「礼拝」し、一緒に「祈る」こと、これは今も、教会で行っています。礼拝と、祈祷会です。大きくなったら、みんなも祈祷会で一緒に祈りましょうね。

ペンテコステの頃、イエスさまを信じた人達は、「毎日」神殿に詣でて、「礼拝」と「祈り」をしていました。さらに、イエスさまがよみがえられた日曜日には、イエスさまを記念するために、「パンを裂く」こと、つまり、「聖餐式」をおこなっていたのです。元々、イエスさまが「聖餐式」を定められたのは、過越の食事の中で、でした。過越の食事は、家で家族や親しい人と食べるものです。それに、神殿で3千人以上の人が一緒に食事をしたり、聖餐式を行ったり出来ませんので、家ごとに集まって食事をして、「聖餐式」を行ったのです。

イエスさまを信じた人達の心は、喜びで満たされていました。イエスさまを思う真心、つまり純粋な心を持っていました。食事は質素で簡単な食事だったかも知れませんが、感謝と喜びでいっぱいでした。信じた人達は、神さまが成してくださった、救いの大いなる御業を誉めたたえ、神さまを賛美しました。そのため、民衆から「好意」を持たれていたのです。

このようにして、主イエスさまは、聖霊を送り、救われる人達を毎日、仲間に加えていかれました。そして、信じる人達の心を一つにされました。

「使徒の教え」が、言わば聖書の「御言葉」を指します。そして、「パンを裂くこと」が「礼典」に当たります。そして、神殿に集まり「礼拝」し、「お祈り」を献げることが「祈り」だと言えます。

この「御言葉」と「礼典」と「祈り」は、今の教会にも存在します。そして、一人で聖書を読んで祈る「祈り」、家庭礼拝での「祈り」や、みんなで集まる祈祷会でする「祈り」は全部「祈り」ですね。

そして、教会の日曜学校や礼拝の「説教」、家で読む「聖書」、これらは「御言葉」です。

そして、今でも教会で行なわれる「洗礼式」と「聖餐式」が「礼典」です。これらはすべて、神さまが私たちに、天からの恵みを与えてくださる方法なのです。

最初の教会は、「毎日」礼拝し、熱心にお祈りしていましたね。持ち物も共有にするほど、一つだという感覚がありました。家でする食事の交わりは、親しく仲良くなることが出来ました。聖餐式ごとに、十字架に掛かって、自分達のために救いを用意してくださったイエスさまを思い、心は喜びで満たされ、神さまへの賛美と感謝があふれました。

恵みの方法は、教会での交わりを離れては存在しません。恵みの方法を大切に用いて、教会から離れずに一緒に歩んでいきましょう。（袴田清子）

《今週の暗唱聖句》

彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。

（使徒言行録２章４２節）

６月６日　　使徒言行録２章４３～４７節　　【分級展開例Ａ】

恵みの方法

「めぐみのしゅだん」をやってみましょう。

みことば

みんなで今日の暗唱聖句を覚えてみましょう。
家に帰ってから、あお父さんお母さんに聞かせてあげましょう。

礼典

礼典は神さまを信じる約束をした大人の人だけができることを説明しましょう。
洗礼式の写真などがあれば見せてあげましょう。
特にその場にいる子供の幼児洗礼の写真があると良いでしょう。
第一主日で聖餐式があれば、そのことを説明してあげましょう。

祈り

みんなでお祈りをしましょう。
・みんなで主の祈りを祈る。
・みんなの感謝や願いを聞いて、互いに祈り合う。

最後に感想を聞いてみても良いでしょう。

６月６日　　使徒言行録２章４３～４７節　　【分級展開例Ｂ】

恵みの方法

使徒言行録の中で、「信者の生活」の具体的な情景を探してみましょう。

・「多くの不思議な業としるし」	例）　使徒言行録３：１～10
・「すべての物を共有にし」	使徒言行録４：32～36
・「おのおのの必要に応じて……分け合った」	使徒言行録６：１～６
・「神殿に参り」	使徒言行録３：１、５：12、42
・「集まってパンを裂き」	使徒言行録20：７、11
・「一緒に食事をし」	使徒言行録16：15、34
・「神を賛美していた」	使徒言行録10：46

当時の教会の様子はどんな雰囲気だと思いますか？
今の私たちの教会とどこが一緒でどこが違うでしょう。

６月６日　　使徒言行録２章４３～４７節　　【分級展開例Ｃ】

恵みの方法

今日もみんなと一緒に礼拝ができました。先生はとても嬉しいです。みんなはどうですか？

先生が、みんなくらいの年の頃、あんまり礼拝が楽しみではなかった時があるんですよ。
みんなと一緒で、先生のお父さんお母さんが教会に行っていたから、小さな頃から一緒に車に乗って教会に来て、礼拝に出て、夕方まで教会にいました。それが嫌だった時がありました。
でも、連れられて来るんじゃなくて、自分で礼拝に来るようになったら、だんだん礼拝に来るのが楽しみになってきたんですよ。

先々週、神さまは礼拝で私たちに、イエスさまが共にいてくださることを確信させてくださることを読みました（子どもと親のカテキズム問45参照)。
礼拝の一番の楽しみは、イエスさまが共にいてくださることを確かめられるところなんですよ。

「教会が楽しい、礼拝がうれしい」って人は、どんなところが楽しかったり嬉しかったりするかな？

「あんまり楽しくない」って人は、教会がどんなだったら、楽しくなると思う？
(「ゲームをする」とか、「漫画を読む」とか言う答えも想定内です。偽悪的な応答は否定せず、話題に乗っかった方が楽しいです)

６月１３日　使徒言行録２０章１７～３８節、子どもと親のカテキズム問４９【解説と黙想】

みことばの恵み

【テキストの解説】

二度目のエフェソ教会滞在を終えた後、使徒パウロは長老たちに向けて語りかける。彼は、大きな苦難と危険のある中で、自分はキリストの僕として、謙遜をもって教会に仕えてきたことを証しする（18～21節）。集めた献金を届け、神の恵みの福音を力強く証しするため、エルサレムへ向かうことを伝える（22～24節）。それは彼の使徒としての働き全体の終結を意味し、エフェソの教会の長老たちと今生の別れとなることを覚悟する。使徒パウロは自らの死を覚悟すると共に、エフェソの教会の長老たち自身が､自分と自らの群れに気を配り、群れの内外の試練に、聖霊なる神さまに信頼し、立ち向かうよう勧める。32節、彼は教会の群れを自分のものとするのではなく、「そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。」と告別の辞を述べる。パウロは教会に生きる全ての人々に、キリスト者の歩みを造り上げ、恵みを受け継がせるのは、人の力ではなく、神の御言葉そのものであることを伝え、励ますのである。

【教理の解説】

復活の主イエス･キリストは今も生きて、私たちと共に生きておられる。しかし、復活の主イエスは、地上で直接キリスト者たちと交わることはない。主イエスはどのようにして恵みを与えられるだろうか。「子どもと親のカテキズム」問49はその問に対し、「聖書の朗読と説教です。これらを用いて、イエスさまは、聖霊によって私たちに語りかけてくださいます」と答える。今を生きるキリスト者は、その恵みを、礼拝の中心である聖書の朗読と説教を通して受ける。御言葉を受け入れさせるのは、私たちの内に住われる聖霊の働きである。聖書の御言葉に耳を傾け、信仰と愛をもって受け入れるとき､そこには大きな恵みがある。

【黙想】

使徒パウロは、共に教会を建て上げ、治めてきた役員たちを集めて告別の辞を送る。「別れの説教」の中で、彼は教会の兄弟姉妹を、主の御言葉に委ねる。主の御言葉こそが兄弟姉妹が苦難の中を生きる力を与えることを確信していたである。後に使徒パウロは牢獄からエフェソの教会の兄弟姉妹に宛てて「あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、救いをもたらす福音を聞き、そして信じて、約束された聖霊で証印を押されたのです（エフェソの信徒への手紙１章13節）」と励ます。

現代の大きな苦難の中にある私たちを造り上げ、支えるのも、礼拝における御言葉の老徳と説教である。互いに顔を合わせることの出来ない中にあっても、御言葉から受ける恵みが、私たちには与えられていることを、心に留めたい。　　（長谷部真）

《参照聖句》　ヤコブの手紙１章２１節、ルカ福音書２４章２７, ３２, ４５節、テサロニケの信徒への手紙一章５～８節

《教理問答》　ウェストミンスター小教理問答問８９、９０、ウェストミンスター大教理問答問１５５～１６０

６月１３日　使徒言行録２０章１７～３８節　　**【説教展開例】**

みことばの恵み

◇…… **単元のねらい** ……◇

聖書の御言葉を、イエスさまを指し示すものとして読み、語りかけて下さる主に聞き従って歩もう。

「たとえ会えなくとも」

コロナ禍の中で、お友達や先生たちと会うことが出来ない時間が続きましたね。皆さんは、学校がお休みで一人の時間、何をして過ごしますか？　もちろん、テレビや動画を見たり、本を読んだりすることは出来ますが、教会の礼拝はみんなと一緒にするものですね。日曜学校に参加できず、先生やお友達と会えないことで、寂しさを覚えることもあるかもしれません。１日も早く、教会で日曜学校と礼拝が出来る日が与えられますよう、一緒にお祈りしましょう。何よりも、皆さん一人一人に、神さまのお守りがありますように。

皆さんは、大好きな先生や、仲良しのお友達とお別れしたことはありますか？　いつも一緒にいた先生やお友達と別れるとき、離れることの悲しみや、会えなくなることで不安になったりします。今朝の聖書の御言葉で、パウロさんがエフェソの教会を離れるときの出来事が語られています。

パウロさんは３回目の伝道旅行で、再びエフェソの教会を訪れていました。パウロさんは初めてエフェソの教会を訪れたとき、三カ月間滞在していましたが（使徒言行録19章８節）、今度は三年間も滞在して、一緒に礼拝し、神さまの御言葉を教えて、一緒に生活してきました（20章31節）。パウロさんは集めた献金をエルサレムに届けて、諸教会のエフェソを離れるとき、教会の長老さんたちを集めて、最後の説教をします。パウロさんは、最初にエフェソの教会に来たときのこと、そしてたくさんの試練があったことを長老さんたちと思い出します（20章18～21）。

パウロさんは、エフェソの教会を旅立ちます。エフェソの教会で集めた献金を、エルサレム教会に届けるために、聖霊なる神さまがパウロさんに働きかけたのです。旅の途中、パウロさんの命を狙う人がいるかもしれない。ローマの兵隊に捕まるかもしれない。色々な噂がパウロさんの耳に入ってきていましたが、聖霊なる神さまがパウロさんを促しました（20章22節）。

一方、エフェソ教会の長老さんたちも、パウロさんが旅立つことに寂しさと悲しさを覚えていました。エフェソにいる三年間、パウロさんは教会の兄弟姉妹と、一生懸命に神さまと教会のために働きました。決して自分を偉ぶったり、ユダヤ人じゃない教会の人たちを見下したりせず、自分の持ち物を分け与えて、弱っている人を助けあっ

たりしていました。そんなパウロさんが、旅の途中でローマ兵に捕まってしまったらどうしよう。パウロさんがエルサレム教会の人たちに受け入れられなかったらどうしよう。残された私たちはどうしよう。パウロさんが教えてくれたように、教会のみんなと仲良く出来るだろうか。パウロさんが教えてくれたように、イエスさまを信じることが出来るだろうか。パウロさんと再び会うことが出来ないのだろうか。

しかし、パウロさんは教会の長老さんたちに、伝えるべき神さまの御計画は、必要なことはすべて教えて、責任は果たしました、と励まします。エフェソの教会が嫌いになったから、離れたわけではありません。本当であれば、もっと一緒に神さまを礼拝して、一緒にいたかったでしょう。しかしパウロさんは、一緒に教会を建てあげた長老たちを信頼して、残された教会の兄弟姉妹を委ねたのです。残された教会も、たくさんの問題や困難を抱えていました。長老さんたちが教会を治めるために、パウロさんは、「どうか、あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください。聖霊は、神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会の世話をさせるために、あなた方をこの群れの監督者に任命なさったのです（20章28節）」と、教会の長老たちが、自分と教会の兄弟姉妹とに気を配るよう、励まします。教会の役員さんたちの背後に、聖霊なる神さまの支えがあることを、パウロさんは教えます。長老さんたちはこの教えを受けとめて、一緒に神さまに祈り、最後の別れの挨拶をします。

今を生きる私たちにも、さまざまな問題や課題があります。塾や習い事、学校の勉強や部活で忙しくなったりする中で、教会から遠ざかることはないでしょうか。「忙しさ」に心がいっぱいになって、礼拝で聖書の御言葉に聞くことから離れていないでしょうか。それ以前に、教会に来ることが出来ない、友達と一緒に会うことが出来ない時間がずっと続いています。そんな中で、私たちの心は、神さまからの恵みの代わりに、不安や寂しさでいっぱいになっています。信仰の戦いは、自分の力で戦うことは出来ません。パウロさんは教会の人たちの不安をよく分かっていたので、次のように励ましました。「そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたを委ねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです（20章32節）」パウロさんは、神さまの御言葉に教会の人たちを委ねました。

パウロさんはエフェソの教会を離れた後、ローマ兵に投獄されます。牢獄の中で、パウロさんは手紙を通して、信仰の試みにある教会の人たちを励まします。「あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、救いをもたらす福音を聞き、そして信じて、約束された聖霊で証印を押されたのです（エフェソの信徒への手紙1章13節）」神さまはパウロさんを通して、言葉を教会の人たちに送りました。それは時代を超えて、今を生きる私たちにも送られています。

今を生きる私たちは、どうやって神さまから恵みを受けているでしょうか。それは教会の礼拝における聖書の朗読とお話しです。神さまは聖書の御言葉とお話しを通し

て、礼拝の中で私たちに恵みを与えてくださっています。神さまの御言葉から離れるとき、私たちの心は別のものでいっぱいになります。パウロさんは「キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ち溢れた豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように(エフェソの信徒への手紙 3 章18，19節)」と励まします。１日も早く、安心して教会で礼拝できる日が与えられますよう、一緒にお祈りしましょう。

しかし神さまは私たちが一人でいる時も、聖書の御言葉を通して語りかけておられます。神さまの語りかけは、お休みすることはありません。今日もまた、聖書を開いてみてください。イエスさまはそこにおられます。（長谷部真）

《今週の暗唱聖句》
だから、あらゆる汚れやあふれるほどの悪を素直に捨て去り、心に植え付けられた御言葉を受け入れなさい。この御言葉を受け入れなさい。この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。（ヤコブの手紙１章２１節）

６月１３日　使徒言行録２０章１７～３８節　　【分級展開例Ａ】

みことばの恵み

大事な人に手紙を書こう

教会の友達、おじいちゃんおばあちゃん、お母さんやお父さん（翌週20日は父の日です！）に感謝の手紙を書きましょう。

字が苦手な子は絵でもいいです。

相手と一緒にいて嬉しかったこと、良かったこと、「ありがとう」の気持ちになることを思い出して描いてみましょう。

ハートマークをいっぱいつけるのも良いですね。

きれいに封筒に入れて渡してあげましょう。直接渡せない人には郵便で送るのも良いですね。

６月１３日　使徒言行録２０章１７〜３８節　　【分級展開例Ｂ】

みことばの恵み

・エフェソとミレトスはどのくらい離れているでしょう。歩いて往復するとしたら、どのくらいかかるでしょう。
（新共同訳聖書巻末付録の地図は縮尺が小さいですが、大体の距離はわかります。聖書地図などがあれば確認してみましょう。両都市間は、直線距離で50km ほど、道のりでは80km ほどです）

・パウロはどうしてエフェソの長老たちと会いたかったのでしょう。23節、29〜30節などから、パウロとエフェソ教会を待ち受けている心配事を挙げてみましょう。

・パウロはその心配事に対してどうすべきと考えているでしょうか。
27，28節、31，32節

・パウロはエフェソの人たちのために何をしてきたでしょう。またこの時は何をしたでしょう。20，21節、27節、31節、33〜35節

６月１３日　使徒言行録２０章１７～３８節　　【分級展開例Ｃ】

みことばの恵み

神さまが私たちに信仰の恵みを与えてくださる方法として、最初に挙げられているのは「みことば」です。礼拝の中で、「みことば」はどこで与えられるでしょう？

みことばの恵みは、何か新しいことを知る時の喜びに似ています。

新しいことを知った時、私たちは今まで自分が知らなかったこと、間違って覚えていたこと、勘違いしていたことを知ります。分からなかったり、疑問に思っていたことが解決します。「なるほどそうだったのか！」と言う驚きがあるでしょう。みことばもそうです。

もう一つ、知っていたはずなのに忘れていたこと、ぼんやりしていたことを改めて思い出したり、間違いないことを確かめたりして、「やっぱりそうだった！」と安心することもあるでしょう。これもみことばの恵みです。

聖書を読んだり、説教を聞いたりして「あ！　そうか」と思ったことってある？

みことばが恵みになるために、私たちの側でもちょっとしたコツがあります。

一つは準備することです。礼拝の時に、他のことが気になって礼拝に集中できないことがないですか？そうならないように、宿題を済ませておくとか、見たいテレビを録画しておくとか、前の晩しっかり寝ておくとか、大切ですよね。できれば前の日に翌日の聖書を読んでおくといいですね。

もう一つは、終わった後です。みことばに「愛しなさい」と書いてあったら、礼拝の後実際に愛し合うことが大切です。上手くいかないこともあるかもしれません。なんでだろう？と考えてみる。他の聖書の箇所も読んでみることが大切です。

最後にもう一つ、一番大切なコツを教えましょう。

それは神さまにお祈りすることです。みことばは神さまの言葉ですから、神さまが助けてくださって分かるんです。「神さま、みことばがわかるようにしてください」とお祈りするのが、とても大切です。

この後、大人の礼拝でみことばを聞きます。お祈りしましょう。

６月２０日　マタイによる福音書２８章１８〜２０節、子どもと親のカテキズム問５０【解説と黙想】

礼典の恵み

礼典と救いの関係

聖礼典（洗礼･聖餐）とは何でしょうか。それは私たちの弱い信仰を支える柱のようなものです。それ自体に魔術的な効力があるのではありません。ですから、聖礼典を受けていれば自動的に神の祝福を受けることができると誤解してはなりません。洗礼にしろ、聖餐にしろ、形式的にでも受けていれば良いというのではありません。それらを受ける時には、こちらの信仰が問われます。礼典と信仰は常にセットで現される必要があります。

洗礼は、自覚的・主体的な信仰生活を始めるための最初の一歩です。聖餐は、その信仰をもって受けて初めて、その者に効力をもたらし、信仰を支えます。そして、この二つにはキリストの祝福が限りなく与えられています。洗礼を受ける時にも、聖餐に与る時にも、私たちはその二つの礼典をキリストの祝福のゆえにいただいているということを深く覚え信じることが大事です。私たちにキリストの祝福が与えられており、また聖霊が私たちのうちに働いてくださることによって、礼典は私たちの内に意味のあるものとなります。

礼典は必要なのか

さて、信仰や救いの事柄を、神と自分との一対一の個人的な関係と考え、神と自分との間に教会が立ち入ること、教会という組織の中で信仰を育むことに対して、違和感を覚える人たちがいます。そういう人たちにとっては、洗礼も聖餐も不思議なことのように思えるかもしれません。洗礼や聖餐それ自体に救いの効力がないと言うのであれば、なぜ、私たちはそれを受ける必要があるのでしょうか。おそらくこうした疑問は子どもたちの中にも湧いてくることでしょう。

そこで覚えておきたいことは、この礼典は、私たちの弱い信仰を支えるために、キリストがお定めになられたものだということです。それは、あってもなくてもどちらでも良いというものではありません。守っても守らなくてもどちらでも良いというものでもありません。それなくして、私たちは神への信仰を保つことができないほどに弱い存在なのです。その信仰の弱い私たちを助けるためにこそ、キリストは礼典をお定めになられ、さらにその礼典を守り、受け継ぐようにとお命じになられたのでした。主のお命じになられたことを、私たちが自分自身の勝手な判断でないがしろにしてはいけません。「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。」(ヨハネ14:23b)、「神を愛するとは、神の掟を守ることです。」(Ⅰヨハネ5：3)。

二つの礼典

かつて教会には、多くの礼典がありました（今でも多くの礼典を有する教会があります）が、改革派教会はそれを２つに限定しました。その理由は、聖書的根拠があるかどうかでした。キリストが明白に定めら

れた御言葉があることと、そこで約束されているものの象徴、物質的しるしがあるものが礼典です。そしてそれは洗礼と聖餐です。

これらはキリストがご自身の血によって締結された「新しい契約」（エレミヤ31：33、32：40、エゼキエル36：26）を象徴し、そこで約束されたものを確証するしるしです。それが見える形で表わされるのは、私たちの理解を助けるためです。また繰り返しあずかることで、契約の確かさを信じることができるためです。

私たちは洗礼を受ける時、額に水を注がれます。聖餐によってパンを噛み砕き、杯を飲み干します。そうすることで、キリストに結ばれて受ける救いの確かさと恵みを実感し、また信じることができます。たとえ、自分の信仰が不安定な状態にあったとしても、周囲の環境に惑わされているとしても、あらゆる困難と恐れに見舞われているとしても、これらの目に見えるしるしにあずかることで、私たちはキリストによる救いと恵みを客観的に確信することができるのです。私たちは自分の信仰の弱さに日々悩まされます。自分の信仰のなさに神の御前で恥ずかしさを覚えます。しかし、その信仰に頼るのではなく、神がキリストを通して結ばれた契約に基づいて、私たちの救いが起こるということに目が向けられます。それを私たちに教えてくれるのが礼典なのです。 （三川共基）

《参照聖句》 ヨハネによる福音書１４章２３節、エレミヤ書３１章３３節
《教理問答》 ウェストミンスター小教理問答問９１～９３、ウェストミンスター大教理問答問１６１～１６４、ウェストミンスター信仰告白２７章

６月２０日　マタイによる福音書２８章１８～２０節　　**【説教展開例】**

礼典の恵み

◇…… **単元のねらい** ……◇

洗礼と聖餐にあずかることで与えられる救いの確信に心の目が開かれる。

「洗礼、聖餐、なんで必要なの？」

①大人だけずるい！

みんなは日曜日の礼拝に出て、「大人だけずるい！」と感じたことはありませんか？　子どもには「礼拝堂でお菓子を食べてはいけません！」と言いながらも、大人だけはときどき、何か礼拝の時に食べているものがありますよね。そう、パンとぶどうジュースです。先生もみんなと同じくらいの年齢の時、月に一度行っている聖餐式がとてもうらやましく感じました。だって、とてもおいしそうに見えるんですもの。

大人たちがパンを食べ、ぶどうジュースを飲み干すと、その後にはお祈りをしています。ある時、そのお祈りをしていて、大人たちがみんな目をつぶっている時、先生はこっそり、お母さんのちょっと飲み残したぶどうジュースをなめてしまおうとしました。残念ながら、見つかってあとで怒られてしまいましたが、それくらいにあのパンとぶどうジュースっておいしそうですよね。大人だけ、ずるい！

でも、その時、お母さんに怒られたことで、先生は初めてその聖餐式というのがとても大事なものであると知りました。あれは、子どもたちに「ずるい！」と思わせるために食べたり飲んだりしていることではないんですね。もっと大事な意味があるのです。

②礼典の意味

この聖餐式に参加するためには、何が必要か知っていますか？　そう、洗礼を受けることです。洗礼を受けて、イエスさまを信じていることをみんなに告白した人が、このパンとぶどうジュースをいただくことができるのですね。教会では、この「洗礼」と「聖餐」の二つをとても大事に考えています。この二つ無しには、神さまとの大切な関係を保つことができないからです。だから、イエスさまも天にお昇りになられる時、洗礼を授けること（マタイ28：18～20）と、また十字架につけられる前に、聖餐を行うこと（マタイ26：26～29）を、弟子たちにお命じになられたのでした。

イエスさまはどうしてこの「洗礼」と「聖餐」をするようにお命じになられたのでしょうか。それは、私たちの信仰が弱いからなんです。きっとみんなはイエスさまのことをとても大好きでしょう。これからも神さまとたくさんの時間を過ごしていきたいと考えていることでしょう。それはとても大事なことです。教会に来ている人はみんな同じことを考えています。でも、そうは思っていても、イエスさまのことだけを考えていたいと思っても、そうできない時があります。

お友だちと喧嘩をしてしまった時、私た

ちはとても悲しい気持ちになります。大切な宝物を失くしてしまった時、とても不安な思いで心がいっぱいになります。そういう時、「なぜイエスさまは私を助けてくださらないのですか？」と思うことがあります。イエスさまを信じているはずなのに、これからももっと大好きでいたいのに、そのイエスさまのことを信じられなくなってしまう、そんな時がもしかしたらやってくるのかもしれません。

でも、そんな私たちの信じる心を助けるために、「洗礼」と「聖餐」があるのです。お友だちと喧嘩をしても、宝物を失くしても、洗礼を受けることはできますし、聖餐でパンとぶどうジュースをいただくことはできます。そして、その二つのことをちゃんと見て、味わって、感じることができるのと同じように、イエスさまはあなたのことを今もとても大事に思っておられます。ぜひ、あなたも洗礼を受け、聖餐でパンとぶどうジュースをいただいて、イエスさまとこれからも長くずーっと一緒にいられるようでいてください。 （三川共基）

《今週の暗唱聖句》

感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。

（コリントの信徒への手紙一１１：２４）

６月２０日　マタイによる福音書２８章１８～２０節　　【分級展開例Ａ】

礼典の恵み

みんなは「れいてん」って知ってます？「せんれい」「せいさんしき」は知ってるかな？こんなのです（写真を見せる）。

○○くんや△△さんは、お父さんやお母さんも教会に来ているから、赤ちゃんの時に洗礼を受けているんですよ。

※※さん、☆☆くんは、まだですよね。

聖餐式は見たことあると思います。小さいパンと小さいぶどうジュースをいただくんですよね。

洗礼式や聖餐式にはこんなお約束がありますからみんなも覚えておいてください。

「洗礼式のお約束」

・大人は、神さまを信じることを約束した人が受けられる。
・子どもは、お父さんお母さんが、神さまを信じる子供に育てることを約束した人が受けられる。
・子どもで洗礼を受けた人は、大きくなってから、神様を信じることを約束する「信仰告白式」をする

「聖餐式のお約束」

・大人で洗礼を受けた人、子どもで洗礼を受けて信仰告白をした人が受けられる。
（みんなはまだ食べることができません。もう少し待っててね）

６月２０日　マタイによる福音書２８章１８～２０節　【分級展開例Ｂ】

礼典の恵み

洗礼と聖餐式について、下の聖書箇所などを確かめてみましょう。

洗礼

マタイによる福音書28章19，20節
使徒言行録 2 章38～40節

聖餐

マタイによる福音書26章26～29節
コリントの信徒への手紙一11章23，24節

・洗礼式や聖餐式を見たことがありますか？　どんな風でしたか？
・洗礼式や聖餐式はどんなところが良いと思いますか？
（次週以降、各礼典について掘り下げますので、今回は知っていることを確認する程度に留めておくと良いでしょう）

６月２０日　マタイによる福音書２８章１８～２０節　　【分級展開例Ｃ】

礼典の恵み

神さまが、礼拝において私たちに恵みを与える方法について、先週「みことば」と「礼典」と「祈り」という三つがあることを先週確かめました（「子どもと親のカテキズム」問48参照)。今日はその二つ目、礼典について確かめましょう。

・礼典は二つある

礼典は「洗礼」と「聖餐（主の晩餐)」の二つがあります。カトリック教会などでは、もっとたくさん礼典としますけれど、次の理由から、私たちは礼典は二つだけと考えます。

・礼典はイエスさまが直接命じた

洗礼はマタイ福音書28：18～20、聖餐は26：26～29などで命じられていることが伝えられています。

・礼典はみことばとセットで用いられる。

礼典は、おまじないや魔法のように効果があるのではありません。むしろ、みことばによって正しく教えられなければ、間違いの原因になってしまいます。

逆に正しく礼典を用いるとみことばをもっと豊かに、もっと確かにすることができます。

・礼典は信仰によって正しく用いられ、信仰に力を与える。

礼典は、誰でも参加できるわけではありません。礼典の行為や物品や施す人が何か特殊な能力を発揮するのではありません。信仰を持つ人が受ける時、神さまが働いてくださって、「恵みを与える方法」として用いてくださるのです。

信仰を言い表して礼典を受ける日が来るように、楽しみにしましょう。

６月２７日　ガラテヤの信徒への手紙3章26～29節、子どもと親のカテキズム問51【解説と黙想】

洗礼の恵み

○洗礼とは

問51では洗礼について教えられています。洗礼とは、父と子と聖霊の名によって行われる水の洗いです。水が体の汚れを洗い落とすように、水を注ぎかけられた人がキリストの十字架の血によってきよめられたことが示されます。こうして、キリストに結ばれ、罪赦され、永遠の命が与えられ、神の子とされるというあらゆる救いの恵みがその人に与えられていることが明らかになるのです。

また、洗礼はただ一度の恵みです。救いは神の御業だからです。洗礼を受け救いが示された後もなお、受洗者は罪人であり弱さの中にあります。それでも、神の救いの御業が失敗したり、途中で頓挫することは決してありません。洗礼がだだ一度の恵みであるということは、人の側の不確かさを超えて、洗礼に示された神の救いが確かであることを示しています。

○恵みによる救い

このことは、洗礼によって示される救いが、人の側の行いを根拠とするものではないことも示しています。このことがガラテヤ書3章全体の大きなテーマともなっています。そのなかで、26節から洗礼のことが述べられているのです。洗礼の水に示されているキリストの血の洗いによって私たちが救われたという事実は、私たちを救ったのは自らの行いではなくただ神の恵みによることをも表しているのです。

○キリストを着る

ガラテヤ3：27では、洗礼を受けることがキリストを着ることであると記されています。それほどまでに洗礼を受けた者は皆、キリストと固く結ばれるのです。キリストを着ることによって、中身はどれほど罪深い者であっても外身はキリストに包まれます。こうしてキリストが十字架上で血を流された受けられ苦しみがあたかも自らがしたかのようにみなされるとともに、その後の復活の恵みにも与る者とされるのです。こうして神の御前に罪赦されて救われるのです。このことのしるしが洗礼です。そしてキリストは、洗礼を受けて救われた教会のメンバーのユニフォームなのです。

○結果としての平等と平和

洗礼を受けた人は皆キリストという同じユニフォームを着ていますから、ユダヤ人やギリシア人と言った出自や、奴隷や自由の身分といった社会的な地位や、男や女といった性別の違いは関係ありません（28節）。一般社会では、このような区別があたかも人の価値を決めるかのように理解されています。そこから差別や偏見が生じます。しかし洗礼を受けたすべての人は、ただ恵みによってキリストを着させていただいて救われたのです。そこに、優劣の差はありません。ですから洗礼を受けたという事実を前にして、自らをいたずらに卑下したり、自らの優位を主張することはだれもできません。ここに、キリストにある真の平等と平和が実現します。　（三輪　誠）

《参照聖句》　ローマの信徒への手紙６章４節、テトスへの手紙３章５節
《教理問答》　ウェストミンスター小教理問答問９４、ハイデルベルク信仰問答問７０

６月２７日　ガラテヤの信徒への手紙３章２６～２９節　　【説教展開例】

洗礼の恵み

◇…… **単元のねらい** ……◇

洗礼をとおして私たちは、自らの持つ何かによってではなく、ただ神の恵みによってキリストの死と復活に結ばれて神の子とされている。この事実をとおして、自分と誰かを比べることなく、恵みによって救われた安心の中で歩むことができる幸いを伝える。

恵みが表される洗礼

イエスさまがお定めになった礼典として、洗礼と聖餐があることを先週学びました。そのなかでも問51では、洗礼について教えられています。

問51　洗礼とは何ですか。
答　父･子･聖霊なる神さまの御名によって行われる水の洗いです。洗礼は、イエスさまと結び合わされ、罪赦され、永遠の命が与えられ、神さまの子どもとされたことを示す礼典です。

まず洗礼が、父と子と聖霊なる神さまのお名前によって行われる水の洗いだということが教えられています。このなかで、洗礼式を見たことのある子はいるでしょうか。見たことがある子は思い出してみてください。洗礼式では、問51の答で教えられているように、牧師先生が「父と子と聖霊の御名によって洗礼を授ける」と言った後に、洗礼を受ける人に水が注がれます。

みんなはシャワーを浴びたりお風呂に入ったりして、水で体の汚れを落としますね。洗礼式で注がれる水も、これと似たような意味があります。イエスさまが十字架で流してくださった血によって、私たちの罪は洗い流されました。このことが、洗礼式で水を注ぐことによって示されるのです。

洗礼によって、水を注がれた人がイエスさまと結び合わされ、罪赦され、永遠の命が与えられ、神さまの子どもとされたことが示されます。一言でいえば、神さまがその人を救ってくださったということが、洗礼によって示されるのです。

この洗礼は、ただ一度だけの恵みです。このなかで、幼児洗礼を受けている子はもう洗礼を受ける必要はありません。なぜなら救いは神さまの御業だからです。私たちは、洗礼を受けたとしても罪がなくなるわけではありません。ときに迷ったり疑ったりしてしまうこともあるのです。幼児洗礼を受けた子は、みんないつも神さまにしたがって生き続けることができるかといえば、それは無理です。先生も無理です。私たちは、それほど弱いのです。しかし、救いはどこまでも神さまの恵みの御業です。そして神さまは、「あなたを救う」とお決めになったら途中でやめたり諦めたりすることは決してありません。だからこそ、洗礼によって示された神さまの救いが、取り消されることはありません。だから救いが

示される洗礼は、ただ一度の恵みなのです。それは、最後の一回という意味ではなく、神さまの御業が確かだという意味での一回です。

このように洗礼によって示される救いがどこまでも神さまの御業なのです。このことは、言い方を変えると、救いは私たちの力や行いによって与えられるものではないということです。私たちが神さまのために何かしたから、神さまが私たちを救ってくださったのではないのです。

今日の聖書個所はガラテヤの信徒への手紙 3 章です。今日読んだ箇所だけではわかりにくいかもしれませんが、3 章全体で示されているのは「私たちは自分が何かをしたからではなく、イエスさまの十字架に示された神さまの恵みによって救われたのだ」ということなのです。その証拠の一つとして挙げられているのが、今日の箇所に記されている洗礼なのです。

ここには洗礼を受けた人が、キリストに結ばれて、キリストを着ている人だと記されています（27節）。みんなの学校には制服はありますか。サッカーや野球をやっている子は、同じチームであることを示すためにユニフォームを着ることもあるでしょう。着ている服によって、通っている学校や入っているチームがすぐに分かります。洗礼を受けるということは、十字架にかかってくださったイエス・キリストという制服、ユニフォームを着ることなのです。そして、あたかもキリストを着た人自身が十字架にかかって罪の償いをしたかのように、神さまは罪を赦してくださるのです。そして、イエスさまが復活されたように、キリストを着ている人をも神さまは復活させてくださいます。洗礼を受けた人は、それほどまでにイエスさまと固く結ばれていることが示されるのです。

洗礼を受けた人の性格や、能力や、年は様々です。教会に集まっている人たちを見ても、いろいろな人がいるでしょう。でも洗礼を受けた人は、イエスさまに結ばれて救われたということには変わりありません。道端で制服やユニフォームを着ている人を見たら、その人の性格はどんな人だろうとかあまり考えないと思うのです。あの人はあの学校の人なんだな、この人はあのチームのメンバーなんだな、と思うだけでしょう。同じように、洗礼を受けた人は、中身はどうあれ十字架にかかってくださったイエスさまに結ばれて救われたということは、みんな同じなのです。

このことについて、28節では洗礼を受けてキリストを着た人がこんな風に言われています。

「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」

みんなイエスさまというユニフォームを着ていますから、イエスさまの十字架によって救っていただいたということにおいて、どこで生まれたかとか、偉い人か偉くない人かとか、男の子か女の子かで、違いはないのです。

教会の外ではきっとそうではないと思うのです。テストで高い点を取れる子がすごい。偉くなって沢山お金を稼いだ人は成功者だ。自分の国が一番だ。そんな風に言われています。そして誰かと自分を比べて、自分はダメだと思ったり、あいつよりは自分は上だと思ったりするわけです。でも洗

礼を受けてイエスさまというユニフォームを着たならば、もう誰かと比べて上か下かと考える必要はありません。なぜなら、誰も自分の力や行いで救われていないからです。みんな、本当なら救いに相応しくないのに、神さまの恵みによって救われたからです。

洗礼によって示されるのは、私たちが能力とか頭の良さといった自分が持っているものではなく、ただイエスさまの十字架によって救われたということです。自分を振り返ると、ときに「こんな自分は救われる価値がないんじゃないか」と思うときがあるかもしれません。でも神さまは、そんな私にもイエスさまというユニフォームを着せて、神さまの子どもとしてくださるのです。これは私たちが神さまの子どもに相応しいからではありません。ただ神さまが、相応しくない私たちをなおも愛してくださったからです。この神さまの愛は、私たちの罪がどれほど深くとも、私たちがどれほど弱くとも、決して変わることはないのです。

（三輪　誠）

《今週の暗唱聖句》

洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。

（ガラテヤの信徒への手紙３章２７節）

６月２７日　ガラテヤの信徒への手紙３章２６～２９節　　【分級展開例Ａ】

洗礼の恵み

手を洗いましょう。

手型を押してその後で手を洗いましょう。

手に水彩絵の具で好きな色を塗って、手型を押してみましょう
手型を押した紙は名前を書いて飾っておくと良いでしょう。

「手が汚れたのできれいに洗いましょう」と汚れを洗うことを強調しましょう。
順番にソープなどで手を洗って手をきれいにしましょう。

手を洗う前と後で写真を撮って見比べるのもいいでしょう。
手を洗うことでキレイになったことを強調して確認しましょう。

６月２７日　ガラテヤの信徒への手紙３章２６～２９節　　【分級展開例Ｂ】

洗礼の恵み

洗礼について、聖書の中で書かれていることを確かめてみましょう。
洗礼とは誰がどんなことをしますか、その意味は何でしょう。
またどんな恵みがあるでしょう。

マタイによる福音書 3 章13～17節	イエス様の洗礼
ヨハネによる福音書 3 章22節	イエス様が洗礼を授ける
使徒言行録 2 章38節	「洗礼を受けなさい」
使徒言行録 8 章12節	男も女も信じて洗礼を受けた
使徒言行録 8 章16，17節	洗礼を受けると聖霊を受ける
使徒言行録 8 章38節	外国人の宦官も洗礼を受けた
使徒言行録 9 章18節	ユダヤ人サウロも洗礼を受けた
使徒言行録16章15節、33節	家族も洗礼を受けた
ローマの信徒への手紙 6 章 3 ～ 5 節	キリストの死と復活にあやかる
コリントの信徒への手紙一12章13節	一つの霊を受け、一つの体とされる
ガラテヤの信徒への手紙 3 章27節	キリストに結ばれ、キリストを着る
ペトロの手紙一 3 章21節	正しい良心を願い求める

６月２７日　ガラテヤの信徒への手紙３章２６～２９節　　【分級展開例Ｃ】

洗礼の恵み

今週と来週は、洗礼について考えます。今週は大人の洗礼、来週は子どもの洗礼です。
みんなは、洗礼を見たことがあるかな？
２年前のクリスマスに◯◯さんが、洗礼を受けましたが、覚えていますか？

洗礼って、どんなことをするか説明できますか？
洗礼には、大きく分けると二つのやり方があります。私たちの教会でよくやるのは「滴礼」です。他に「浸礼」というやり方があります。どちらも洗礼です。
(できれば、写真などを見せることができると説明しやすいでしょう)

洗礼にはいくつかの意味があります。一番わかりやすい意味は、洗礼を受けた人がクリスチャンということです。洗礼は教会への入会の手続きです。「教会員」の人はみんな洗礼を受けています。どんなに長く教会に来ていても、洗礼を受けていない人は教会員ではありません（マタイ福音書28：19参照)。

洗礼は､私たちの罪を神さまが洗い流してくださることを意味します｡みんなも家に帰ったら手を洗うよね。寝る前にはシャワーを浴びて体を洗います。そんなふうに神さまが私たちの罪を洗い清めてくださることを思い出すのが洗礼です（ヨハネ福音書13：1～11参照)。

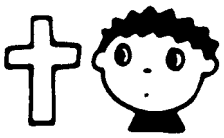
洗礼は、私たちに神さまが聖霊を注いでくださることを表しています。神さまを信じた私たちに精霊なる神さまがいつも一緒にいてくださることを忘れないようにするためです(使徒言行録2：38参照)。頭に水を注ぐ滴礼はそのことを強く表現します。

洗礼は、罪ある私たちが死に、霊によって新しく生まれることを表しています。特に一度体全体を水に沈める浸礼は、そのことを強く表します（ヨハネ福音書3：5～8)

今度洗礼がある時は、注意してみてみましょうね。

4月4日

イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」【ヨハネ 20:29】



4月11日

どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。

【テサロニケ一 5:23】

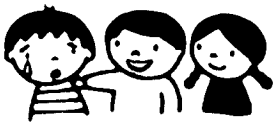
4月18日

もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活 () の姿にもあやかれるでしょう。 【ローマ 6:5】

4月25日

あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。

【コリント一 12:27】

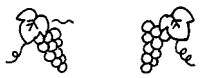


5月2日

わたしは魂を沈黙させます。わたしの魂を、幼子のように母の胸にいる幼子のようにします。 【詩編 131:2】

5月9日

だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。 【マタイ 28:19, 20】



5月16日

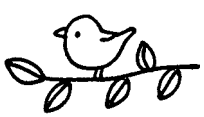
そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。

【ヨハネ 20:19】

5月23日

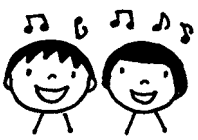
あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。

【使徒 1:8】



5月30日

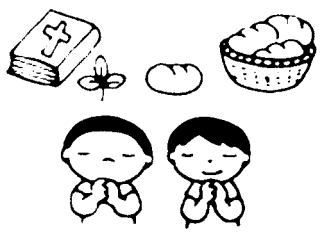
今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。 【ネヘミヤ 8:10】



6月6日

彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。

【使徒 2:42】



6月13日

だから、あらゆる汚れやあふれるほどの悪を素直に捨て去り、心に植え付けられた御言葉を受け入れなさい。この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。

【ヤコブー 1:21】

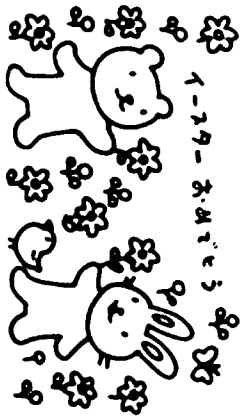
6月20日

感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。 【コリントー 11:24】

6月27日

洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。

【ガラテヤ 3:27】



2021年７～９月カリキュラム（第82号）

―救済史に基づく２年サイクル　第１年―

月　日 教会暦・行事		子どもと親のカテキズム	参照教理問答
	主　　題	聖書箇所	暗唱聖句
	単元の目標		
７月４日	幼児洗礼の恵み	問52	ウ小95
		使徒16：16－40	使徒16：31
	神さまは契約を守り幼い者をも救いの約束に加えて下さる		
７月11日	聖餐の恵み	問53	ウ告白29章、ウ大168－177、ウ小96
		マタイ26：26－30	マタイ26：26
	キリストの十字架の恵みを共に祝い、待ち望む		
７月18日	信仰告白を目指して	問54	ウ告白29章8節、ウ大171－173、ウ小97
		コリント一11:23～29	コリント二13：5
	共に聖餐の食卓に与れるように祈ろう		
７月25日	恵みの方法としての祈り	問55	ウ告白21章、ウ大178、ウ小98
		マタイ18：18－20	マタイ18：20
	祈りつつ御国への道を歩んでいこう		
８月１日	感謝して歩む	問56	ウ小39、ハイデ86
		ルカ17：11～19	詩編107：15
	与えられた救いの恵みと感謝をもって応えることの大切さ		
８月８日	感謝の生活の規準	問57	ウ小2,3、ハイデ86～91
		サムエル上15:1－34	ヤコブ1：22
	聖書に従い感謝の生活を送ることは堅い土台を据える確かな生き方		
８月15日 平和主日		－	－
８月22日	感謝の道しるべ・ 十戒	問58	ウ小39～41、ハイデル86, 87
		申命記5：1－22	申命記4：13
	神さまの愛の表れである十戒が示される		
８月29日	十戒の心・ 神と人を愛する	問59	ウ小41，42
		マルコ12：28－34	ヨハネ一3：16
	神の愛を受け、神と人を愛して歩む		
９月５日	十戒の心・ 父の愛の戒め	問60，61	ウ小43，44、ウ大101
		出エジ12：1－36	出エジプト20：2
	神の恵みに応え十戒に生きよう		
９月12日	第一戒 神のみを神とする	問62，63	ウ小45～48、ウ大103～106、ハイデ95
		申命記6：1～15	申命記6：4，5
	ただ一人のまことの神さまがだけにお仕えしよう		
９月19日	第二戒 偶像礼拝とは何か	問64，65	ウ小49－52、ウ大107－110、ハイデル96－98
		出エジ32：1－35	ヨハネ4：23－24
	目に見えない神さまをみ言葉に従って礼拝しよう		
９月26日	第三戒 神の御名	問66，67	ウ小53～56、ウ大111～114
		出エジ3：1－22	ガラテア4：6
	主の御名をおそれつつ愛をこめて呼びかけよう		

大会教育委員会

「教会学校教案誌」

継続発行のための

50万円 自由募金のお願い

弊誌のためにお祈りとご購読をもってお支え下さいます事を、心から感謝するとともに御礼を申しあげます。

大会教育委員会の重要な使命と任務は、日本キリスト改革派教会独自の教案を作成することです。そのために委員会は、なにより「内容」を磨くことに全力を注いでおります。しかしそのためには、教案誌の「安定的発行」が不可欠です。

かつて執筆者には1000円の図書券を贈呈し、最低限の礼を尽くしてまいりました。現在は、何の御礼もさしあげていません。ひとえに誌代を維持したいからです。ギリギリの厳しい状況がつづいています。自由募金に積極的にご参加ください。

教会だけではなく、**個人**としてのご協力をも伏してお願い致します。

Soli Deo Gloria!

※ 購読申し込みは、西堀　元（熊本伝道所：　✉boribori89@gmail.com）
〒862-0924 熊本県熊本市中央区帯山２－13−74　℡ﾌｧｸｽ (096)382-7630）
お問い合わせは、相馬伸郎（iwanoue@me.ccnw.ne.jp）まで。

目標金額　５０万円

送 金 先　郵便振替 00190 - 4 - 451670

日本キリスト改革派教会大会教育委員会

大会教育委員会　出版物ご案内

神さまと共に歩む道

「子どもと親のカテキズム」解説

牧田吉和・監修

聖書の信仰を「神さまと共に道を歩む」という動的な概念で位置付けたユニークな信仰問答として親しまれている「子どもと親のカテキズム」。そのカテキズムを信仰的対話の土台として用いるための最良の手引き。（帯より）

定価：2,000円
（改革派内の方は消費税分・送料無料）

既刊書籍

子どもと親のカテキズム
―神さまと共に歩む道―
定価：500円

信徒の手引き
定価：2,200円
（改革派内価格：2,000円）

申し込み先：rcjkyoiku@gmail.com

〈あとがき〉

●コロナ禍の中で､主日礼拝式はもとより、さまざまな集会が制約を余儀なくされているかと思います。弊誌発行の志の大きな一つに、子どもたちへの伝道の課題に真正面から取り組むことがありました。コロナの影響を厳しく受けるのは、もともと弱い立場の人々であることは、悲しい現実です。とりわけ子どもたち、中高大学生たちへの影響は計り知れないものがあると思います。自死が増えているとの報道がそれを物語っています。私たちにできることは何でしょうか。なすべきことは何でしょうか。「できることは何でもしたい。すべきことは、必ずしたい」そのような思いを促すのは、神の言葉そのものです。読者の皆様、お一人お一人が、コロナに負けない奉仕の道を進み行かれますようにと祈ります。また、そのような祈りを集めたいと願います。（相馬伸郎）

●今号から最後のシーズンの連載が始まりました。

「執事職について」は、2018年度（69〜72号）の「長老職について」「執事職について」、2019年度（73〜76号）の「牧師職について」、2020年度 (77〜80号) の「長老職について」に続き、役員についての学びの最後になるものです。ぜひ各教会で御用いください。

「献身のすすめ」は、若い方にとどまらず全教会員への呼びかけです。

大会教育委員のメンバーも「これからの教会学校」という主題で一文を寄せる予定です。ぜひご一読ください。

●今月の「献身のすすめ」は、神学校教授の袴田先生に執筆いただきました。文中に入船尊先生の懐かしいお名前がありました。インドネシア宣教から戻られて、当時は神学校の学監をされていた頃かと思います。（長田詠喜）

※バックナンバーを御希望の方は下記までご連絡ください。

長野佐久伝道所　牧野信成
〒385－0051
長野県佐久市中込3－9－1
Tel & Fax：0267－62－2409
E － mail：rcjnaganosaku@gmail.com

執筆者一覧

まえがき
　辻　幸宏（大宮教会牧師）
巻頭説教
　新井主一（高島平キリスト教会牧師）
障がいある子どもたちに注がれる主の愛(2)
　小澤路華（高知教会）
執事職について（1）
　吉田　実（但馬みくに伝道所宣教教師）
これからの教会学校
　西堀　元（熊本伝道所宣教教師）
献身のすすめ　私はなぜ牧師になったのか
　袴田康裕（神戸改革派神学校教授）
信仰告白のあかし　全国の若き信徒への手紙
　井上佑斗（長丘教会）

イラスト作画
　表紙　中村未生（春日井教会・IBUKI）
　　高橋乃亜（湘南恩寵教会・IBUKI）
　聖句カード
　　岡野美佳（青葉台キリスト教会）

聖書黙想・説教展開例
　大宮季三　（芸陽教会牧師）
　小澤寿輔　（高知教会牧師）
　柏木貴志　（岡山教会牧師）
　高内信嗣　（山田教会牧師）
　小橋口貴人（那加教会牧師）
　常石召一　（大阪教会牧師）
　袴田清子　（灘教会）
　長谷部真　（堺みくに教会牧師）
　牧野信成　（長野佐久伝道所宣教教師）
　三川共基　（松戸小金原教会牧師）
　宮崎契一　（休職教師）
　三輪　誠　（浜松伝道所宣教教師）

分級展開例
　小川　洋　（高松教会牧師）
　長田詠喜　（新所沢教会牧師）
　西堀　元　（熊本伝道所宣教教師
　牧野信成　（長野佐久伝道所宣教教師）

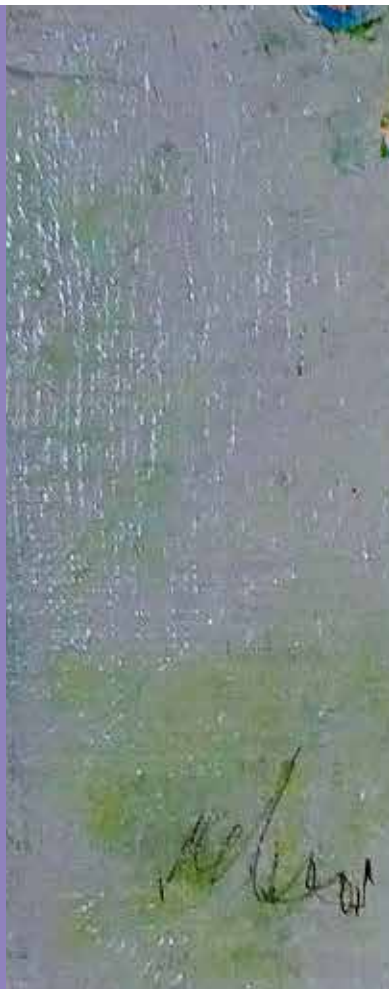
編　集　部

相馬伸郎（長）	名古屋岩の上教会牧師
牧野信成	長野佐久伝道所宣教教師
長田詠喜	新所沢教会牧師
西堀　元	熊本伝道所宣教教師
小川　洋	高松教会牧師

日本キリスト改革派　大会教育委員会『教会学校教案誌』 第81号
2021年 4・5・6 月号（季刊）
2021年 3 月 1 日発行

発　行　日本キリスト改革派教会　大会教育委員会
発行所　日本キリスト改革派教会　大会教育委員会
名古屋岩の上教会　牧師　相馬伸郎
〒458-0021　愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
Tel/Fax 052-895-6701
郵便振替口座　00190-4-451670「日本キリスト改革派教会大会教育委員会」
編集･印刷　株式会社あるむ
頒価　900円（本体価格）

Reformed Church in Japan
Board of Education



２０２１年４～６月号（２０２１年２月２５日発行）　発行：日本キリスト改革派　大会教育委員会